

【人文学】

研究論文

ロドニー・パワーズの孫がみたパワーズ商会と長崎居留地

中島 恭子^{*1}

Rodney H. Powers and the Nagasaki Foreign Settlement

as Seen by his Grandson

NAKASHIMA Yasuko

Summary

Rodney H. Powers (1836.5.5–1909.8.9) ran a successful business in the Nagasaki Foreign Settlement for almost forty years through the Meiji Period of Japan, with a peak during the 1880s and 1900s. Sugimoto Masao was his only grandchild, but his mother Toyo separated from Powers before giving birth. Recently, it was found that Masao left a hand-written manuscript, titled *Haha-no-zanzō* (The Afterglow of my Mother)," which had been unattended for years. The manuscript provides significant new material for research on the Nagasaki Foreign Settlement. The present article analyzes the content of the manuscript and the activities of Rodney H. Powers as seen by his only grandson. The results will help to clarify the realities of life and work in the Nagasaki Foreign Settlement.

Keywords : (R. H. Powers, Nagasaki Foreign Settlement, ロドニー・パワーズ, 杉本正男, 長崎外国人居留地)

1. はじめに

ロドニー・パワーズ (Rodney H. Powers; 1836.5.5–1909.8.9) は、長崎居留地で成功したアメリカ人である。1868 (明治元) 年に長崎来航、R・H・パワーズ商会を興して 1909 (明治 42) 年に没するまでの約 40 年間にわたり、食料品販売やオークションなど幅広い事業を営み繁栄した (図 1)。パワーズは明治期長崎を代表する貿易商であったが、商会は彼の死後まもなく解散して一代限りで消失し、詳細はいまだ不明な点が多い。

パワーズとその家族に関する既往研究として、レイン・アーンズ/ブライアン・バークガフニ¹、レイン・ア



図 1 R・H・パワーズ商会 (個人蔵)

^{*1} 共通教育部門 非常勤講師、地域科学研究所 客員研究員

2022 年 9 月 30 日受付

2022 年 12 月 7 日受理

ーンズ²、木下孝³、浜崎国男⁴がある。パワーズの孫である杉本正男（1897.7.30－1986.3.30）の名前は、浜崎のみに、資料提供者として氏名だけが記されている。正男は、ロドニーの息子ジョン・パワーズ（John R. Powers; 1870.3－1907.11.12）と杉本トヨ（1872.11.5－1955.8.4）の間に生まれた。そしてジョンは、ロドニーと一人目の日本人妻である船木サト（1854－1909.5.6）の息子である⁵。

筆者は拙稿⁶において、彼の二人目の日本人妻であった飯田ナカと娘マサを主とするパワーズの家族について、飯田家の子孫宅に残された写真群を整理し報告した。以来、飯田家子孫の齊藤綾氏とともに、パワーズ家に関する調査を続けてきた。

筆者らは調査の過程において、杉本正男が旧長崎県立図書館に寄贈したパワーズ関係の写真数点が長崎歴史文化博物館（歴史）に収蔵されていることを確認していたが、さらに杉本自身が執筆して寄贈した「母の残像」と題する資料の存在を把握した。パワーズ家の人びとや同商会、長崎居留地について、原稿用紙 210 枚にわたって非常に詳しく記された手書きの原稿が、3 冊に分けて製本されたものである。

長崎居留地に関して、居留者やその子孫自身が書き残した記録は、管見の限り非常に少ない。R・H・パワーズ商会は、長崎の英字新聞と地元紙にそれぞれ英語と日本語の広告を数多く出しているが、商会やロドニー・パワーズという人物についての詳細は不明であった。杉本正男の「母の残像」はこれらを解明するための貴重な新資料である。

長崎外国人居留地研究は、幕末から明治初期における居留地の形成や制度を対象としたもの⁷が代表的であったが、ブライアン・パークガフニによる長崎居留地の外国人に関する研究^{8,9}は、長崎で発行された英字新聞や英国領事館文書を主として用い、個人や家族の歴史とともに同時代の居留地社会を解明する新たな領域を切り拓いた。またその対象時期は 1899（明治 32）年の居留地制度廃止以降や第二次世界大戦前後にも及ぶ通史的研究となっている。パワーズの孫である杉本正男が記した「母の残像」は、明治期長崎居留地の有力貿易商パワーズ家に嫁いだ杉本トヨと、商会や居留地についての詳細な記述であるが、同書にはトヨの回想に正男の記録や考察が

混在しているため精査する必要がある。本稿は、パワーズ家やパワーズ商会および長崎外国人居留地研究の新資料として「母の残像」を用いるために、内容を事項別に整理して提示し検討することを目的とする。

それとともに、居留地研究の重要資料として、杉本家の許可を得て全文をテキストデータ化した「母の残像」を付録として稿末に添付し、筆者が作成した関係図と合わせて提示する。

2. 「母の残像」と基本情報

2.1 「母の残像」来歴

「母の残像」は先述の通り、杉本正男による 400 字詰め原稿用紙 209 枚もの手書きの文書が、3 冊に分けて製本されたものである（図 2）。序文には「昭和 32 年 9 月 1 日」の日付がある。それによると杉本は、1955（昭和 30）年に死去した母トヨから聞いたその「数奇な生涯と経験」を代々に伝えたく、同作の執筆を思い立ったという。



図 2 「母の残像」3 冊（長崎歴史文化博物館蔵）

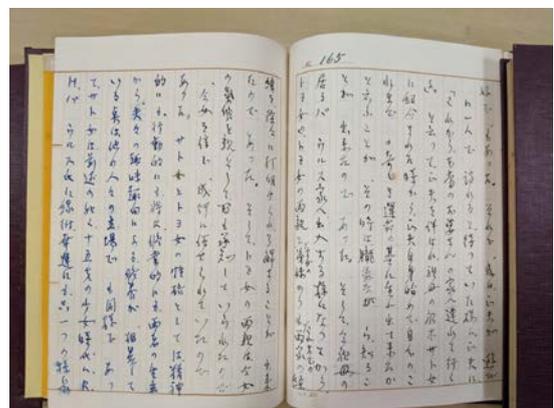


図 3 「母の残像」見開き（長崎歴史文化博物館蔵）

母トヨの優れた芸才や教養を積んだ一生の「実歴伝」と正男は表現しているが、実際にはそれとともに、母が嫁いだパワーズ家や同商会のこと、同時代の長崎居留地の様子や人について記録し後世に残そうとする意図がうかがえる。同書のなかでトヨの話は、正男との談話や、ときには人生訓のようなものとして語られる形で書き進められている。

「母の残像」3冊は1971（昭和46）年に旧長崎県立図書館へ寄贈されたが、その後も修正された形跡がある。起稿から20年も経過した「昭和52年3月7日」という日付の書き込みもあり、杉本が長年にわたって何度も手を入れた原稿とみられる。本論として同書の内容に入る前に、本章ではそこに登場するパワーズ家の関連人物について、まず基本情報として既往研究から整理した内容を以下に示したい。

2.2 杉本正男と母トヨ

(1) 杉本正男

「母の残像」の著者である杉本正男（図4）は、先述の通りパワーズの孫である。ロドニー・パワーズと最初の日本人妻である船木サトを祖父母に持ち、父はロドニーの息子ジョン・パワーズ、母は杉本トヨである。海星中学校を卒業。妻千代子との間に四男三女をもうけた。

正男の生い立ちやパワーズ家との関係については、本稿で報告する「母の残像」のなかで詳しく述べられる。



図4 幼少時の杉本正男（個人蔵）

(2) 杉本トヨ

杉本トヨ（図5）についてはこれまで、生没年と本蓮寺に埋葬されていること¹⁰、長崎市で三味線を教えていたらしいことなど¹¹、わずかな情報しかなかった。トヨの一生はまさに「母の残像」の主題であり、詳しく後述される。ここでは同書を読み進める予備知識として以下に要約を示す。

杉本トヨは長崎市新橋町に生まれ、9人姉弟の長女であった（5人は早世）。両親や妹弟を支える責任と将来の生活のために、幼少の頃から好きな諸芸の修業に励んだ。17歳の頃佐世保鎮守府初代長官のもとに奉公に出る。3年間の奉公を終えて長崎の両親宅に戻った二十歳の頃、ジョンの母船木サトに請われてパワーズ家に嫁ぐ。同家では家族や商会の雇人の日常の世話、対外的な接待役など献身的に働き信頼を受けていた。

正男の前に長男熊定を生んだが、乳母の不注意で死なせてしまう。その後、他人の中傷によって姑サトとの間に誤解が生じ、正男を妊娠中にパワーズ家を出て別居、出産後に離縁した。生後半年の頃に正男を両親に預け、トヨは単身上海に渡り、六三亭など料亭の営業や開業に携わったという。

トヨはやがて現地で出会った日本人男性と結婚し、転勤にともない長崎に戻るが、また朝鮮へと転居する。長崎では正男が暮らすトヨの両親宅の近くに住んだ。正男が15歳の頃に男性と死別して長崎に戻り、15年ぶりに親子水入らずの生活となった。



図5 杉本トヨ（個人蔵）

2.3 パワーズ家とR・H・パワーズ商会

(1) ロドニー・パワーズ

正男の祖父ロドニー・パワーズ（図 6）は、米国ニューヨーク州ウィリアムズバーグ出身。1863（文久 3）年に水兵になり、南北戦争で北軍に従軍した。1868（明治元）年にアメリカ軍艦アイダホ号に乗船中、長崎に来航した際に除隊して定住し、長崎居留地で食料品供給の仕事をはじめた。1877（明治 10）年に独立し、大浦 50 番において「R・H・パワーズ商会」を興して成功し、1883（明治 16）年には居留地主要部の大浦 11^{1/2} 番（大浦 11 番半と呼ばれる）に移転した。

パワーズ商会の事業は多岐にわたり、食料品供給、船具商やオークション（せり）、仲介業や一時は製パン業も営んだ。さらに長崎の社会において、ロドニーは地元政財界の日本人・外国人が親睦交流する場として「長崎内外倶楽部」を設立する発起人の一員となり、地元社会における重要人物のひとりとなった。

私生活では船木サトとの間に息子ジョンをもうけた。また、別の日本人女性飯田ナカとの間に娘マサ¹²が生まれたが、「母の残像」に二人についての言及はない¹³。

ジョンが 1907（明治 40）年に死亡し、船木サトがその 2 年後の 1909（明治 42）年に急死すると、ロドニーもサトの死からわずか 3 ヶ月後に病死した。ロドニーとジョン親子は長崎市の坂本国際墓地に埋葬され、墓石は同地に現存するが、ロドニーは坂本だけでなく二人の妻の菩提寺にもそれぞれ埋葬されている。船木家では本蓮

寺に「壽量院仁道日樂信士」、飯田家では観善寺に「壽量院釋仁道永樂居士」として異なる戒名で祀られている。

(2) 船木サト

正男の祖母、船木サト¹⁴（図 7）については、ロドニー・パワーズの妻であったこと、生没年、菩提寺以外にわかることはほとんどなかった。サトについてもはじめて「母の残像」で正男によって詳しく語られ、新情報が見出される。

(3) ジョン・パワーズ

正男の父ジョン・パワーズ（図 8）は、R・H・パワーズ商会の共同経営者として父の事業を手伝った。また当時は珍しかった自転車を輸入して販売しその普及に貢献した。彼の容姿は、長崎で三本の指に入る伊達男と評判だった¹⁵。1907（明治 40）年 11 月に 37 歳の若さで急逝した。「母の残像」で記されるジョンの人物像や正男との父子関係は、いわば第二世代の居留地外国人男性の生涯として注目される。

3. 「母の残像」概要と本稿での整理

3.1 記述について

本稿では「母の残像」について、次章以降で要点別に整理していくが、ここではまず先に杉本正男が著述した順に沿って全体の概要を示す。また、同書は杉本トヨの回想と正男の記録であるため、その内容は個々に別資料



図 6 ロドニー・パワーズ（個人蔵）



図 7 船木サト（個人蔵）



図 8 ジョン・パワーズ（個人蔵）

によって事実を確認する必要があるが、本章では基本的に、「という」「とされる」のような伝聞の表現は用いず、「だった」「した」と簡潔に記述する¹⁶。また、パワーズは日本語では「パウルス」を通称とし、地元紙の広告にも「パウルス商会」と記載されるが、本稿では「パワーズ」を使用する。同書では杉本正男の名前は「正夫」と記されているが、それらは本名の正男で統一する。年号については同書の記載に沿って、一部を除き西暦を省略する。年齢の表記は数え年と満年齢が混在していると思われるが、「母の残像」の記載のままとする。

3.2 概要

最初に、「母の残像」はトヨの生家である杉本家の由来から始まり、トヨの生い立ち、両親や家庭生活環境が綴られる。トヨは17歳から20歳までの3年間、佐世保鎮守府長官々舎に奉公し、教養を積んだ貴重な経験としてエピソードが述懐される。これらはトヨがパワーズ家に嫁ぐまでの前史といえる。佐世保から長崎に戻ってまもなく、トヨは熱心に請われてパワーズ家に嫁ぐ。そして同家の人々と商会の記述が始まるが、最初に語られるのは、トヨの姑となる船木サトの略歴である。サトはトヨをぜひ息子ジョンの嫁にと懇請して迎えたが、ある誤解から衝突してトヨは正男を妊娠中にパワーズ家を出ることになる。これは正男の人生にとって重大な分岐点となり、後に「終局編」として集中的に述べられる。

上記が同書の導入部的な位置付けとなり、それから本格的にロドニー・パワーズとパワーズ商会についての話が始まる。祖父の人格、長崎来航、商会の立ち上げ、大浦11番半の建物、商会の従業員名や馬車などの所有物、主要輸入商品、取引先リストなどが紹介される。事業として居留地の外灯の石油供給、アメリカ領事館から受託した警察業務（取締役）、オークションについても記される¹⁷。

なかでも、正男が小学校時にはじめて商会に連れられて祖父母のパワーズ夫妻と対面した印象や、以来商会に定期的に通って過ごすなかで、自分の目で見た建物内の描写は非常に具体的で貴重である。

そのなかに、家族の食事などトヨが話した生活の思い出や、ジョンの性質や食の好み、生い立ちなどの逸話が織り交ぜられる。それから居留地の夏の一大レクリエー

ション行事として毎年長崎港で盛大に開催されていた、水泳競技大会やヨットレースの話題が上る。競馬の話からは、ジョンの乗馬や珍しかったパワーズの二頭馬車、商会の仔馬や賢い番犬のことが回想される。

原稿の半ばには、明治期長崎の歴史における重大な出来事と関係する、トヨの特別な経験が語られる。1891（明治24）年のロシア皇太子ニコライの長崎来港の折に、商会代表として艦船を訪問して謁見し、軍楽隊長のピアノとトヨの三味線で協奏したという。トヨと同行したのはロシアに縁の深い道永エイと諸岡マツだったといい、長崎の歴史上大変有名な人物が次々と登場し、謁見の様子は原稿用紙約10枚にわたって詳細に記される。そしてロシアと親しみ繁栄した明治20年代の長崎において、パワーズ商会の取引先だったホテルや料亭のリストも示されている。

居留地の人物として、トーマス・グラバー兄弟やツル夫人にも言及している。居留地の外国人には、トヨと交流のあった数人の名前があるが、特にページを多くするのは、B. J. ルンドホルムについてである。親子が受けた恩と思い出が、慕わしさと敬意をもって約25ページにわたって述懐される。

最後にいよいよ「終局編」として、正男と母トヨ、そして祖母船木サトとパワーズ家の詳細が綴られる。トヨがパワーズ家を出て正男を出産、ジョンと離縁し、赤子の正男を両親に委ねて単身上海に渡るまで、それから数年後に再燃したトヨとサトの衝突、正男とパワーズの初めての対面、思い出、別れが詳しく述べられ、正男の分析や考察が加えられる。最後にトヨの上海の活動と正男の心情が綴られ結びとなる。

以上が本文の流れに沿った「母の残像」の概要である。これらの記録は、長崎居留地研究にとって非常に貴重な新資料と捉えることができ、本章では、事項別にそれらを整理して示していく。

本稿では特にパワーズ家の人々とパワーズ商会に重点を置き、内容別に整理し一部は省略して、注目点を順不同で記述する。その際、既往研究と照合して明らかに誤りである記述や検証が必要なものもあるため、必要に応じて、筆者のコメントを〈 〉として付記していく。また、それぞれの記述内容に対応する杉本正男の手書き原稿のページ番号を〔 〕で示す。

4. 杉本正男がみたパワーズ商会と長崎居留地

4.1 パワーズ商会の建物、内部や取引（営業）の様子

(1) 緻密な描写

「母の残像」において、1868（万延元）年のパワーズ来航後、パワーズ商会の設立やブラウン商会との関係、そしてグラバー兄弟をパワーズと同時期の来日としているなど記述には誤りが多い。正男が他の文献や伝聞によって書いたからだと思われる。

これに対して、パワーズ商会についての描写は、非常に詳しく緻密でページ数も多い。なかでもパワーズ商会が繁栄した大浦 11 番半の建物や内部の様子については、正男自身が実際に目にしたものと、母トヨの記憶とが相まって、以下のように鮮やかに描かれている。

(2) 1 階の雑貨陳列室と 2 階のベランダ

商会の建物は、本館 1 階の全室が雑貨の陳列を兼ねており、その一角が事務室として使われてた。その階上の港に面した西側の半分は、全面コンクリート敷きの広いベランダになっていた。そのベランダから、長崎港の出入船舶を確認するため、ロドニーは常備している望遠鏡で、沖の方の状況を眺めることを日課としていた。

ベランダでは、宴会やアメリカ独立記念日の祝宴が毎年盛大に催され、知名知古の内外人を招待し、賓客には輸出入品の手続上世話になる税関長、水上警察署長や長崎県庁幹部級も含まれていた。手すりの角に取り付けられた大きな旗竿にはアメリカ国旗がいつも悠然と翻っていた。[36-37]

(3) 肉、魚、野菜の艦船搬入

商会の前の道路の端筋が川沿いになっていて、すぐそばに弁天橋があった。商会の正門のすぐ向かって右脇に、10 坪余りの灰色のペンキで塗られた木造 2 階建てがあり、その階下が主に艦船積み込み用に準備され、牛、豚、羊、山羊や鳥類などの肉類を吊り下げて、保管していた。

これらの肉は卸、小売りもされるが、商会前面の大浦川に常に待機している舢舨（はしけ）に載せて他の物資とともに商会のランチで曳航され、艦船の注文によって迅速に売買された。野菜や魚は新鮮なものが必要なため、積み込まれる当日までに予め、長崎市内、県内から手配し、大八車で商会に持ち込まれた。それらは肉類といっ

しよに艦艇に積み込まれ、その係員付き添いのうえ、艦船の係員に現金と引き替えに引き渡された。[38-39]

(4) 代金の支払い

それらの物資の代金は、当時はすべてアメリカのドル金貨で商会員に支払われ、現金大袋に一杯の金貨を係員一同で護衛して持ち帰り、その金袋から取り出される金貨の光でまばゆいほどに壮観を呈していた。ある米国艦船の艦長や船長は長崎に寄港して商会に立ち寄った際、「パワーズ商会に本国の金貨を渡すために立ち寄るようなものだ」と冗談話に花が咲いたという。商会は各国艦船と取引があった。物資の生産者にはそれぞれの代価に応じた額が支払われ、こうした商売上の利益を得て生活していた者が無数にいたほど、その頃の長崎港は全盛を極めていた。[39]

(5) 大浦 11 番半の建物、内部、調度品

① 日本人用の休憩室、ジョンとトヨの部屋など

通りの角から隣のドイツ領事館までの長さ 5、6 間の倉庫の一部が、商会の中庭に面して、舢舨係の船頭の待機所になっていた。その内部には、ロープ類やその他の船具等、大まかな貨物が保管されていた。

貨物倉庫と面して本館の奥に 2 階建てがあり、階下は日本人の店員や女中用の食事室兼休憩室として使われ、隣室が台所になっていた。2 階がジョンとトヨの部屋で 10 畳あまりの広さだった。部屋の裏側の窓を開けると、ちょうど隣家のドイツ領事館の裏庭が眺められた。その部屋から左（西北）に行くとすぐ 1、2 間先の廊下をまた左に曲がり、ちょうど右に曲ると西北向に中廊下があり、その左端の角が洗面所兼浴室と洗濯室に分かっていた。[41]

② サトの部屋

家屋の中央には中廊下があり、両脇の部屋はそれぞれ 2 室続きで、12 畳ほどに分かれていて、すぐ右手前がサトの部屋、その隣室がロドニーの部屋だった。

サトの部屋は畳敷きになっていて、西洋タンスや洋式茶棚や長火鉢、その他の調度品が置かれ、東向きの壁には明治天皇の肖像掛軸が飾られていた。[41-42]

③ ロドニーの部屋、応接室、書斎

隣のロドニーの部屋には、ベッド、ソファ、鏡付洋タ

ンス、椅子などが置かれていた。ロドニーの部屋から中廊下を隔てた向かいの部屋は、応接室兼家族の休憩室や娯楽室に使われ、黒塗りの中型ピアノが置かれ、バンジョーがその横の壁側に吊り下げられていた。部屋の中央の壁にはストーブが設置され、その上の台に置かれた小型だが精巧な自転車の模型は正男の心に残るものだった。[42]

応接室の隣室はロドニーの書斎で、マホガニー材の回転式本箱と丸テーブル、安楽椅子 2、3 点が置かれていた。南側の壁の前には大型の立体鏡付き化粧台があり、その前の 2、3 段の棚には珍しい洋酒類や飲料が、正面の鏡付き棚に整然と配備されていて、目にも輝しいばかりだった。[42-43]

4.2 パワーズ商会の事業

(1) パワーズ商会の運営組織

当時の外国人従業員はパワーズ親子のほか 6 名、日本人の商会員 5 名。その他、使用人の女中数名、別当 1 名、船係の船頭数名、小型蒸気船 1 艘と船長ほか数名、屠畜係数名、四輪馬車 1 台、西洋馬 2 頭、仔馬 1 匹、人力車 1 台とある。商会はこの体制で海外物資を一手販売していた。[52-54]

〈正男は商会の従業員と所有物のリストを残しており、外国人はその国籍も記されている。詳細は本稿付録のテキストデータを参照されたい。日本人商会員には、ロドニーのもうひとりの日本人妻である飯田ナカの弟清次の名前がみられる。これらの情報は浜崎国男の著書に記され、提供者として杉本正男の名前があることは以前から把握していたが¹⁸、今回その情報の出典をはじめて確認することができた。〉

(2) 畜類の屠殺

牛、豚、羊、山羊などの肉類が艦船の需要に間に合わないときは、少しでも早く準備するため着荷を待たずに、商会が直接浦上方面から畜類を運び入れ屠殺して対応した。屠殺係を置いて次々と準備しなければならないほど長崎港の艦船の出入りは頻繁だった。牛や豚の皮は無償で屠殺係に与えられ、羊や山羊の皮だけは屠殺係が鞣したものを、トヨなど家族の利用に提供されていた。[54-55] トヨは船頭からいたずらに屠殺中の牛を見せられ、

牛肉、豚肉などの肉類から、牛乳、鯨肉までも食べなくなった。[61-63]

(3) 主要商品

安政年間〈万延元年の誤り〉のロドニー来崎以来、欧米、ウラジオストック、上海、香港や東南アジアから直輸入されていた主要商品のリストも紹介されている。抜粋すると、石油、船具、獣皮、砂糖、缶詰、化粧品、キャンディー、外国製煙草、コーヒー原料、紅茶、ソース、ケチャップ、洋酒などである。大浦 22 番の別館ではパン類が製造されていた。明治 20 年前後には、商会の注文で欧米から自転車数台が長崎に直輸入され、話題になった。[55]

(4) 外灯の設置

灯火用として、種油や豆油に代わって石油を輸入し、門灯や外灯を設置して石油使用を奨励した。配油代として、月々一戸毎に金貳円也をパワーズ商会が徴収していた。優先的に石油を使用した居留地は、大浦、下り松の海岸から高台の南山手、東山手まで全域の輝く灯火が長崎港の海面に反射し、山手の樹木の影から点々と洩れる灯火の光によって居留地の夜景が油絵のように浮かび、壮観を呈していた。[63-64]

(5) 商会員ドルとフランクの外人暴動者捕縛業務

パワーズは米国領事館を通じて居留地の取締役を兼ねていた。商会員のドルとフランクに委嘱して、外国人や艦船乗務員の暴挙を取り締まり捕縛業務にあたっていた。捕縛料として米国領事館から 1 人 5 ドルの奨励金が懸けられていた。[66-68]

〈商会員リストに「ドル氏（露国人、警察関係事務）」とあるが、これはイギリス人ピーター・ドールのことと思われる¹⁹。ハリー・パークス英国公使の護衛で来日し、長崎に移った当時は大浦 11 番に居住したが、新地、梅香崎警察署に所属していた。またドールの月給は 80 ドルで、5 ドルの生活手当があったという。同書の記述は正男またはトヨの誤った認識と思われる。同書にはこのような情報が往々に含まれており検証が必要だが、それでも居留地関係者が記録した資料として重要と考える。〉

(6) 米国領事館の事務代理

商会には米国領事館の事務取扱の資格があり、在長崎外国人間の他人の住所移転や、長崎に転任する者がいる際は必ず、同商会に連絡する規則になっていた。[70]

〈(5)と同じく、事務取扱、捕縛業務などアメリカ領事館との関係は調査の必要がある。〉

(7) オークション

ロドニーは外国人居留者間の福利増進のため、長崎で初めてオークション(競売)を計画した。白と黒の元禄模様の万国共通旗を使用する許可を、米国領事館に申請して開催されることになった。さまざまな不用品から老朽した艦船の競売まで引き受けて、会場を商会内に置いた。トヨは好きな品物があつた時は、ロドニーの最後のハンマーの音を聞く寸前に合図を送り、落札してもらっていた。[77-78]

(8) 主な取引先のホテル、料亭

食料品、雑貨類の主な取引先は、雲仙ホテル、小浜ホテル、福屋(パワーズ家が特に親しかった)、春若屋(丸山町)、宝亭(小島郷)、鹿島屋(丸山町)であった。その他多少関係があつたものは、長崎ホテル(下り松)、ベルビューホテル(大浦上田町、日本最古のホテル)、フランスホテル(大浦町)、ジャパンホテル(大浦町)、外国亭ホテル(外浦町)、精洋亭ホテル(西浜町)、迎陽亭(上筑後町、日本、西洋及支那料理)、富貴樓(西山町、日本料理)、環林館(西山町、日本料理)、一力(新橋町、日本料理)であった。

精洋亭ホテルと外国亭ホテルは特に盛況で、外観の装飾も美しく、色とりどりの行燈を軒先に釣り下げて遠くからも人目を引き、壮観だった。[104-108]

4.3 パワーズ家の生活、大浦 11 番半の暮らし

(1) パワーズ商会の警備

暴挙者の取締役を委ねられていたパワーズ商会の家族の身辺も、日本の警察の好意により警官が交代で警備していた。トヨは、夜間に正門前で警備する警官の労をねぎらって、パワーズ親子の食事の残りの一部を大皿に盛って差し入れた。珍しい洋食だったので喜ばれていた。[71-72]

(2) 食事、生活費

パワーズ父子の生活費は食費だけで当時の金額で約 3 万円だったといわれる。パワーズ家の食事は洋食だが、ジョンは特に味噌汁、魚の刺身や寿司が大好物だった。トヨの実家では日本食を食べることが楽しみで、長崎からすみは 1 腹平気で食べてしまった。父ロドニーが甘党なのに対し、息子ジョンは心底辛党だった。[72-75]

(3) ジョンの入籍費用

船木サトとの間にジョンが生まれた際、ロドニーが心配をしたのはジョンの国籍のことだった。アメリカ国籍とするには必ず、アメリカ人の家族の女性の子とするか、またはその寡婦の子として入籍を依頼し許可を得て入籍の手続を取らなければ、アメリカ政府の許可が下りなかった。そこでロドニーはある知人の紹介で、ある寡婦の子としてジョンを入籍させてもらい、その礼金として毎月 300 円をその寡婦に送金していた。[76-77]

〈これは初出情報である。確かに日本人女性との間に生まれた子は、通常は日本国籍となるはずであり、このような入籍が実際に行われていたのか事実を確認する必要がある。〉

(4) 二頭の馬と馬車

パワーズ商会には早くから、米国から輸入した発育の良い光沢ある黒と栗色の体格の良い優秀な二頭の馬が、馬車用として飼育されていた。ロドニーはこの馬車を操り、暇さえあれば単独でも家族同伴でも、手綱を取って市内や郊外を散策するのを楽しみにしていた。

パワーズ商会の馬車は長崎名物のひとつとされていた。後に正男が長崎繁華街の知人の老舗を訪れると、その主人から、「パウルスさんのあの馬車の颯爽とした風格と、その馬の目の外側に取り付けられていた馬の黒色の目隠しが印象的で未だ忘れられない」と懐かしがられた。[85-87]

4.4 長崎居留地の風物

(1) 競馬

長崎では馬の体育を奨励する目的から、競馬が盛んに開催されていた。ジョンは乗馬にも長じていたので、パワーズ商会の持ち馬で出場していたが、馬種の改良の点

でも進歩的な欧米産に内地産の馬は到底かなうはずもなく、出場するたびに一等を獲得し競馬関係者から苦情が出る始末だったので、馬を出すのを断念していた。

[87]

(2) 夏期水泳競技大会

長崎の繁栄期には毎年炎暑の季節になると、レクリエーションのため大浦居留地の各国領事館員や商館員、会社員、銀行員が参加し、夏季水泳競技大会が長崎港外で盛大に開催されていた。パワーズ商会所有の明治 35 年 2 月 24 日発行長崎市下り松 47 番長崎プレス社“Nagasaki Directory 1902”から正男が作成した参加の領事館、商社、銀行などのリストが示されている。[78-81]

明治 20 年前後から、長崎港外鼠島、高鉾島やその近くの福田の松原、深堀、小瀬戸、神ノ島や伊王島の海辺沖で、夏季水泳競技大会やヨットレース等が、等級をつけて盛大に開催された。各商社では優秀な者を選出して競い合った。水泳には障害物競技もあり、団平船を幾隻も沖の方に一定の間隔をおいて繋留させ、その船腹を潜って競泳した。個人競泳は等級に応じて、一等には金時計と鎖等の豪華な賞品が渡され、団体競泳には銀カップが授与された。夕方競技が終わると白砂青松を背景に、思い思いのポーズで記念撮影した。[81-82]

水泳競技大会は、ロドニーが競技の審判係として選出されていたが、必ずと言っていいほど息子のジョンが優勝するので、ジョンを呼び出し手加減をするように諭していた。[83-84]

(3) 写真

正男の少年時代まではこうした記念写真が、数多くトヨの両親宅に保存されていた。ロドニーが授与されたという各国元首や岩崎弥太郎ら名士の写真もあり、正男は日常見るのを楽しみにしていた。長崎市全景や各国艦船の長崎入港の写真もあった。ただ明治 24 年に長崎を訪れたロシアのニコライ皇太子が人力車に乗った写真と、御召艦アゾヴァ号の長崎入港記念写真だけは、戦後正男が県立図書館に寄贈した。

毎年 7 月 4 日に商会のベランダで盛大に開催された米国独立記念祭で家族や来客と撮影された大型の記念写真は、特に思い出に残る写真だが行方不明になってしまっ

た。[82-83]

(4) 居留地の人物

① グラバー兄弟、ブラウン商会

居留地の人物として、トーマス・グラバー兄弟やツル夫人についての言及が注目される。トーマス・グラバーとアルフレッド・グラバーの兄弟については、活動や住居などの記述があり、長崎居留地の重要人物の記録をまとめて残そうとしたと思われる。しかし、グラバーについてはトーマス・グラバーを T・A・グラバー（息子の倉場富三郎のイニシャル）と誤記するなど内容には混同が多い。[34-35、111-120] パワーズの共同経営者としているブラウン商会についての記述も、情報が更新されるべきものである²⁰。

グラバー邸がお蝶夫人の縁の地として、注目の的になっていること²¹を正男が疑問視していたことは興味深い。[112-117]

② ランドホーム（ベルンハード・ルンドホルム）と松本ヒロ

欧州はもとより東洋航路の船長で、長崎寄港の際はその都度、パワーズ商会 2 階の 1 室をロドニーの好意により無償で借用し、夫人の松本ヒロと共に滞在していた。トヨはその頃からよく世話をしていた。明治 20、30 年前後からは長崎、上海、香港航路の優秀な船長として知られ、その頃は上海に数多くの貸家を所有していた。その後、貸家を相当な価格ですべて売却し、西彼杵郡大草の海辺に 2 階建ての洋館を建て、老後をおだやかに暮らした。[125-126]

大正の初め頃、長崎の街でトヨとバツタリ再会。正男 15 歳の頃、トヨが正男と二人で生活をするようになったばかりの時、生活のため下宿屋を始めていたが、ランドホームは下宿屋を辞めるよう諭し、東山手のある洋館に二人を落ち着かせた。以後、お互いの家を行き来するようになり、親子の生活を支援していく。[131-133]

正男が 17、18 歳の頃、大正 2 年頃のある日曜にも、トヨと正男は大草のランドホーム邸を訪れた。正男はランドホーム氏からボートの漕ぎ方を教わった。応接室では有益な雑誌や医学解剖学等の珍しい本を見せてもらい、夕食を共にしたりした。[145-148]

〈現在はブライアン・パークガフニの研究によりルンド

ホルムに関する最新の知見が得られる²²。そのため正男の記述には不正確な点もあるが、ルンドホルムがトヨと正男を支援したことや、大草のルンドホルム邸での心穏やかな思い出は大切な記録である。)

5. 正男の記録—パワーズ家の人々

5.1 正男とパワーズ家

(1) パワーズ家の人々と正男

それぞれの事歴についてわかっていることは 2 章で述べたが、本章では「母の残像」の中で正男が家族について書いた新たな情報と、家族と正男との関係、思い出、見解などを人物別に整理する。父ジョン、祖母サト、祖父ロドニーは 2 年の間に相次いで亡くなっており、ここではその順に記述する。

(2) パワーズ家との関係

正男は母トヨの生家で、トヨの両親やその弟妹たちという大人のなかで、大事に育てられ成長した。中島川の川沿いにある 10 坪足らずのこじんまりした 2 階家だった。

母トヨは正男を妊娠中にパワーズ家を出て出産、離縁し、生後半年の正男を両親に預け、単身上海に渡った。正男がパワーズの孫であることを両親に厳しく口止めし、正男はパワーズのことを知らずに育った。正男が 5、6 歳の頃、トヨが再婚した男性と一時長崎に戻り、正男の家の近くに住んでいた正月、大浦の船木サトからトヨの両親宅に正男への贈物が届くが、トヨはその日のうちに妹に持たせて突き返してしまった。[152-163]

正男がはじめてパワーズ家の人々と対面したのは、小学 1、2 年の頃だった。トヨは男性の仕事に伴い、朝鮮に住んでいた。トヨのある友人が「珍しい人の家に連れて行く」と言って、正男を大浦のパワーズ商会に伴った。

商会の正門から中庭に入ると、外出しようとしていたロドニーと出合った。長身で白髪の上品な面長に、あご髭を生やした、特長のある広い額に柔和な下がり目の老紳士だった。その豪荘な商会が正男にとっては実家であるとは、誰からも聞かされたことがなかったので、正男はそれが誰なのか理解できなかった。祖父と聞かされ、夢見るように顔を見ていると、血が呼ぶのか懐しい思いで胸が一杯になった。祖父にザンギリ頭をなでられ、ポケットから出した大型の一円銀貨 2 枚を手握らされ、

嬉しい気持ちになり思わず「サンキュー」と英語でお礼を言うと、祖父も愉快そうに笑って出かけた。[43-45]

それから 2 階の祖母サトの部屋に連れて行かれた。階段の手すりには真鍮板がはめ込まれ、足触りの高価な絨毯が敷き詰めてあるのを物珍しく感じながら、「この立派なホテルのような家が、自分の真実の祖父と父の住家だったのか」とまだ半信半疑だった。

同伴者がサトの部屋のドアを開けると、畳敷きの部屋の中央で、見知らぬ 50 歳近い初老のデブプリ肥えた血色の良い顔に金額メガネをかけた婦人が、静かに少しうつむき加減で着物を縫っていた。同伴者が「おトヨさんの子の正男さんです」と告げると振り向き、突然バネ仕掛けのように立ち上がって正男を部屋の中に連れて行き、自分の膝の上にしかり抱いて、嬉し泣きに泣いた。

「私がお前のほんとうのお婆さんよ」「随分前からお前をこの家に引き取るように、お前のお母さんに何かと掛け合ってたが、お前のお母さんは承知しなかったのよ」と話した。[46-47] 正男は土曜の午後から日曜にかけて、パワーズ商会に泊まりがけで通うようになった。商会の自家用車が迎えに来ていた。[39-40、176-177、193]

5.2 父ジョン・パワーズ

(1) ジョンの事歴

パワーズのひとり息子として生まれ、商会の全盛期にあって幸運児であり、自由な天地の下で育った。性質は至って善良で、物事に器用だった。勝気で競争事に向こう見ずなところがあった。酒が何よりも好物だったがそのために命を縮め、暴飲暴食の結果 37 歳の若さで早世した。[73-74、84-85]

長崎にいてわがままやルーズにならないよう、広く欧米文化の理念を学ぶため、ジョンは父によってアメリカの某ハイスクールから大学に入学させられた。心から辛党だったので、アメリカ在学中も月に日本酒一升樽を送っていた。幸い学校近くにジョンを知っていた長崎出身の日本人がクリーニング店を開業していたので、そこに一升樽を送りジョンに出してもらっていた。その店主が食事の世話や身の廻りのことも親切にしてくれるので、よく遊びに行っていた。特に味噌汁、魚の刺身類や寿司等が好物で、店主に頼んでよく好きな料理を作っても

らい、皆にも振る舞い食事をともにして楽しんだので、アメリカでも寂しい思いをすることがなかった。[75] 卒業して長崎へ帰郷しまもなくトヨと結婚した。[121]

父ロドニーは、ジョンをホーム・リンガー商会に勤務させた。そこでジョンは長崎風をウラジオストックで出張販売して成功し、商会の人々を驚かせた。ジョンは 20 代で月給 250 円余りをもらっていたという。[120-122]

トヨと別れて数年経ち、ジョンはすでに 2 番目の妻を他郷から迎えていた。父ロドニーは大浦 11 番半での同居を許さず、大浦 22 番の商会別館で世帯を持たせた。それはジョンが他の人と再婚しても商会には住ませないという、ロドニーがトヨに対して約束したことだった。その後、ジョン夫婦は理想的な円満生活を続けることができなかつたうえ、船木サトと新婦の間には性格からか軋轢が起りがちだった。ジョンの死後まもなく妻は故郷に帰った。[167-169]

(2) 正男と父の関係

正男が小学 4 年生の頃に父ジョンが死亡した。生存中にもお互いに父子でありながらひと言も言葉を交し合ったこともなく、またその機会を作ってくれる者もいなかった。母トヨが商会の家族の一員として暮していた時の家族の温かさは失われていた。

一度、ジョンが久しぶりに商会に来て事務所で事務員と話していた時、サトが正男を連れて入るや否や、新婦への気兼ねかトヨへの遠慮か、子ども心にはおかしいくらい、その父が狼狽気味に正男の顔を見たかと思うと、すどすどと反対側の入口から出ていった。その様子の全容が正男の脳裡に印象づけられていて、世にもこうした不思議なはない親子の縁というものがあるのかと、諦め切れないものがあつた。[168]

5.3 祖母船木サト

(1) サトの事歴

長崎市大黒町の船木家の魚問屋の養女として育つた。15 歳の時、縁あってロドニー・パワーズと結婚。若い頃から仏心の念が厚く、貧困者には慈善を施し、菩提寺である西上町の本蓮寺へ毎日抱え車で朝から夕刻まで弁当持参で通い、住職夫妻の部屋で食事や談話をともにする

のが何よりも楽しみだった。毎日午後 3 時のお茶の時間には、同寺の僧から下僕にまで茶菓子を饗応していた。

本蓮寺以外にも同宗の長照寺や大浦日進寺にも参詣を怠らなかつた。家にはあまりおらず外出することが多く、家庭人というより社会事業家のような感じだつた。

ロドニーが眼病になった時は、医師でも治せないところを連日の熱心な朝夕の祈願によって全快させ、ロドニーは仏教の御利益を悟り自身も何かと寄進され、その後はサトにパワーズ家の全権を委任するようになった。

サトが急死したのは自宅ではなく本蓮寺で、明治 42 年 5 月 6 日、日課のお参りの際に脳溢血で倒れ、住職その他寺僧に見守られながら 55 歳で永眠した。その頃正男は 13 歳だつた。現在もなお(執筆時期の昭和 30 年代か)、長崎の各日蓮宗のお寺では、船木サトの功德により供養を毎日絶やさないということだつた。[28-32]

(2) 正男と祖母の関係

小学生になった正男とついに対面してからは、サトは毎週末正男を呼び寄せて可愛がつた。サトは、トヨと和解できたら正統な孫である正男を自分の籍に入れ、自分の動産不動産約百万円の財産を受け継いでもらいたかつた。[161]

しかし大部分のサトの財産はその縁者や世話になつた親友に分配され、正男はサトの衣類や多少の金子と貴重品数点を貰い受けたに過ぎなかつた。だがサトの存命中には学費などの費用として、多少の金子を毎週末のように与えられていた。

正男が譲り受けた貴重品の中には、何物にも代えがたい遺品があつた。婦人用の金鎖付懐中時計で、大粒、小粒のダイヤが施されたもので、ロドニーとの結婚記念品だつた。サトは、正男が成人した暁には、正男の嫁の引出物として引き継がせると楽しそうに話し聞かせていた。思い出の応接室にあつた黒塗りのピアノも欲しかつたが、その頃の正男は誰に相談する勇氣も持ち合わせていなかった。それにピアノを貰つたところで、トヨの両親宅では手狭で置き場もないからと断念したのだつた。

サトの葬儀には、正男は喪主として参列した。参列者は数百名に上り、延々と長蛇の列をなして、各長崎の日蓮宗の主だつた僧が集つた。[169-171]

5.4 祖父ロドニー・パワーズ

(1) ロドニーの死

ロドニー・パワーズの事歴については、これまで述べてきた商会の内容にも含まれるため、本項ではロドニーの最期について記したい。

サトの死を深く悲観してか、ロドニーの病気も急速に進み、明治42年8月10日（8月9日の誤り）に死去した。一代の英傑ともいべき人だった。

ロドニー・パワーズの葬儀は、父ジョンの時と同様にトヨの両親宅に知らせがあり、正男はすぐに商会に行き応接間に安置された祖父と対面したが、何の苦痛も感じなかったように安らかな顔だった。

葬儀には、各国領事はもとより、氏の友人知人の参列で歩道は埋まり、サトの時と同様に、数百人を越える盛大な見送りだった。二頭立の葬儀用馬車に寝棺を安置して黒覆を施され、静々と列をつくって多数の人々に見送られながら、上目覚町にある旧外人共同墓地に埋葬されたのだった。

祖父パワーズの死後、商会はついに解散することになった。正男の知らない間に、祖父が生前から正男の学費やその他の費用にと遺していた数千円の遺言が発表され、米国領事館を通じてトヨの両親に正男の代理としてその金が渡された。[174-175]

(2) 商会の最後

ロドニーが死去した頃は、もう以前のように繁栄した長崎ではなく、パワーズ商会も日本人商会員だけが運営にあっていた。

ロドニーが死亡するとまもなく、米国領事館から商会の解散命令や整理があり商会の閉鎖が確定したが、残品の処理上、近くの洋館を日本人商会員が共用して一時営業していた。ロドニーなき商会はすぐに維持費その他の資金に行き詰まり、1年続かないうちに再び解散となった。パワーズ商会の跡は、米国領事館を通じて澤山精八郎に譲渡された。[128-130]

6 母の残像における杉本トヨ

6.1 トヨの事歴

「母の残像」に記されたトヨの事歴については2章で大筋を示したが、同書はトヨの生家である杉本家の由緒

から書き始められており、それらを加えて示す。著名人の名前が複数登場し、著述が事実かどうかは精査する必要があるが、トヨが正男に語った内容としてそのまま記述する。

6.2 杉本家

トヨの祖父、杉本半兵衛忠親は元熊本細川侯の御典医であり、筑後柳川立花藩の祐筆で当時の姓は江頭といった。長崎に移住した頃、江戸町の杉本家の米・酒問屋の婿養子となった。トヨの父源次は半兵衛の長男で、和洋服仕立職人となり、近くの材木商の末娘だった母ヨシと結婚。源次は温厚篤実、ヨシは慎ましく嗜みのいい夫婦だった。源次が73歳で死去するまで新橋町に住み、9人の子を授かるが5人が早世した。残された4人のうちトヨは一番上の長女であった。[1-5]

トヨは長女として両親や妹弟を支える責任と将来の生活のために、幼少の頃から好きな諸芸の修業に励んだ。生まれつき美貌の持ち主であり良く気が利く人で、あらゆる階級の人から敬愛され慕われていた。[6-7]

6.3 佐世保奉公

17歳になった明治21年頃、佐世保鎮守府司令長官である海軍中尉赤松剛義（海軍中将赤松則良の誤記）の官舎に満3年間の予定で奉公に出ることになった。普通の女中ではなく奉公人の取締りの役目だった。これには岡部政太郎氏（岡政）、橋本清氏（橋本商会）、市村庄太郎氏（長崎税関）という3人の推薦があった。トヨは礼儀作法や教養の修業という気持ちで熱心に職務に励み、長官夫妻にとっても気に入られた。[8-14] 有栖川宮殿下御夫妻訪問の折、給仕役に抜擢された時もみごとに役目を果たした。長官が任期を終え東京に帰る際、将来の幸福を約束するので東京に同伴してくれるよう依頼された。トヨの両親は迷ったが、遠方に手離しかねて涙ながらに辞退した。[16-17]

〈ただし佐世保鎮守府は1889（明治22）年7月開庁、長官官舎は翌8月完成²³。トヨが明治21年に奉公に出たとすると時期が合わない。〉

6.4 嫁入り

その後、トヨが長崎の両親の家に落着き、家事に追わ

れていた頃、大浦居留地のパワーズ商会子息のジョン・パワーズの母である船木サトが、是非ともトヨをジョンの妻にと、トヨの両親宅に申し込んで来た。両親は遠方に嫁がせるわけでもないので承諾し、結婚がトントン拍子に進められていった。結婚式場は、明治洋画家の大家山本森之助氏出生の家で、結婚披露宴は料亭一力で盛大に挙げられた。トヨが二十歳の頃だった。[18-20]

トヨはパワーズ家に入ると、日常の家族や商会の雇人の世話、対外的な接待など献身的に働いた。ロドニーの衣類の点検等身の回りのことや、寝る前に足を洗う習慣のお手伝いなど、姑サトも大いに助かり、この上もない信頼を受けていた。ロドニーはトヨの文金高島田髷がお気に入り、家でも外出時でも奨励していた。知名な人との会合にもトヨを同伴するなど、とても気に入られて信頼が厚かった。[108-111]

6.5 ロシア皇太子ニコライ訪問

明治24年4月、ロシア皇太子ニコラス〈ニコライ〉とギリシャ皇太子が露国御召艦アゾヴァ号〈アゾフ号〉で長崎に来港した。ロドニーはトヨにパワーズ商会を代表して訪問するよう依頼した。トヨは華麗な花束と商会のクックが製菓したケーキを持参した。トヨは道永エイからロシア語を少し教わっていたが、ロドニーは言葉上の失礼があつてはいけないと大事をとって、稲佐の道永エイの隣家のホテルの女将である諸岡マツと、ロシア貿易の喜平商会の中村喜平同伴のもと、トヨにアゾヴァ号を訪問させた。

一同は大変歓迎され会食にあずかることになった。食事後、皇太子から金製の真珠入りネクタイピンと自身の写真を記念品とし、他にも高級煙草や数々の珍しい品を授かった。またトヨは、日本音楽を聞かせてくれるよう頼まれ、同艦所有の立派な三味線を拝借し、軍楽隊長のピアノと合奏することになった。「万歳」と「松づくし」を選び、トヨの唄声と三味線は隊長のピアノとも良く調和した。帰りには警備の水上署員たちを労い、賜った高級煙草の缶を手渡し喜ばれた。[92-101]

〈ニコライの長崎滞在は明治24年4月27日から5月5日まで、到着翌日から商人たちを艦に呼び入れていたといい²⁴、トヨたちの訪問もそのような機会だったのかも知れない。ただし赤松則良はこのとき接待役の有栖川宮

威仁親王に随行しており²⁵、6月に佐世保から横須賀鎮守府司令長官に転任している。そのためこれについては、トヨの佐世保での奉公や長崎での結婚の時期とともに考証する必要がある。〉

6.6 長男熊定の死

ジョンとトヨには、正男が生まれる4、5年前、当時3歳になっていた船木熊定という長男がいた。可愛い盛りだったが、乳母の不注意で落下して頭を打ち、内出血を起こした。乳母は人目のない所で数時間ひとりで介抱し、商会に帰ると誰にも話さず放置していた。それを目にしたユダヤ人のカフェのマダムも忙しさからすぐに商会に知らせず、治療が遅れ、取り返しのつかない結果となった。ロドニーは長崎港に停泊中の各国軍艦の権威ある軍医を招聘し、脳膜炎の治療手術が施されたが、脳腫が増大し出血多量と幼児のため手の施しようもなかった。その頃の下僕や乳母は田舎者で無教養、横着者が多かった。熊定の不慮の死という悲惨な出来事は、トヨにとって心に受けた最初の打撃だった。[185-187]

6.7 中傷

トヨがパワーズの信頼厚く何事もよく相談されるため、トヨに敵意と嫉妬心を抱き、パワーズ夫妻の信用を失わせて商会から追放しようとする者が商会の中にいた。トヨのお腹の子どもはジョンの実の子ではないと、パワーズ夫妻やジョンに忠言がましく根も葉もないことを中傷した。これによりサトとトヨは感情的衝突をして、悲しい別れを餘儀なくさせられた。[47-49]

中傷したのは商會員の有力者夫婦で、パワーズ夫妻が常にその家計の不足費や、病弱な子どもの医薬費等を特に哀れみ恵んでいたため増長し、夫妻に取り入るつもりでトヨを排斥し、自分たちの子を引き立てあわよくば入籍させてもらう下心があった。[188-190]

6.8 別居、出産、離縁

熊定の死、多数の使用人の世話や監督など毎日の多忙、さらに内外からの出入りの激しい商会関係の人々の間に立ち、陰日向なく大世帯の世話をするなかで、トヨは心の疲労を感じていた。

そこにいわれない中傷を受け、誤解した姑と衝突し、

トヨはロドニーに相談し、パワーズ家を出て正男を生むことにした。トヨの決意は固く、ロドニーは市内の高台に家を用意し、自ら馬車を使いまたは商会の者を遣って、食料品や生活必需品を届け続けた。

正男が生まれると、トヨは高台の家で数ヵ月静養した後、正男をトヨの両親宅に預けるために生家に移り、約半年間、正男に母乳を飲ませた。トヨはジョンと正式に離婚し、杉本家の実家からも戸籍面で別家の手続きをとり、正男の保護者となった。上海には友人知人がいるので、1日も早く同地で活動してミルクや生活必需品その他の仕送りをしたいと、両親を懇々と説得した。〔47-52、188-192〕

6.9 上海

正男が生後半年の明治31年3月、トヨは実家の両親に正男の養育を頼み、自分の芸能や諸式教養を生かし仕事をするため上海に渡った。その頃の上海は、日本人も日本人関係の店舗や料亭も少なく、トヨは在住日本人の慰安所や宴席場等の必要性を小田桐（小田切万寿之助）日本総領事に請願し、協力支援を依頼した。

トヨと旧知の白石六三郎夫妻は早くから上海に住み、一流の料亭を営むという意見が一致し、トヨは芸能や諸式作法を、白石夫妻は営業その他の準備を努力し、終戦直前まで続く六三亭の営業に協力した。六三亭は数百名からなる美妓を置くような、上海一流を極めた料亭となった。トヨが開業を応援した月廼家も、六三亭と並ぶ料亭となった。他にも長崎出身者が経営する、豊陽館、萬歳館、常盤館などの一流旅館とも親交があり、後に長崎に落ち着いた後も上海を訪れるたびに特別の待遇を受け、波止場まで自家用車を出して歓迎された。〔194-201〕

やがてトヨは上海市の日本財閥の経営に係わる某有力物産会社の要職にあった松木氏と結婚した。まもなく長崎市に転勤となり、トヨの両親の家の町の近くの七十五坪の土地に家を新築して住んだ。〔130、157〕

松木氏は数年後に同社を辞職し、朝鮮某地のスタンダード石油会社の支店長として勤務したが、トヨはその後松木氏と死別、再び長崎に帰った。そして15年ぶりに、正男と親子水入らずの生活をするようになった。〔130〕
〈六三亭は実際にトヨが行った時期に開業したが、トヨ

の名前はまだ確認できない。また、正男の原文には「此の時代の白石氏の夫人は、当市日本人租界内の上海東亜洋行（旅館経営）のゲーム係であり、夫君は全市の支那人家屋の室を借り受け、細々ながら『おでん爛酒』の店を」経営していたとあるが、白石六三郎はおでん屋ではなく「六三庵」という日本式の麵屋を1898（明治31）年に開業し、1900（同33）年に六三亭を開業している²⁶。〉

6.10 正男との親子生活、 Rundholm の支援

トヨは本紙屋町に手ごろな家を見つけて下宿屋を始めた。ちょうどその大正の初め頃、旧知の Rundholm にバッタリ再会し、お互い喜び合った。〔131-132〕

東洋航路の船長として活躍した Rundholm は、引退して長崎郊外大草の海辺に洋館を建て、妻の松本ヒロと老後を過ごしていた。〔126〕

Rundholm は別れ際にトヨの手にお礼を握らせ「これは一時のお礼心です。今でもパワーズ氏とあなたのご親切は忘れません。パワーズ氏の孫の正男さんの教育を私からも頼みます」と五十円を渡し、下宿屋をすぐに止めるようトヨを諭した。トヨは改めて大草の Rundholm 邸を訪問する約束をした。トヨは「あの時はちょうど助け神様の思いがした」と思い出すたび正男に話した。〔132〕

その後お互いの家を訪れるようになり、同氏は正男の教育環境に留意し、二人を東山手のある洋館に落着かせ、正男はそこから通学した。こうして正男親子は同氏の庇護の下に生活するようになった。Rundholm は正男が中学を終えてまもなく、大正7年9月20日に永眠した。〔131-133〕

6.11 中学卒業後の正男

正男は中学を卒業すると、マニラや上海に出て活躍した。恩人の Rundholm が大正7年に死去したことを上海で母の頼りによって知り、それ以降、毎月20円の小為替を上海日本郵便局から母トヨに送金した。それから父ジョンの旧友の推薦で神戸の米国貿易会社神戸支店に転職したが、第一次世界大戦後の不景気により会社が一時閉鎖されたため決心して長崎に帰り、再びトヨと住むようになった。〔172-173〕

7. 分岐点—中傷と外套

7.1 正男の外套

「明治三十五・六年の頃のことであった。丁度その日は正月元旦で、昨夜から降り注いだ雪は、その朝はからりと晴れ渡ってはいたが、肌寒い朝のことであった」。母の残像「終局編」は、正男5、6歳の正月、雪の朝の情景から始まる。

正男は祖母ヨシに呼ばれ、これを着てみなさいと、見たこともないようなすばらしい色合いで手ざわりのいい子ども用の外套（マント）を、慈愛に満ちた顔で手渡された。外套は身丈もぴったりで、すらりとした色白の正男によく似合った。それを着て隣町までお参りに行くように言われ、正男は外に出てお参りを済ませると晴れ晴れとした気分になった。この喜びを分かち合いたい衝動に駆られ、再婚して近くに住む母トヨの家立ち寄ったが、母はその外套はどうしたのかと問い、穢らわしい物でも剥ぎ取るようにして脱がせてしまった。肌寒い雪の日に優しい母がそのような態度をとった理由が幼い正男には解らず、この時から少しずつ、自分がどのような立場の生まれなのか疑うようになった。[154-159]

7.2 中傷の遺恨

外套の一件は、正男の将来の運命を狂わせる重大な錯誤を来たしたと正男は綴る。「終局編」ではまず、母トヨと祖母サトの遺恨についての説明が延々と続く。「私がパウルス家から去らなければならなかった原因は、周囲の者の悪辣な手段方法が憎く、そしてお前が段々無事に大きくなり成長して行くのを、お前の祖母のサト女が、垣間見て欲しくなったので、今更得手勝手な気持でマントと帆前船を送り、人の心を釣ろうと計ったので、母さんはそれが心から憎く、腹癒せにそれを返してやったの」と、母トヨは後に涙ながらに話した。

サトとしては、もしトヨとその両親の家族が、今までの誤解から生じた葛藤や感情を水に流しその贈り物を受け取ってくれたら和解したとみなし、正男を船木サトの籍に入れ、相当の財産を継がせる決心をしていた。

[160-161]

周囲の者の悪辣な手段を信じトヨをかりそめにも疑ったことを、サトがいかに後悔したかは計り知れなかった。そのなかでトヨが上海で再婚し長崎に転居したことを風

の便りで知り、仲直りのしるしとしてトヨの両親宅に正男へ外套と木製中型帆前船の贈り物をしたのだった。

[162]

しかしトヨは昔の遺恨から、それを邪険にサトへと突き返した。その真情は理解できる気はするが、一方で祖母サトとしては将来の希望も失い、その夜は眠れないほど悶え苦しんだことだろう。トヨは内心男勝りの気性で、教養も人一倍身につけていたので、却ってある意味では両者間に妥協性を失うような結果になったのだろう。

相手にあらゆる礼節を尽くして接するトヨが、サトに対しては人格を踏みこむような不尊な態度をとったことは、そのように賢明なトヨでも、断じて許すことができない恥知らずの極みである中傷者の行為と、それに惑わされた者への反感があまりにも大きかったのだった。

[162-163] 一方その頃のサトは、裕福な家庭の婦人にありがちなわがままな点を大いに持ち合わせていた。

[166]

正男は祖母のサトに直面した時にはじめて、自分が奇しき運命のもとに生まれてきたことを臆気に知った。そしてパワーズ家に入出入りするようになってから、母トヨやその両親、弟妹からも、両家の経緯を徐々に打ち明けられて理解することができた。トヨの両親は、娘を信じて成り行きに任せていたのだった。また「生みの親より育ての親」といわれるように身近な愛情の面では、乳児の頃から育ててくれたトヨの両親に対する正男の愛情は、やはり絶大なものだった。[165]

7.3 「母の残像」の完結

正男は終局編で外套事件について語った後、祖父ロドニーや祖母サトとの思い出、死別、商会の最後について記述するのだが、それからもう一度外套事件に話を戻す。その光景と、背後にあった中傷事件、熊定の死、トヨの心情について詳細に説明し、トヨとサトの軋轢と惜別について、考えをめぐらせる。

トヨが商会から離れ去ってみると、やはりサトとしては何か物足りなく、四十歳半ばを越えようとする心境の変化によることながら、現在離れていても同じ土地に可愛い孫の正男がいれば、正男のためにもサトのためにも、いつまでも祖母と孫との名乗り合いもできないことは、残念なことだったろう。そしてサトは、今さらのように

トヨのこれまでの内助の功が思い出され、味気ない年月を過ごしたのであった。[181]

しかし反対に、トヨは商会からの別離の悲しみにいつまでも溺れる暇も余裕もなく忽然として意を決し、ただ自分がこれまで身につけた教養と芸能を資本として上海に渡ってむしろ自由な立場から独立独歩の自活力を發揮し、上海の各機関から公私ともに大歓迎を受けた。[181-182]そして、トヨが語った上海での経験談と正男の回想で「母の残像」は完結する。

8. 考察

「母の残像」の序文には、杉本正男が母トヨの存命中に見聞したままの経験を実歴伝として伝えたいとあるが、同書は実際には、明治期のパワーズ家、パワーズ商会、そして長崎外国人居留地について、著者の杉本正男が直接目にしたものも含めて詳細に記録した資料にもなっている。

同書には杉本トヨの回想と正男の回想、記録、考察が混在し、時間軸も前後するため、構成が複雑で難解になっているが、その大きな主題は、本稿 3 章および 6 章に整理した事歴にみられるトヨが身につけた「諸芸と教養」、そしてそれらを支柱として生きたトヨの「数奇な運命」ではないかと考える。

同書の冒頭約 20 ページは、少女の頃から佐世保での奉公までのトヨの諸芸と教養の修業期の記述である。そして修養を積み一人前としての価値ができた頃、トヨは両家の奇縁からパワーズ家に嫁ぎ [28]、そこで華やかな社交と文明開化の潮流に乗ってさらに新しい教養を身につけ [20]、パワーズ商会の家族の一員として、円熟した技能と才能を發揮して活躍した。[28]

正男は母トヨがそのように活躍した場として、本稿 4 章および 5 章で筆者が整理したパワーズ商会や人物、居留地社会について、詳細に記録しているように思われる。そして 10 ページにわたるニコライ皇太子訪問の記述 [92-101] は、トヨが修練を積んだ技芸を披露した栄光の晴れ舞台として描かれているようである。しかしその後のトヨは「終局篇」に詳しく記されるように、ある商会員の中傷により姑のサトとの間に軋轢が生じ、正男を妊娠中にパワーズ家を出る。出産後に離別して単独で上海にまで渡る数奇な運命をたどるが、そこでもトヨの諸

芸と教養が支えとなって独立独歩で活躍する。[188-192]

トヨがパワーズ家を出たことは、正男にも数奇な運命をもたらした。正男自身の思いはまさに「終局編」において、次のように凝縮されていると捉えられる。①自分がパワーズの正統な孫とは知らず、杉本姓を名乗る運命となったこと、②杉本トヨと姑の船木サトの間に軋轢が生じ、トヨはお腹に正男を宿したままパワーズ家を出たこと、③その元凶としてパワーズの財産を狙った商会員による、トヨを中傷する事件があったこと、④5、6 年の歳月を経ても、中傷者を一時でも信じた船木サトに対するトヨの遺恨は残り、正男に贈られた外套を突き返したことにより、数年後に第三者が取り持つまでパワーズ家の祖父母と孫の対面はならなかったこと。それらを残念に思う正男の気持ちが切々と伝わってくる。

しかし最後に述べられるのは、母トヨ、トヨの両親と弟妹、ロドニーとサト、パワーズ商会の思い出と感謝、慕わしさである。それを示す正男の原文を引用し、読みやすくするため少し手を加えた文を、以下に記したい。

正男は、母トヨの晩年によく落ち着いて一緒に生活するようになってからも時折、パウルス商会に土曜から日曜にかけて泊まりに通っていたあの楽しかったことや、父や祖父母の死に直面して、悲しい思いをしたことなどを思い出し、時にはふと、昔の出来事の中の夢を見ることがあった。それは、あの懐かしいパウルス商会の 2 階の 1 室で、特に豪華な金メッキの大寝台の上にサトと一緒に寝ていて、周囲に美しい装飾がされたその部屋に、今なお現実の世界でもあるように彷徨い続け、朝になるとあのクラシックな 2 階の廊下を通して、広いベランダなどを散歩していて、祖父 R・H・パウルス氏の手から、会うたびに、昔の円銀貨を 2 枚正男の手に渡されることなど、夢の世界に引き入れられることもあった。[176-177]

今は亡き母の面影を今更ながら脳裏に呼び起こしながら、ある一点を見つめて瞑目していると、色とりどりの過去の思い出が残像となって甦り、著者の眼底に懐かしい、慕わしい感情が込み上げてくるのである。[209]

杉本正男と妻千代子は、四男三女に恵まれた。トヨは正男一家と同居せず、近くで三味線などを教えながら暮らしたという²⁷。正男は1945（昭和20）年8月15日の終戦から1955（昭和30）年11月4日まで、長崎県庁、県立長崎図書館に奉職。〔82〕正男は母トヨの没後3ヵ月に職を去った。「母の残像」の序文には昭和32年9月1日の日付があり、正男はトヨの逝去後まもなく、同書の執筆を開始したと思われる。

9. 結び

筆者らは本稿において、長崎歴史文化博物館に保存されている杉本正男著「母の残像」を精査し、明治期長崎外国人居留地を代表する貿易商ロドニー・パワーズの子孫が残した居留地研究のための新資料として、同書をいわば再発見した。同書の内容はさらに検証する必要があるが、パワーズ家および同商会の記録、また同家に嫁いだ日本人女性杉本トヨの生涯について、貴重な資料であることは確かである。

なお、杉本正男が寄贈した資料は、同書の他にも複数存在することを筆者らは確認しており、資料相互の関連性についても現在調査を進めている。

杉本家では、父正男が同書を執筆したこと、寄贈したことをまったく知らなかったという。また、同書には杉本正男の第二次世界大戦前までの事歴しか記されていない。そして「母の残像」はなぜ、手書き原稿用紙のまま製本されて寄贈に至ったのか。今後さらに調査を進めて報告したい。

杉本トヨや船木サトの生涯は、拙稿ですでに報告した飯田ナカとともに、長崎居留地の男性と関わりのあった日本人女性のライフコースを考察する上でも重要である。ロドニー・パワーズの子ジョン・パワーズと中山マサ、孫の杉本正男についても、第二、第三世代の生き方として注目される。パワーズ家およびパワーズ商会の全容を解明することにより、長崎居留地とは何だったのか、その実態の重要な一面が明らかになることが期待される。

謝辞

本研究を進めるにあたり、杉本家の皆様に多大なご協力を頂戴しました。深く感謝申し上げます。

注

- 1 レイン・アーンズ／ブライアン・バークガフニ、1991
- 2 レイン・アーンズ、2002
- 3 木下孝、2009
- 4 浜崎国男、1978
- 5 生没年はすべて杉本家調査（2021）で確認した。正男以外のデータは木下にも含まれる（木下 p.204）。
- 6 中島恭子、2021
- 7 菱谷武平、1998
- 8 ブライアン・バークガフニ、2007
- 9 ブライアン・バークガフニ、2014
- 10 木下、p.204
- 11 飯田家調査（2017）
- 12 後の国会議員中山マサ
- 13 ロドニーには来日前に結婚したアメリカ人女性もいたとみられる。
(<https://www.findagrave.com/memorial/77635972/rodney-huntington-powers>、2022年9月23日閲覧)
- 14 船木サトは「さと」と表記されることもあるが、本稿ではサトに統一する。
- 15 拙稿、p.3
- 16 ただしニコライ皇太子の来崎については、断定の文体で書くことを例外的に差し控える。
- 17 この内容は浜崎にも記載されており（浜崎、pp.280-282）「母の残像」を参照したと考えられる。
- 18 浜崎、pp.280-282
- 19 アーンズ、p.171
- 20 木下、p.206
- 21 当時の状況はバークガフニ（2020）に詳しい。（pp.46-50）
- 22 バークガフニ（2019）
- 23 佐世保市「日本遺産（鎮守府）説明板の設置について」
(<https://www.city.sasebo.lg.jp/kyouiku/bunzai/nihonis.html>、2022年9月24日閲覧)
- 24 保田、p.23
- 25 長崎県外事課「露国皇太子殿下御来港一件 明治24年」長崎歴史文化博物館蔵
- 26 陳祖恩、p.29
- 27 飯田家調査（2017）、杉本家調査（2021）

参考文献

- レイン・アーンズ『長崎居留地の西洋人—幕末・明治・大正・昭和』、長崎文献社、2002
- レイン・アーンズ、ブライアン・バークガフニ『時の流れを超えて—長崎国際墓地に眠る人々』長崎文献社、1991
- 木下孝『長崎に眠る西洋人』、長崎文献社、2009
- 陳祖恩著・大里浩秋監訳『上海に生きた日本人—幕末から敗戦まで』、大修館書店、2010
- 中島恭子「『飯田家写真資料』の意義と可能性—家族史を長崎近代史研究に接続する」『地域論叢』No.36、長崎総合科学大学地域科学研究所、2021
- 浜崎国男『長崎異人街誌』、葦書房、1978
- 菱谷武平『長崎外国人居留地の研究』九州大学出版会、1998
- ブライアン・バークガフニ「ウォーカー家の足跡調査にもとづく長崎居留地の通史的研究」博士論文、長崎総合科学大学工学研究科、2007
- ブライアン・バークガフニ『リンガー家秘録』長崎文献社、2014
- ブライアン・バークガフニ「ベルンハードとヒロの世界」『楽』43号、イーズワークス、2019、pp.108-111
- ブライアン・バークガフニ『写真でたどる旧グラバー住宅の歴史』、フライング・クレイン・プレス、2020
- 保田孝一『最後の皇帝ニコライ 2 世の日記 増補』朝日新聞社、1990

付録 杉本正男「母の残像」テキストデータ

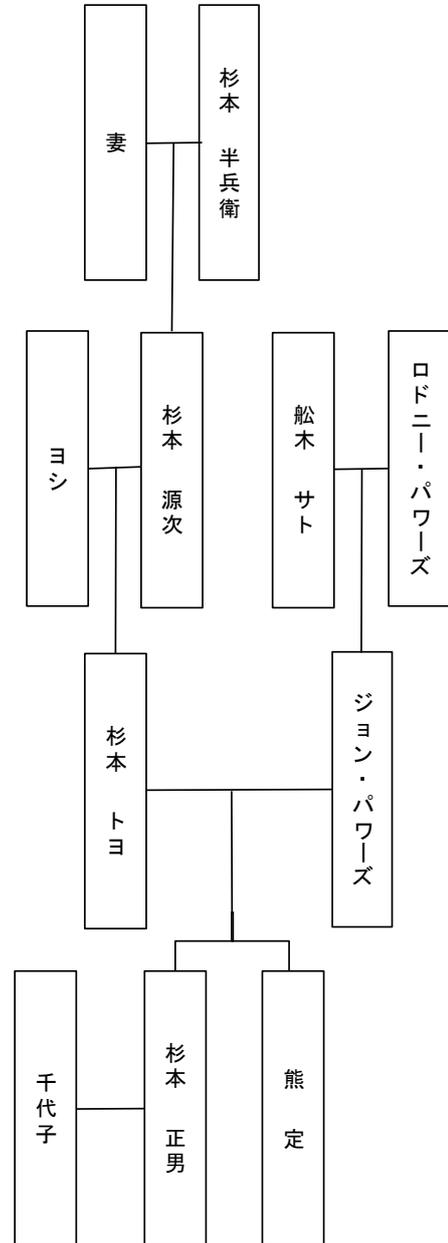
【書誌的事項】

- ・「母の残像」は 20 字×20 行の 400 字詰め原稿用紙 210 枚に書かれた原稿である。
- ・原稿用紙は半分に折り込まれ、3 冊に分けて綴じられている。杉本の筆とみられる中表紙が各巻にある。
- ・1 枚目の自序と書かれた原稿用紙にはページ数がなく、2 枚目以降に 1 から 209 まで通し番号が記入されている。
- ・原稿はペンで手書きされ、自序と 166 枚目の途中からは青インク、それ以外は黒インクで書かれている。
- ・昭和 46 年 8 月杉本正男寄贈、長崎県立図書館の受贈印が各巻にある。
- ・関係写真在中と記載された写真入りの封筒が 3 冊目に付けられ、昭和 52 年 3 月 10 日の日付印があり、後年に追加で寄贈あるいは整理されたものと考えられる。

【凡例】

- (1)本文のテキストデータ化にあたり、次の点に留意した。
- ①同書は手書きの文で、旧字体が多く使われているが、テキスト化の際は、旧字体の活字があるものはそれを用い、ないものは新字体を使用した。
 - ②送り仮名は、現在は一般的に使われていない表記や、書き間違いと思われる部分も、原文のままとした。
 - ③原文には、ペンによる追加的な書き込み、抹消の線、鉛筆での書き込み、杉本の朱印がある修正という数種類の加除修正があるが、テキスト化に際しては本文と同一として組み込んだ。
 - ④原文には改行がほとんどないがそれも原文通りとした。
 - ⑤読点については、読点とペン休めと思われる点との区別が困難なため、作成者で適宜判断して打った。
 - ⑥ページ番号は [] を付して記した。その番号は、製本された同書の見開きを 1 ページとして、その原稿用紙に著者が記した数字を、テキスト版のページ番号とした。
 - ⑦年齢は数え年と満年齢の両方が使われていると思われるが、原文のままとし「才」で表記した。
 - ⑧テキストデータ化の際には著者の誤記と思われるものも原文のまま入力しているが、作成者による誤入力などのミスが含まれている可能性がある。
- (2)同書の内容理解のため関係図を作成し、右に示した。
- (3)テキスト化は齊藤綾と中島恭子が共同して行った。

杉本家関係図



母乃残像

(長崎大浦居留地取締役の由来篇)

自序

この著作を思ひ立ったのは、長崎人として、明治初期以来、幾多の世の数奇なコースを辿られた、杉本トヨ（明治五年十一月五日生、昭和三十年八月四日死）の優れた記憶力と研究心と、人間の修養すべき有らゆる範囲に活躍され、上流社会では、皇族から内外人の知名士や常人に至るまで、面接の機会に恵まれ、修業された幾多の貴重な体験や、教養を蓄積されていた点を惜み、全女の存命中に著者が見聞した儘を、実歴伝として世に伝へ度く、全女に著述の快諾を得ていたので、不完全ながら聊でも、読者諸君に理解され、益するところがあれば、幸いである。

御愛読あらんことを乞ふ。

昭和三十二年九月一日

著者誌す。

[1] 母の残像

トヨ女の曾祖父は、元熊本細川侯の御典医であり、九州筑後柳河立花藩の祐筆として奉仕されていた、三人兄弟の中の長男であった。

書道は、支那古代諸家の書法を習得され、特に、支那陳（隋）代の釋智永先生の独特の総合的書法を研修されていたと思はれるのは、トヨ女の長崎の町の生家で、著者が青年時代に、全先生の書の、千字文の法帳（拓本）を発見したので、母トヨ女の父にその事を尋ねて見るとその通りであつた [2] た。事実、トヨ女の先祖の墓に祖父と共に詣でた際、その墓石に曾祖父が、生前から書残されていた各戒名の書風は、確に、釋智永先生の書法に誤りがなかった。と云ふのは、著者も少年の頃から書塾に通い、縁あって全先生の書法を習得していたからであった。その書法は、支那流独特の風趣と重厚な書風は、現代の無氣力な、そして、運筆の変化に乏しい単純な書法とは比すべくもない、精神的な書風であるからである。曾祖父は、姓は杉本、名は半兵衛、字は忠親と云はれ、前記兩藩に奉職されていたころは本姓は江頭氏で、長崎に移住された頃、縁あって全市の江戸町の杉本家の米・酒問屋の婿養子として迎へられ、杉本氏を名乗られたのであ

つた。その曾祖父の長男が源次と云い、トヨ女の父であつて、全父の生れた時代は丁度、徳川幕府も互解一步前であつたので、曾祖父は、時勢の変遷を見るに敏なる方であつたので、長男の源次は寧ろ、次の新しい時代に適した本人の特技を活し、生活の資とするのが [3] 最も賢明な策と思はれたのであつた。そこで、幸にもその長男が、生れつき手藝が器用であつたので、和洋服仕立職を修養させられ、遂にその手腕を發揮し一家をなされ、全市の一流の仕立処となられたのであつた。云ふまでもなく、曾祖父は代々武家の厳格な家に育ち、武士特有の風格を備へておられたが、その風格の中にも格式張った武骨なところがなく、温厚な、寧ろ美丈夫肌の持主であつた。であるので、その長男の源次も父に似て、若い時から多方面から婿養子に迎へんと、手を替へ、品を替へて、望まれていたのであつたが、曾祖父は一度養子で失敗されていて、一人息の源次を手放し兼ねて、これには困り果て、おられたのであつた。一例を挙げると、全市で或相当の暮しをしていた商家の両親もその娘も、陰ながら長男源次を見るにつけ、悶々の情熱し難く、遂に頭を低うして養子として懇願されたのであつた。併、曾祖父も養子縁組は一度で懲り懲りされたこととて、直に拒絶 [4] されたのであつたが、「一時婚姻の都合上養子として迎へ、時機を見て、改めて杉本家へ当方の娘を縁付けるから」との約束の下に、両家は結婚式を挙げて先方へ長男源次を婿として行かせられたのであつた。が、何時まで経っても長男源次とその先方の娘とを杉本家へ興入さず様子がないので、遂に、予て温厚な物堅い曾祖父も立腹され、自身でその長男の縁付先へ出向き、源次を連れ帰られ、その儘両家の縁組は立消えとなつたのであつた。尤も両家としては各自独り息と独り娘であつたので、詮方ないことで、餘り好かれても却って迷惑なことではある。その後長男源次の身を早く固めさせなければ、お互に不幸な目に会ふと曾祖父は思はれ、全町近くに某材木商の末娘を源次の妻として迎へさせられたのであつた。その娘と云ふのが、トヨ女の母に当る人で、ヨシ女と云い至って慎しい性格の持主であつたが、又嗜の良い人でもあつた。著者のためにも優しい祖母であつた [5] と同時に、物事に無駄をされず、儉しく九人もの多くの子供を設けられ、煩はしい生活の中にあつて、良く養育された賢婦であつた。こうして源次は正直一途に大世帯

を妻ヨシ女と共に職業を勵まれていたが、明治十年の西南役には仕事も忙しくなり、狭い家に五・六人の弟子を通はせ、官軍の軍服の需要に応ぜられ、頗る多忙を極められていたのであった。その頃のみシンは、独逸製ながら貧弱なもので、ガラガラ音のする手ミシンであったが、手縫いよりも寧ろ能率的であったので、大いに収益を上げられたのであった。

母トヨ女の父の源次は、これ亦至って温厚篤実の人で、町でも親孝行の評判が高く、良くその父に仕へ勞っておられたので、その当時の縣令（県知事）から、長崎では只二人の表彰者が出た中の一人であった。このトヨ女の父が七十三才で亡くなるまで永住された新橋町々内で、兄弟姉妹合せて九人の子供等の生活の中、五人が惜しくも早世し、ト [6] ヨ女は長女として生長するにつけ、後に残された三人の弟妹や、だんだん老境にいられる両親のために、少女時代に最早責任を感じねばならない程な、トヨ女の両親の家庭は餘り苦しくない状態であったので、トヨ女は愈責任を感じさせられる身となったのである。であるからトヨ女は幼少の頃から、機会ある毎に、例へ無理しても、将来の生活戦線の活躍に備へるために、諸藝の修業だけは全女の両親にその後援を要求されて、怠りなく勵まれていた。又一面、生れ付好きでもあったので、「好きこそ物の上手なれ」の例の如く、ぐんぐん上達されて行ったのであった。そして、その道の専門家に認められる様になられたのであった。曾祖父半兵衛忠親は、明治七年十月十八日に七十六才で歿せられたが、全氏の存命中は、各町から文筆を依頼に来る者が多く、全氏のチヨン髷時代の名残りの、明治四年に撮影された寫眞を、著者は或時偶然全家で発見し、それを拡大して所持している。これを [7] 撮影した寫眞師は、彼の有名な日本最初の寫眞術の祖として知られた、上野彦馬翁の邸宅で撮影されたものである。トヨ女はこうした家庭に育ち、だんだん全女が成長するにつけ、家庭の經濟上にも全責任を一層感ぜられる様になり、苦しい生計を維持されている両親の様子を見るにつけ、全女は一日でも早く生活の補助を実行しなければと決心され、何かと他家の手伝等をして、生計の資を償はれていた。トヨ女は天性の理智に富んだ人で、利己的でなく、良く家族ばかりでなく、他人にも自身で出来る限りの便誼を與へられていた。それに系統的に云っても美貌の生れつきで、特に眼

が生き生きとしていて、その性格を表はし、良く物事に氣がつく人であったので、あらゆる階級の人から尊敬され、慕はれていた。真実、杉本家の者は、世間並な、寧ろ細々と暮していたにも拘らず、男子も女子も皆品性が備っていたので、上下の階級を問はず、特殊階級に良くある金銭的や飲食の趣味関 [8] 係の友人からでなく、長崎人特有の真面目な人々から親しまれ、持囃されていた。それに、その頃、長崎は落ちついた平和な世相でもあったであろうが、性格的に皆従順で、物事に僻み心がなく、従って、割合に卑しい心を持った者が少った所為でもあった。丁度その頃の事であったが、トヨ女も既に十七才の年を迎えた明治二十一年頃、突然に長崎県佐世保市佐世保鎮守府司令長官であった海軍中將赤松剛義氏の時代に満三箇年の予定で全女は、全長官々舎に奉公に上ることになった。その頃、全市東浜町岡政といふ呉服太物商（現岡政デパート先代）の老舗の主人で、岡部政太郎氏と、橋本商会の先主で、橋本清氏と、それに、佐世保鎮守府御用請負業者であった市村庄太郎氏（旧長崎税関の建設者）との三人の推薦で、全官舎にトヨ女は奉公することになったのである。それは、トヨ女としても亦、全女の一家のためにも、幸都合な、幸運の兆が現はれた思いであった。その上トヨ女は [9] 普通の女中ではなく、奉公人の取締の資格で勤めることになり、これ等の親切な人々に同伴され、全官舎を訪られたのであった。全長官夫妻は早速四人を応接間に通され、トヨ女は三人から全夫妻に紹介され、初対面の挨拶の際、全長官が全女に対し第一番に尋ねられた言葉は、「あなたは給金は幾程望めますか」とちっとトヨ女の目を見て微笑しながら問われたのに対して、全女は一寸考える風をして、でも平然として何の臆するところなく、「私は始めから、給金を目当てに御奉公に上ったのではありません。給金よりも寧ろ優れた学校に入学する氣持で参ったのであります。」と前提して、「それに礼儀作法や教養一切を実施に身につけるために勉強させて戴き度い決心で参りましたから、私の働きの程度で、給金を頂戴させて戴きますれば、結構であります。」と大略右の様な答辯を何んの氣兼ねもなく申し上げたので、全夫妻は感に堪えた様にお互に顔を見合せられ、感激されたのであつ [10] た。後で、推進者三人に対されて、「今迄にこの様な事を申した者はなく、只給金や見栄等が目的であつて、形式的

な浮つ調子な氣持で奉公に上る人の多い世の中に、斯る感ずべき立派な娘さんを良く世話して下って、何んとも感謝に堪へない。」と、却って三人に厚く推薦の労を稿はれたのであった。トヨ女は、こんな心掛けを何時も忘れないで、何事も修業といふことを念頭に置き専念し、奉公人の取締や、その他の用務をきびきびと処理され、精勤されていた。或時は、全女がこれ亦受持である、全官舎に出入の商人からの進物のカステーラやその他の食料品の保管の整理をしなければならなかった。そんな進物品は、優に食料品販売店の観があり、廣々とした保管室に充満され置場に困る程であった。又トヨ女は訪問者の接待やら取次やらで、毎日多忙な日が続き、奉公人を勵まして、自ら率先して働かれるのであったが、トヨ女の一番苦手とされていたのは、毎日次から次と兵卒が軍務の用件 [11] を報告に来る伝令を取次ぎ、長官に報告しなければならないことであった。トヨ女は人に負けることが嫌いな性分であったので、大抵のことは理解力があつたが、只一つ、この伝令兵の伝言だけは理解し兼ねられていた。そこで、或時トヨ女は、司令長官に対し、「毎日来ます伝令兵の報告が早いので、その意味が解らず、良くお伝へすることが出来ませんので、申訳がないと思っています。」と正直に告げられると、予て、普通の者の取次では解らないのが当然とされていたので、却って氣の毒に思はれ笑つて、「そんなことは氣に兼ねないでよろしい。あれは自分が予て言い付けていることを報告に来るのだから、兵が報告し終つたら、解らないでも只御苦勞様と申していればよいのです」と言はれたので、兩人は大笑いされて、トヨ女は何時も長官から、困つた時には優しい注意を受け言い聞けられていた。長官はそれ等進物用の菓子類は一切口にされない [12]、室に甞るばかりであつたので、トヨ女は菓子類の腐敗しない前に、奉公人にも分け與へて貰ふ様に思はれ、長官の許可を得て古いのから整理されていたので、官舎の用人や女中等は、その菓子類が整理され、トヨ女から皆に分配されるのを楽しみとしていた。偶には思い出された様に長官がトヨ女に対し、「菓子類でも食料品その他、必要なだけ、あなたの御両親宅に送って上げなさい」と親切に申されていた。又トヨ女の両親も、わざわざ長官の好意で数回佐世保に呼ばれ、処々を見物させられたこともあつた。偶々、東京から佐世保水交社にお成りになつ

た有栖川宮殿下御夫妻が、序に全長官々舎を訪れられた時のことであつた。その時長官は、お気に入りのトヨ女を特に全殿下御夫妻のお食事の接待役を申し渡されたのであつた。併、トヨ女は直ぐに他の人の様に有頂天になつて、引受ける様な無遠慮な出しやばり屋でもなかつたので、一応長官に、「私よりもっと慣れた方にお給 [13] 事係を御附け下さい」と辞退されたのであるが、更に長官は、「他の者では駄目です。あなたなら決して両殿下の前に行かれても恥入ることはなく、立派に給事や応答を果されると確信しますから」と申され、「それから、一言注意して置きますが、誰れの前に行くとも、決して憶することなく、無念無想の心構へで、普通人と変わらない氣持で接することが大切で、憶すると却つて失敗するものです。」と長官は呉れ呉れも人間修業の一端を教諭され、「その精神で何事も運べば、決して失礼なことを支出かすことも亦、過を犯す様なこともないから、平易な落付いた氣持で、是非、お給事役をお願いします。」と強要されたので、トヨ女は何も修業と決心し、心良く引受けたのであつた。トヨ女がこうして殿下御夫妻のお側で、お給事役に当たっている時に感じたことは、「生むより易し」の例の如く、「殿下御夫妻とも至つて平民的で、しかも、トヨ女に対して、丁度友人でもある様に振舞はれたことで [14] あつた。」と云ふのは、殿下はトヨ女に、「私等随員と同伴しなければならないので、却つて堅苦しく振舞はれるので、のんびりとなれなくて迷惑してやりきれませんよ」と冗談の様に話され、「特に長崎の方は、全国でも稀な、心から親切で、親しみ易い人が多く、純情である様に、私は何時も会ふ如にそう感じますよ」と親し氣に仰せられのであつた。誠に明治、大正の初期までは、特に長崎の山水に恵まれた、落付のある土地柄は、他から攪乱される恐れもない自由の天地で、然も早くから、他国よりも率先して開港されただけに、あらゆる種類の人々との交際や、物の交流の機会に恵まれた関係上、人々に親しみを覚え暮す人が多く、別世界の観があつた様な、現在よりも一層痛切に脳裡に浮んで来るのである。現在では昭和二十年八月九日の原爆の投下され、長崎市の約半分が焦土と化した原因にも依るが、昔から住んで居る人々は少くなり、旧家でも、第二世、第三世と移り変り、時代相とでも云ふ [15] か、人心の変化も生じてはいるが、何んと云つて

も、港長崎の奥深い海の周囲の山々の自然の美と、落付いた環境に恵まれて育つ樹木や人々は、自然的にのんびりと暮す性質を植え付けられ、穏な氣風が生じて来るものであろう。だから、一度他郷の人が、長崎に移住して来て、長崎人や土地柄を味ったならば、知らず知らずの中に、その風味に魅せられ、長崎から他に離れることが出来ないほど、長崎の魅力的な雰囲気に関心されて、愛着を感じ、永住する人々が、近年では益々殖えて人口が増加して行く様に感じられて来るのである。長崎では特に、職業別でも、その営業方法に依ってその人々の営業者で、その人々の故郷を窺い知ることが出来る様な状態であって、例へば、小間物屋系統の店の者ならば、主に京都方面の人々が多くあって、事実、言葉のアクセントやその態度からして、いつもそう云った店の人々を多く見受るのである。又寿司屋や水商売等の営業者でも、主に關西 [16] 方面や、九州では博多辺りからの移住者が多く、それ等の人々は、昔から相当に辛抱強く我が職を守り通して、可成の成功をしている人も多いのである。トヨ女が丁度佐世保鎮守府司令長官々舎に奉公に上ってから満三ヶ年目に、全司令長官が、愈々その司令長官の重職から引退される事に決定した二三日前に、トヨ女に対して、東京に同伴して呉れる様に要請されたのであった。長官はトヨ女に対して、「私は永らくの官職生活から身を引く様になり、愈二三日中に佐世保を出発することになりました。」と前提されて、「あなたをこの地方に置くことは惜しい氣がするので、あなたの御両親さへ御承諾なら私等と一緒に東京へ来ては呉れませんか」と懇望され、「若し、あなたが来て下されば、全責任を以て、あなたの将来の幸福を齎す様に努力し、立派な家庭の主婦となる様にお世話し度い。」と懇願されたのであった。が、トヨ女の両親は、全女の手腕と才氣とを自身の子ながら良く認識していられた [17] ことでもあり、殊に全女の将来を楽しみとして全女に頼っていられたので、東京行が幸運を招く様にも思はれるのであったが、全女を遠い他国に手離し兼ねられ、全女の父源次も全長官にトヨ女の東京に同伴されて行くことを涙ながらに辞退されたのであった。が、尚もトヨ女に対し、「私は東京で書籍店を開業する積りですから、若し東京に来る機会があなたにありましたら、是非、私の宅に立寄って下さい。」とトヨ女に自身の名詞を渡され惜別されたので

あった。実にこの時トヨ女の決心次第では、全長官夫妻の誘致を入れられ、単独行動を取られるために、全女の両親に対して我儘的に説得されたならば、全女の運命は南の長崎から東の東京の人へと人生の歩みが、変った方向に転換されていたことであろう。確かに人生と云ふものは、その時々の人々の環境や事業等で、幸不幸は兎も角として、宿命的な何物かが待っているものであろう。トヨ女は斯うした事情の基に、南の方向に人生の航路 [18] を辿らなければならない様に運命づけられる身となつたのであった。トヨ女は、この時から、全女の数奇な運命が、南の国長崎を起点として、廣く朝鮮、上海方面までも展開され、活動されねばならない結果となつたのであった。トヨ女が、佐世保鎮守府司令長官々舎を満三ヶ年間奉公し、全長官夫妻は固より、その他の人々からも尊敬と好意を寄せられ、惜まれながら無事職責を果され、一応長崎の両親の家に身を落ち付けて、家事の用務に追はれておられた時のことであつた。その頃、古くは安政年間から、長崎大浦居留地内に居を構へ、船具、食糧品や雑貨の卸、小賣を兼ね廣く内外貿易に活躍され、長崎に寄港する各国艦船に食糧品その他の必需品の注文に応じられていた、R. H. パウルス商会主の子息の J. R. パウルス氏とその母堂の船木サト女の懇請で、是非トヨ女をその子息の妻にと、トヨ女の両親宅に申し込んで来られたのであった。トヨ女の両親としては、此度の船木サト女からの縁談のこ [19] については、別に遠方に行つて嫁ぐ訳ではなし、身近に居られることではあるし、その上トヨ女をあらゆる点で信頼されていたことであるから、全女の幸福になることなら、何でも干渉がましいことは云はれない両親の性格でもあつた。だから、トヨ女がこの縁談を承諾されると、両家の婚姻関係はとんとん拍子に進められて行つたのであつた。

結婚式場は、明治洋画家の大家、山本森之助氏出生の家で、トヨ女の両親宅の全町の新橋町寺町通りの料亭「一力」に於て盛大に結婚披露宴が挙げられたのであつた。その宴席には、世の話題の人グラバー氏兄弟やホームリンガー商会主 F. リンガー氏その他パウルス商会に取引関係がある数多くの親友、知己や内外人を問はず、知名人々も列席され、互の隠し藝等も飛び出し、盛會を極められたのであつた。その頃の人々は皆そうであつた様に、トヨ女としても未だ、文明の開け端でもあつたこと

と、一つには好奇と好奇心か [20] らとでもあったであろうが、トヨ女もそうした両家の奇縁から、華かな社交会に出入する機会が訪れ、文明開化の潮流に乗って新しい教養を身につける様になったのであった。そして、長崎人は長崎としての誇と氣概を良く発揮され、海外までも足跡を残されることになったのである。丁度パウルス商会子息と結婚された時は、トヨ女が二十才の頃であった。若し前述の如く長官夫妻の懇請を入れられ、東京の人とトヨ女がなっていたら、全女の才智に溢れた人生は如何に変化したことであろうか。著者は思う。屹度トヨ女は東京でも一流の手腕を発揮され、人々から好意的歓迎を受けられたことであろう。トヨ女は晩年に何時も思い出した様に著者に云はれていたことは、「人の縁、不縁と云ふものは、不可思議なものであるね。」と往時を懐しく追想されて語られていた。トヨ女が万人からこうして歓迎されていたのも、結局は女性特有の天分と、常に全女の身嗜に依る美しい容姿と、人一倍公 [21] 徳心の強い結果に依るところであろう。それに、幼時から利発で、物事に研究心が強く、その上、内面的には人に敗ける事の嫌いな勝気な性格を多分に持たれたことに依るものであろう。従って、トヨ女は何時も目上の人と交際し、長所を取り入れ、短所を補ふ心掛けを忘れない人であったから、必然的に教養が身に着き、人より愛され、尊敬を受けられる結果になったのであろう。人類生活に於て、例外は別として、常に富者、貧者の差別を無責任に批判し合い、富者は貧者を疎んじ、軽んじ、貧者は富者に対し羨望の眼を向ける習性を多分に持ち合せ、潜在意識があるのは常人の哀れむべき弱点である。併、成可くなら、それ等の卑劣な意識から遠ざかる様に心掛け、将来の希望を持ち合ふ様に心掛け度いものである。人はいざ、徳行を実行する様に強いられても、自身の損徳を考へて、なかなか実行する人は少く、善悪を理解し、教養のある様に見受ける者でも、諺にもあるように、「論語読みの論語知らず」に終り [22] 勝ちになる者が多い世の中ではある。誠に修身の出来た人ほど、諺にも「一見して人を評する勿れ。」と言はれている如く、その人々の教養の程度を見て、極端にその人を卑下することなく、その相手の特質を良く導き、教へることが肝要と思う。人々はその心掛け次第で、皆善なり悪なりをそれ自身で、その種を蒔き、その境遇なり環境なりに左右さ

れ、支配され勝である。であるから、人は平素賢明な有益な教養を身につける様に心掛けるならば、自然に良い結果が生れ、報はれて、良い趣味趣向を身につけるならば、必然的にその人の品位向上を一層生み出し、温厚なる人格者となる可能性が多分に恵まれ、人から尊敬され、重宝がられる様になるものである。現代の世相を見聞するに、その教養施設が名ばかりであって、心の修養を怠り勝ちで、餘りに遊情的で、芳しくない刹那的趣味趣向を歓迎する人々が多く見受けられる事である。であるから、只徒らに貴重な時間を空費し、修業す [23] る時期を失い、良い教養を身につけることが出来ず、何の特徴もない平々凡々な者に終り、晩年に至って味気ない世を過す人々の多い世の中の様には思はれることを痛切に感じ取られる氣がするのである。此等の人々は、只若い時から世の中は飲食するためにのみ存在するものであると、認識不足に落ち入り、動物的存在に置かれ勝ちの人々で、歎敷しい次第ではある。トヨ女が、著者に対して、過去の面白いことばかりではなく、身のためになる話の中の一例を挙げれば、「芝居道は下司の鐘」と云ふことである。日本の武家政治の時代には言ふまでもなく、士、農、工、商と国民は皆階級づけられて生活しなければならなかった。だから、士階級を除き、農、工、商を営み生活する人々は、平素武家生活の内容、習慣、作法、修業やその他の諸式を良く見聞する機会に恵まれていなかったし、武家の日常の人間の厳しい礼儀作法を、それ等町人階級には特に理解されていなかった。そして、自由奔放な [24] らしのない町人生活様式とは格段の相異があったので、少しでも町人階級にも、その人間的礼儀作法や要素を心と目に植付けさせる目的のために、歌舞伎役者等が、大名や武家屋敷の宴席に餘興のために出入を許されているのを機会に、それ等藝人が見聞を廣め習得したのを材料に、一般階級にも普及する様になったものであった。だから、教養ある者と否とを問はず、武士道や人間社会中に存在し、展開される義理人情等を公衆に良く理解せる為めにも、大いに芝居道を見て、色々の社会相やその階級制度の善悪の場面を公表し、人間社会の短所、長所を補ふためにも、是非見辨へさせ、教化させる目的のために、昔から演藝が奨励され、流行の運びとなったのであった。何事も基本的に研究し考慮しなければ、只徒らに「空念佛」に終り、面白い、美しいとか悲

しいとか感じたばかりでは、心の目で見なければ、真の妙味を理解し、身に着けることは困難である。こうした見地から、トヨ女は常に心の [25] 目を働かせ、見聞を廣め、研究し、身に着け、機会ある如にあらゆる方面に接觸されたので、只群集真理的に学問する者よりも、良く実用的に教養を深められ、進んでその教養を生し、実行されたのであった。トヨ女が一等社会修養書として絶讃されていた本は、全女が佐世保鎮守府司令長官々舎に奉公中、全長官夫人から特別に別け與へられた、「女性と交際」と云ふ部厚い修養の本であったので、これがトヨ女のためには一層教養を身に着けるに役立ったのであった。こうして常に、精神的修養にも怠らず、心掛けられると共に、全女の一つの願望であり、趣味である歌舞音曲にも特に留意され、新内、常盤津、清元、長唄、小唄や歌沢の類に至るまで研究に餘念がなく、修業に心掛けられ、楽器では、三味線は勿論、鼓、鼓弓、月琴や琴等に至るまで、機会ある毎に、その師について学ばれていた。或年、著者が、某専門学校卒業生から記念にと、ヴヨリーンを貰い受けて、それで貧弱な手捌きで弾いていると、脇におら [26] れたトヨ女が、「一寸、それを借して御覧」と云って直ぐに、鼓弓を弾く姿勢を取られ、ヴァヨリーンを自身の膝に立て、「越後獅子の曲」を易々として弾かれた時には、餘り物事に驚かない著者も、目を見張ったことであった。と云ふのは、未だ、一度もトヨ女のヴァヨリーンを弾かれるのを見たこともないし、亦全女が洋楽に興味を持ってられることも、聞いたこともなかったから、「お母さんはそれを習ったことがありますか」と不信氣に尋ねて見ると、一寸笑って直ぐに、「こんな短い柄の楽器は、調子を合せ弾くのは習はないでも、一寸した唄位は易いものよ。」と無造作に答へられたので、一層驚かされたのであった。誠に一藝に秀でる様に修業した者は、斯うもなるものかと感心させられたこともあった。斯うした遊藝が、トヨ女の将来に幸福を齎し、自活上身を守る役にもなり、その頃は特に、これ等の諸藝が発達し、流行した時代であったので、文明開化の長崎に憧れ、藝能の一流の流れを汲 [27] む有名な人が、長崎に住居を構へ、有志の徒に教授されていた。その中には、大阪関西歌舞伎の大御所である実川延若の支流を吸む、中村宗十郎の藝風の師匠（初代中村雁次郎の父、中村翫雀の妹）についてもトヨ女は精魂を打ち込

まれ、師事され、舞踊では、山村流を体得されたのであった。その頃のこれ等有名人の師匠について学び、研究することは、現代人の想像すらも及ばぬことであって、現代の様に音符や曲目の指示の下に教授されるものではなく、皆音節などは空譜誦して、覚えて置き、予習しなければならず、少しでも音律に狂があっても容赦なく師匠の手から鞭や扇子が飛躍し、師の満足な批判と奥意を得るまでは、手足に生傷の堪へ間もなかった程、その修業が厳しかったのであった。そこで、教はる者も、教える者とは、真剣勝負をする氣構へて藝を磨き、その厳しい修業を味った者のみ知る人生の醍醐味でもあり、会心事でもあるのであった。何事も苦勞して見て、始めて、その味を意識し、その妙味を獲得出来るか [28] らである。こうした諸藝や諸式の修業の中に人間味としての魂の鍊簾が出来、真の教養と修養を身に着けることが出来るのである。その結果、心の修養の現として表面化し、人から尊敬や好意を受け、歓迎されることは当然過ぎる程当然と云はなければならない。丁度トヨ女が、こうした修業を勵まれ身に着け、一人前の人間としての価値が出来た頃の全女は二十才の頃であった。丁度その頃、長崎大浦居留地の海岸通りの三角形の廣大な敷地に建てられた R. H. パウルス商会主の妻女船木サト女が、トヨ女を是非とその子息の J. R. パウルス氏の嫁にと、トヨ女の両親宅に結婚を申し込まれて以来、トヨ女は全商会の家族の一員として、全女の円熟した技能と才能を充分に發揮され、活躍されることになったのである。先づ、トヨ女が縁付いた先のパウルス商会主 R. H. パウルス氏の夫人で、トヨ女のためには姑に当る船木サト女が養育された家庭は、全市大黒町の船木家の魚問屋の養 [29] 女として愛育されている中、全女は十五才の時、縁あって全商会主と結婚され、結婚後は全氏の親任厚く、五十五才まで、丁度明治四十二年五月六日に全女が急死されるまで、良く全氏に任へて、安樂死されたのであった。サト女の急死されたのは自宅ではなく、全市西上町の本蓮寺内で、全女は毎日の様に全寺に日参の日を最後に、住職その他寺僧に見守られながら、脳溢血のため永眠されたのであった。その頃、著者は丁度十三才であったが、全女は若年の頃から佛心の念厚く、全女は知る限りの貧困者には慈善を施され、全寺へは毎日抱へ車で、朝から夕影まで、辨当持参で、全寺の住職夫妻の室で、

食事や談話を共にされるのが、何よりも楽しみとされていた。従って、全寺の僧から下僕に至るまで、毎日午後三時頃のお茶の時間になると、茶菓子を饗応され、当時全寺にいた別府といふ小僧さんと著者と二人で、土曜、日曜の日には、良く買出しに遣らされたものだった。それは、寺内の各僧の一日の労 [30] を犒ひ、共に雑談の耽けられるのを何よりも楽しみにされていたので、皆から慈母の様に尊敬されていた。そして、サト女は全寺に限らず、当市の全宗旨の長照寺や大浦日進寺にも全様に参詣を怠らず、家庭の人といふよりも、社会事業家と云った様に、家庭には餘り居られず、抱へ車で外出される時が多く日々を過されていた。偶々 R. H. パウルス氏が、悪質の眼病に羅られた際には、医師でも全快が覚束ないと思はれる時には、全女は本蓮寺に朝早くから日参され、全氏の眼病平癒の祈願を依頼され、又、全女も連日熱心に朝夕祈願された甲斐があったか、奇蹟的にも全氏の執拗な眼病も間もなく全快された時には、全氏は、生れて始めて、心からサト女の熱意と、佛教の御利益のあらたかなことを悟られ、全寺に対しては、その後は何かと自身も寄進され、その時以来、全氏はパウルス家の全権をサト女に委任されるようになったのであった。サト女のこうした何不自由のない生活環境は、寺と共に過され、幸福な日常 [31] を続けられていたが、結果的には不幸であったと云ふのは、基礎の後継者について未完成の儘一生を終られ、寺内で急死されたと云ふのも、全女の前世からの約束事でもあったのか、因縁深い、宿命的な絆があったのであろう。著者が斯様にサト女について述べなければならない事はと云ふと、人類社会に於て、生活に餘裕があり、幸福相な家庭人として見受けられる様な人でも、人間俗人である限り、得てして無意識の中に我儘勝ちに落入り、理性を失い、事と次第に依っては取返しのつかない過失を犯し、結果的に幸・不幸が、何れとも解らない終末を告げる様な状態に追いやられるものではなかろうか。この短い、そして消極的な文意の真意を解するのに、読者は苦勞される方が多いことであろうことを念頭に置き、今はこれだけ述べさせて戴いて、読者がこの頁を繰られるに従い、大体この意味が読解されるであろう。併、現在も尚、長崎の各日蓮宗のお寺ではこうした船木サト [32] 女の功德で、全女の供養を毎日絶えさぬとのことで、世人としては珍らしい奇特新心

掛けの人であったことは事実である。次に、船木サト女の主人であった R. H. パウルス氏の来歴と職歴とを紹介し、本題の主人公であるトヨ女が、如何に全氏に敬愛され、全女も亦全氏を尊敬し、敬神的に手足となり、如何に内助の功を奏されたかと云ふことを述べなければ、トヨ女の全商会での家族の一員として、全女の蓄積された全才能や技能を現される道程が、読者に理解が出来ないからである。扱て、今から約一一〇年、即ち萬延一年に長崎港に突然寄港した米国々籍の機関付帆前船上から、堀の深い港内を抱く様な形状をしている、緑滴る四方の山々の波状形の風影を、豊かな黒色の顎髭を愛撫しながら、感慨深氣に見渡している長身で、健康そうな、未だ二十代と思はれる代表的な米国紳士があった。それは、実に、これからこの物語に現はれる R. H. パウルス氏であり、後にトヨ女の舅となる温厚な人格者で [33] あり、長崎に優先的に欧米物資の直輸入を計られ、長崎人ばかりでなく、県外の住民にもあらゆる便誼と潤の種を蒔れた人であった。R. H. パウルス氏の最初の長崎寄港の構想は、長崎の港湾、地形や東洋に稀な、人工を加へることなく自然的に良く恵まれた、山水画を思はせる様な、こうした風光明媚な、然も良く調和の取れた自然美に恵まれた長崎の特有性を、一目見られた時から、直感的に安住の地とし、幸い貿易にも便利な南の端の長崎に魅力を感じ、大いに手腕を振って見たい欲望に駆られたのであった。そして、地理的にも便利な長崎を内外貿易振興増進に相応しい土地柄であると、心に頷き決心されたのであった。こうした静かな夢見る様な四方の山々の背景に包まれた長崎の町を展望しながら、心に再来を約し、帰米されたのであった。R. H. パウルス氏は、帰米されると直に、全氏の家財、家屋を整理され、半年後には最早長崎に再来され、上陸の手續を取られ、初めは長崎の大浦下り松に落付かれた [34] のであった。全氏が長崎に落付かれると相前後して、T. A. グラバー氏もその弟の A. B. グラバー氏も英本国から来崎された時代であった。グラバー氏の兄は、南山手千杉の場所に、弟は現在お蝶夫人の縁の地と宣伝されている南山手の高台に居を構へられ、間もなく貿易商を運営されたのであるが、主に器具類や、船のチャーターを業とされ、大いに活躍されていた。世の話題として残る彼の有名な坂本龍馬等から、武器、弾薬等の輸入斡旋方を切望される儘に、一

臂の労を取られた人である。兄グラバー氏は、最初、坂本龍馬等を只徒らに世を攪乱する無類の徒ではないかと、その武器、弾薬の用途を疑はれ、拒絶されたのであったが、憂国の士で、然も勤王黨の旗頭格であることを、龍馬の再三の熱意と要請に依り、全氏も調査し認識されたので、彼の維新の大改革が成立したのであった。次に、全氏兄弟は世に廣く知られている曾ての長港外高島炭鉱の最初の経営者として、石炭事業 [35] にも活躍されていたが、同僚のブラウン商会主のC. ブラウン氏に全炭鉱を譲渡されたのであった。それは、全グラバー氏が、全市東山手の一角に茶製業を大々的に日本人従業人二・三百名を使用し、経営され、日本緑茶の輸出を奨励されていたので、高島炭鉱経営までは手が廻らなかつたからであった。この時代に長崎市史にもある様に、全市油屋町の大浦慶女と云ふ一日本婦人が、全グラバー氏の指導幹旋の結果、日本最初の欧米向け緑茶輸出商として全女も亦躍進された一人であった。前記のC. ブラウン氏は、日本政府に火薬（ハッパ）の使用の許可を受けられた人で、日本で最初にハッパを利用し、岩石の丘の貫通作業に成功され、現在全市梅香崎町通りから、東山手町活水短大の正門に通ずる切通しと云ふのがそれであつて、日本最初の切通しと稱される所以でもある。又、全ブラウン氏は、俗に「マフ」と稱せられる炭坑層の発見知識に天才的手腕の持主で、技師で [36] あるところから、長崎港外高島炭鉱の鉱脈を最初に発見した人で、地層学の権威者でもあつた。従つて、世に伝へられているグラバー氏が、全炭鉱を発見した人として宣伝されているのは誤りである。故に、何事に依らず、古今を通じて、一事件について有名人として世に進出した人物を最大限に評価するために、有無を問はず、枝葉をつけて装飾的にその人物を祭り上げる様に記述しようとするのが、一般史家の悪い習癖である。扱て、R. H. パウルス氏が米国から長崎に移住されると同時に、全市下り松四二番館に前記のC. ブラウン氏が、ブラウン商会として発足されることになったので、R. H. パウルス氏は全商会と共同経営を続けられていたが、全商会の事業が、餘り振はないところから、商法に非凡なパウルス氏は、ブラウン氏と話し合の上独立して、思ふぞんぶん腕を振り度い一念から、別館の長崎大浦海岸通り十一番半の建物を賣取し、改築して、R. H. パウルス商会と改稱 [37] され、

輸入雑貨卸商会として、内外人の需要のため、第一歩を踏み出されたのであつた。全商は、営業運営上、左の通りの建築構想の下に建てられた商会であつた。それは、本館階下が、全室雑貨陳列を兼ね、片角を事務室に使用され、その階上の西側の半分は全部コンクリートで敷詰められたベランダ様式になっていた。そのベランダから、長崎港内外の出入船舶を展望するため、パウルス氏は常に用意されていた望遠鏡で、沖の方の状況を眺めるのが日課とされていた。そして、その場所で、宴会や毎年七月四日の米國独立記念日の祝儀が盛大に催され、手摺りの角に取り付けられている、数間もある旗竿に、米國々旗が何時も風に翻々と翻がへり、内外人知名、知己の人々を招待されていた。その人々の中では、特に、予て、全商会の輸出入品の手続上世話になる税関長、水上警察署長や長崎県庁幹部級の人々も含まれていた。トヨ女はこの様な宴席には、特に商会主パウルス氏から接待、応接役として [38] 依頼され、例の全氏が好まれる文金高島田髷を念入り結髪させられ、社交的に振舞らせられていた。パウルス全商会の前の道路の端筋が川沿いになっていて、直ぐ脇にある辨天橋等が、向う岸の下り松通りを結んでいる。その下り松通りを海岸沿いに真直に数町行くと、左へ少し曲り又右に折れると、小曾根町、波之平町通りと続き、堀堀までの行路になっている。又パウルス商会のその表りの正門の直ぐ向つて右脇が、十坪餘の鼠色のペンキで塗られた木造二階建の階下が、主に艦船積み込みのため準備されて、その室に吊下げられている牛、豚、羊、山羊や鳥類等の肉肌が曝され、保管されていた。此れ等の諸肉は卸、小賣もされるが、全商会前面の川に常に待機されている舳舟に諸物資と共に全商会のランチで曳航され、迅速に艦船の注文に依り賣渡されるのである。又野菜類や魚類は、新鮮なる物を要するので、積み込みされるその日迄に、長崎市内外は固より、県下から予て連絡されているので、全商会まで [39] 車力で持込まれ、諸肉と共に艦艇に積込まれ、その係員附添の上、艦船食糧係員に現金と引替に引渡されるのである。それ等の諸物資の支拂金は、その頃は全部金弗で、全商會員に支拂はれ、現金大袋に一杯の金貨を係員一同で護衛し、持帰つて、その金袋から出される金貨の光で、眩い位いで、壯觀を呈していた。或米國艦船の艦長や船長が、長崎に寄港し、全商会に立寄つた際、

口を洩らした言葉は、「丁度パウルス商会に本国の金貨を渡すために立寄る様なものである」と冗談話に花が咲いたことでも、如何にパウルス商会が各国艦船に信用取引されていたかが、窺はれるのである。それ等の諸物資の生産者へは、夫々の代価に応じて支拂はれていて、内地商人の商利を得て生活していた者は数限りでなかった程、その頃の長崎は全盛を極めていた。著者が、明治三十七年の小学一年生の頃、トヨ女の親友から密に全商会のサト女に会わせて貰って、土曜の午後から日曜にかけて、全女の元に通っていた頃であつた [40] た。全商会の正門の内側で、サト女が艦船に積込む魚類の中から斑節蝦（ケルマエビ）を車台から手掴に数匹取り出され、その蝦を輿の中に入れてられると間もなく、それが泳ぎ廻るのを見せて著者を楽しまされていたこともある。あの懐しい時代ではあつた。明治維新前後からの特徴のある建築材料としては、今尚残っているその頃の倉庫の壁や、建物の横壁に使用されている大きな切石の壁や、長崎人の煉瓦師が、始めてオランダ人から煉瓦製造法を教つたと云ひ伝えられている赤煉瓦で、建造されている煉瓦壁のものや、建物等が良く見受けられる、長崎の文明開化の時代の香の匂が嗅ぐことが出来る。丁度パウルス商会の横通りに面した長方形の平家建の倉庫用の横壁や、それに東方に並んで隣家が、元独逸領事館、ホームリンガー商会、英国領事館と米国領事館等が、切石で組立てられ、建造された建物が、夫々昔からの長崎の面影を残しているのである。それ等の切石で横壁を造築されている町角か [41] らその独逸領事館の隣までの長さ五・六間の倉庫の一部が、全商会の中庭に面して、舩係の舩頭の留所になっていた。そして、その内部の室は、ロープ類やその他の舩具等、大まかな貨物が保管されていた。その貨物倉庫と面して本館との奥の二階建の階下が、日本人の店員、女中等の食事室兼憩室に使用され、その隣室が台所になっていた。その上の階上がパウルス氏の子息 J. R. パウルス氏とトヨ女との十畳敷餘の専用室に當てられていた。その室の裏側の窓を開けると、丁度隣家の独逸領事館の裏庭が眺められた。又その室から左へ西北に向って直ぐ、一・二間先の廊下を又左へ曲ると、丁度右に曲れば西北向に中廊下があり、その左の端の角が洗面所兼浴室と洗濯室に別れて使用されていた。その家の中央の中廊下の両脇の室は各二室續きで、各十二畳

室位に別れていて直ぐ、右手前の室がサト女の室であり、その隣室は R. H. パウルス氏の室に當てられていた。そのサト女の室には、畳敷になってい [42] て、西洋箆箆や洋式茶棚や長大鉢その他の調度品が配備されていて、東向の壁脇には、明治天皇の御肖像の掛軸が飾られていたのは特に印象的であつた。その隣室のパウルス氏の室には、寝台、ソファー、鏡付洋箆箆、椅子等が整備されていた。その全氏の室の中廊下を隔った向側の室は、応接室兼家人の休憩室や娯楽室に利用され、黒塗の中型ピアノやバンジョーがその横の壁側に吊下げられていた。その室の中央の壁に設けられたストーフの上方の台には、小型模型ながら精巧に製作された自転車が、他の二・三の置物と共に中央に配置されていたのも著者には印象の種であつた。又その隣室は、パウルス氏等の書齋室に使用され、マホガニー材の四角な鋼棚製の廻転式本箱と丸テーブルや、二・三の安楽椅子が配置され、南側の壁の前に、大型立体鏡付化粧台があつて、その前の二・三段の棚には珍しい洋酒類や飲料品が、正面の鏡付棚に整然と配備されていて、目も輝しいばかり [43] りであつた。ことの序に、サト女の室の因縁話を述べて置く。それは、著者に取り、今尚思い出深い、懐しい室であつたからである。著者（正夫）が、小学初年の頃、トヨ女の町の両親宅から、或日、全女の親友の家を訪問した時のことであつた。予てから、その親友はサト女と著者を初対面させねば、義理が済まぬと考へられていたのであろう。突然その日に限って、著者に、「珍しい人の家へ連れて行くから、来なさい」と何気なく伴はれて行った先が、このサト女の室であつた。二人はパウルス商会の正門に入り、石畳の中庭を数間行った時、この商会主の R. H. パウルス氏と多分米国領事らしい、品位のある白髭を生した紳士とが、丁度二階に上る階段の戸を開けて外出され様として出て来られた時、バツタリ兩人と出会せたと云ふのも奇しき因縁であつたのである。その時の著者は、このパウルス氏が如何なる人物であつたか未知の人であるだけ、理解出来なかつたのは当然 [44] であつた。従つて、この豪荘な商会が、著者のためには実家であると云ふことすら、トヨ女からも全女の両親、知己すら、著者に対して一言も洩れ聞かされたことがなかつたからである。だから、著者を伴っていた人（米人、ジョンソン氏）から始めて、祖父のパウルス氏であると聞かれて、

著者は夢見る様な面体（オモザシ）で、祖父の顔を見ている中、この長身の白髪の上品な面長に、顎髯を生した、特長のある廣やかな額いの下に柔和な下り目の老紳士を思はず、血が呼ぶのか、懐しい思いで、胸が一杯になった。その時、著者を伴はれた人が、二言三言その老紳士に何か話された時、突然その老紳士が、著者の散切頭を手で撫でられた儘、著者等二人が二階の階段に足を踏み入れまでその手を放されず、著者の顔をジット優しい笑みを湛へ見詰められていた。その中、全氏のズボンから大型の一円銀貨二枚、著者の手に握らされた時、著者は未だ、その時代に二円と云ふ金子を小使に誰れからも貰ったことがなかったので、物珍しい、[45]でも嬉しい気持がしてならなかったので、思はず、「サンキュウ」と英語でお礼して言葉を交すと、パウルス氏も嬉しかったと見えて思はず、「ハ・・・」と愉快相に笑いを残され、やっとパウルス氏は同伴者（当時白髪の米国領事）を促され二人は外出されたのであった。それから、著者等二人は、真鍮板を嵌め込んである手摺の上の手觸りを愛撫しながら、著者は一步一步上って行くのであった。そして、階段には足觸りの良い高価な絨毯を上の方まで、帯なりに敷詰めてあるのを物珍らしく感じながら、「この立派なホテルの様な家が、自分の真実の祖父と父の住家であったのか。」と未だ、半信半疑な思いを巡らしながら、二人ともやっと階段を上り詰めると、直ぐ、家の中央の中廊下に出て、前記の通りのサト女の室の入口に著者は伴はれたのであった。著者は直ぐ、その入口の室の角の隅に、台の上に相当大まかな純鈴製の椰子の木の脇に鹿の立姿の置物が、銀色に輝いているのが目の留った。著者を同伴した人は戸を「ノック」せずとも、サト女[46]と親しいと見えて、無造作に開けられたので、著者は直ぐ、物珍らしく室内を窺ひ見ると、室の畳敷の中央に見知らぬ五十近い初老のデブプリ肥られた血色の良い顔に金額眼鏡を掛けられた婦人が、静かに少し俯向きかげんにして着物を縫っておられたところであった。著者の同伴者が、直ぐに著者を指して、全老女に、「おトヨさんの子の正夫さんです。」と全女に告げられると、入口の方に振向き、直ぐ、それとなく感付かれたと見えて、著者の顔を凝視されたかと思ふ間もなく、突然弾機仕掛けの様に立ち上られたかと思ふ隙もない位の速さで近寄られ、著者を室の中央に連れて行かれるや否や、

その老婦人は自分の膝の上に感慨無量の思いを込められ、しっかりと抱かれ、嬉し泣きに泣かれ、全女の涙が止めどなく、著者の首筋に落ちかかるのを感じずのみであった。やっとの事で、全女の膝から下された著者に対して、「私がお前のほんとうのお婆さんよ。」と嬉し泣きの声で云はれ、「随分前[47]からお前をこの家に引取る様に、お前のお母さんに何かと掛け合ってたが、お前のお母さんは承知しなかったのよ。」と著者に云ひ聞かされるよりも、トヨ女とこの老婦人なるサト女との間の著者の身の上のことで、中傷を他人から受け、一時は誤解された二人は、感情的衝突をして、悲しい別れを餘儀なくさせられた過去の口惜しい思いを込められた愚痴の述懐で、でもあったであろう。そのことについてはトヨ女が予て、舅パウルス氏の信任厚く、何事にも良く相談されるので、予てから陰でトヨ女を妬み、嫉み、全女をどうかしてこのパウルス商会からと全商会主夫妻の信用を失はせようと計りおるものがあつたのである。そして、トヨ女を全商会から放逐し、あはよくば、何の血縁もない者が、自身の子供をパウルス氏夫妻の関心を買ひ、その上全商会の財産までも別け與へて貰い度い、卑劣極まる野望を抱く者があつたことは事実で、著者にもトヨ女がそのことについて涙ながら[48]に著者の了解を求める様なまなざしをして、懇に話して聞せて貰ったので、如何にその頃のトヨ女の忍従が苦痛で、残念に思はれたが、著者も心から同情をしたものであつた。その原因を一口に言へば、こうである。「トヨ女の此度の子供は、子息の実の子ではない。」と誠しやかにパウルス氏夫妻や子息に忠言がましく、根も葉もないことを中傷し、トヨ女を妬み、全商会から排斥しようとした劣等漢が、全商会関係者の中に存在していた結果に依るものであつた。それ以来、サト女とトヨ女の仲が、日に増し斑が出来て、氣拙い思ひをしなければならなくなったことを早くも察しられたトヨ女が、「何かお氣に召さぬことでもありましたら、御遠慮なく私におっしゃって下さいませ。」と優しい語氣にも、勝気で、水臭いことの嫌いなトヨ女が、再三サト女に尋ね、願はれたのであつたが、事の重大で、サト女の信用にも関ることであつたので、全女は躊躇しながらも答へぬ訳にはゆかなくなって、やっとなら[49]の思いで、右の次第をトヨ女に応答されたのであつた。その時、トヨ女はサト女に、直にその中傷者を尋ねられ、

聞き終ると早々にしてその中傷者の夫妻を訪問、公明盛大なトヨ女の詰問詰責に両夫妻は敵し兼ね、遂に我子の可愛さから、トヨ女を陥れんとしたことを自白させられたのであった。（茲にその中傷者の経歴と姓名を述べる訳にゆかないことをお断りしなければならないことは、未だその縁族が存在しているからである）。併、斯様な事だけは公表することが出来ると云ふのは、その主人夫妻も著者が小学半頃に急死し、その子息も亦、少年の頃病弱な体であったので、その両親に前後して早世した云ふのも、何かの因縁深い絆があったのではなからうか。トヨ女は、こうした雰気の儘、日常の生活様式に迫れながら過される中、遂にトヨ女の最も信頼する舅のパウルス氏に別家し、正夫を無事出産させたいことをトヨ女が全氏に相談されたのであった。全氏はトヨ女と別[50]居生活を一応拒まれたが、トヨ女の決心を見て取られ、遂に許可され、トヨ女は正夫を体内に宿した儘、全市の今町の中央の高台の場所に転居されたのであった。トヨ女が、独立的に転居されてからも、R. H. パウルス氏だけは陰になり、日向になって食糧品その他の生活必需品を、自ら馬車を利用して持参し、慰められて帰宅される日が多かった。トヨ女は、正夫が八月中旬に生れると間もなく、全女は正式に全商会の家庭から離婚される一方には、トヨ女の両親の杉本家からも亦、その戸籍面からも独立した別家の手続を取られ、正夫のために改めて保護者になり、正夫を戸主として愈、全女は藝能、諸式の教養を資本として生活戦線に飛躍される様になったのであった。尤も、正夫は全女の両親宅に養育される様依頼され、その養育費や生活費の補助費その他は、何かと上海から仕送りされる様になった事は、後に述べることにする。誠に世の中のことは、「好事魔多し」と昔の人は何かと経験上良く云ったものである。

[51] 扱て、トヨ女がパウルス家から離れられてから、全女が独立生活をする様に決心された後で、全商会のサト女やその子息が、自分等の思慮の浅薄であったことを反省し、後悔され、全然中傷であったことを理解された時には、トヨ女は既に長崎港から上海行の神戸丸の船客となって居られたのであった。トヨ女は予めから神戸丸の船長、機関長や事務長と、それに或る機関士とも別懇の間柄であった関係上、全女が全船の船客となつてからは、何かとトヨ女のために便誼を與へられていた。そし

て、トヨ女は、自分が上海へ行く事も極秘裡に事を運ばれ、若しパウルス家から自分を連れ戻すために追手を差し向ける様なことが、万一あった場合を考慮に入れ、船長以下重立った人々に、全女が、この船に乗船していないことにして貰ふ様に依頼されたのであった。トヨ女の意地は、決心がつくと斯様な時にも働き通される性格の持主であった。トヨ女の予想通り、パウルス家から全女を全船に探[52]しに来られた時は、全船から体よく、その追手は追返されたのであった。斯様な訳で、パウルス家の人々は涙を吞んで、諺にも、「後の後悔先に立たず」仕舞に終られたのであった。斯様な運命の基にあった正夫は、華やかな生存はしなかったが、トヨ女の意地と実力と、そして全全の献身的な大愛の下に、トヨ女の両親も正夫も平穩無事な生活を送ることが出来、特に正夫は、全女の両親から無限の愛育の基に、虫氣もつかず、すくすくと育って行ったのであった。そして、云ふまでもなく、此の時から正夫は、杉本家を名乗らなければならない運命に支配され、矛盾した生存を過さなければならなかったのであった。扱て、話は元に戻り、愈、R. H. パウルス商会にトヨ女が縁附れていた当時の全商会の運営組織と、トヨ女がそれに附随して、如何に生活し、活躍されたかと云ふ全貌が、これから述べ様とすることに依つて明にされ、了解される事と思ふ。そこで、全商会々員として活躍されていた主なる[53]諸氏とその他の運営状態を列記すると、左の通りになる。

外国人関係では、

- 一、R. H. パウルス氏（Rodney Huntington Powers）（米国人、取締役）
- 一、J. R. パウルス氏（子息にして秘書）
- 一、ドル氏（露国人、警察関係事務）
- 一、ピーター氏（英国人、書記）
- 一、J. クデア氏（佛国人、会計）
- 一、E. W. H. スミス氏（米国人、書記）
- 一、フランク氏（米国人、艦船へ注文係兼外国人暴動捕縛係）
- 一、J. スコン氏（米国人、書記、元海軍将校）

日本人関係では、

- 一、高島氏（書記長）
- 一、中島氏（書記）
- 一、飯田氏（書記）

- 一、武ノ内氏（外国艦船その他の集金係）
- 一、吉村氏（書記）（現活水短大に事務係として全氏の娘で老女の吉村ハルエ女今尚健在）五二．三．七記）

その他

- 一、女中数名
- 一、別當 一名 [54]
- 一、舩係船頭 数名
- 一、小蒸氣船 一艘（乗務員、船長、外数名）
- 一、蓄類屠殺係 数名（内少年一名）
- 一、四輪馬車 一台
- 一、メリケン馬 二匹
- 一、仔馬 一匹
- 一、人力車 一台

大体以上の陣容の基に、欧米その他の海外物資を輸入し、一手販賣として鋭意営業を勵まれていた。

右の内、蓄類の牛豚羊や山羊等は艦船積込需要に間に合はぬ場合は、直接屠殺係で、全商会内に此れ等蓄類を長崎浦上方面から運び入れ、屠殺して需要を満していた。それは県下からこれ等の蓄類の屠殺し整備された着荷を待っていたのでは、その需要を完全に補ふことが出来ないで、少しでも早く準備する必要から、全商会にその屠殺係を置くことになったのであった。そして、これ等蓄類を次から次と料理し、準備して置かなければ間に合は [55] ないほど、その頃の長崎港は艦船の出入が頻繁を極めていたのであった。又此れ等蓄類の皮剥の迅速なことは、瞬間に料理され、牛や豚の皮は無償で、屠殺者に與へられていて、羊や山羊の皮のみは屠殺者にその皮を鞣めさせた上、トヨ女やその他の家族の利用に供されていたものであった。次に、安政年間中に R. H. パウルス氏が長崎に到来されて以来、欧米、浦汐、上海、香港や南洋方面から直輸入されていた主要なる商品を紹介すると、

- 一、石油（その頃は未だ、内外には電氣事業が発達していないので、主に石油を使用し、特に長崎大浦居留地の門燈、家庭等の配油）。
- 一、船具、獸皮類
- 一、白砂糖、角砂糖、罐詰類、化粧品、キャンディー類、棒砂糖（ルシア産で、主に浦汐からの輸入品で、直径四・五吋、長さ一米餘の丸形にして、菓子製造用

又は細く碎き接客用としても亦、使用される。）

[56]

- 一、外国製煙草、珈琲原料、紅茶、ソース、トマトケチャップ、ラムジユスソース、オランダみつば、食塩、サラ子用リーム状ソース、洋酒類等。
- 一、自転車。
- 一、その他、全商会の別館で、長崎大浦二十二番館内に、蒸氣式パン製造所を設け、艦船や一般人の需要に応じ、パン類を製造されていた。

明治二十年前後頃初めてパウルス商会の注文で、欧米から自転車数台を長崎へ直輸入され、世の話題になった、面白い、寧ろ、滑稽極まる、驚異の目で、大歓迎されたこの自転車で、トヨ女夫妻外一人と九州一円を旅行されたことを話して置く。

この当時、始めて自転車がパウルス商会で直輸入したことは、未だ「長崎昔語」にも判然と記録されていない。と云ふのは、人々の夫々の生活環境や、その当時の状勢をはっきり見極め見聞した者が、時代の変遷につれ、世人の目から薄らぎ、又その真相を知る者が、身近に住居していなかった結果にも依るであろう。[57] 何事を残すにも、只又聞きだけでは、その真相が蓋けるもので、真実性を表すことは不可能なことである。そらに良い環境に恵れた者には、優越的に楽に苦勞せず、して真相を明にする徳があり、金銭づくでは到底得ることの出来ない尊いものがあるのである。その自転車着荷と全時に、全市南山手のグラバー氏からと、全大浦海岸通り七番館のホームリンガー商会主の F. リンガー氏から、その自転車を一台宛の譲渡の依頼があったので、R. H. パウルス商会主は両氏に予て、別懇の間柄であったので、心良く別け與えらえたのであった。それ以来、間もなく、長崎大浦居留地間は固より、地方にも全商会から宣伝、販賣され、流行を見る様になったのである。そんな訳で、全商会から始めて輸入された自転車で、会主 R. H. パウルス氏の依頼で、トヨ女夫妻の J. R. パウルス氏に九州一円の宣伝旅行することになり、同伴者として、全市小曾根町二十二番館の長崎製粉株式会社の管理者で [58] ある G. H. アカマン氏と共に旅行の途に長崎から出発されたのであった。その当時のことで、未だ、歩道や車道が改良されていない非文明的な時代なので、自転車で旅行するのは困難で、途中の山道を通行する時は、

難行に難行を続け、ほんの申訳な名ばかりの小路を通行する時もあり、又、断崖絶壁の脇路を通らねばならない時には、目も眩むほどの思いで通らなければならなかった。でも、その反面、四方の山々の絶景に心打たれて、思はず皆は歓声をあげたり、疲労も忘れた様に氣も壮快になることもあった。三人はこうして、次の村から村へと野を越へ、山を越えている中疲労を覚えると、一時休憩し、携帯食糧や飲料水に舌鼓を打ち、又ある時は人里離れた山又山に差掛る時、山賊でも出没する様な雰囲気には捕はれたり、又或時は樹木鬱蒼たる森林の辺の神秘的な水面を漂はせている湖畔に合せる時は、人は皆、身辺が引締る様な思いがして、何んとなか自から強いて、大膽な態度を取って [59] 見度い氣がするものである。そこで、トヨ女の夫妻は、表面的には性質は温和の方であったが、内面的には至って豪快な性格であったので、予て護身用の六連発のピストルを取り出し、思はず、その湖中に乱射されたので、辺りの静寂の空気を破って銃声が木霊し、驚いた山鳥等飛出す騒ぎを演じ、そうした旅愁を慰めつつ旅行を続けられるのであった。途中農家の中から農夫の家族等が飛び出し来って、奇異な目で迎へる中を快走し、やっと佐賀県唐津市に辿り着かれたのであった。この自転車は普通の車ではなく、一時間に何哩も走ったかを記録するメーター付のもので、車輪が一時半餘大きいものであったので、快走力も能率的であって、寧ろ現時の自転車よりも優秀で、乗り心地の良いものであった。丁度三人が唐津市に入ると同時に、映画モドキに、この珍しい大型自転車を群集が取巻き、それ以上進行することが出来ず、困難に陥り、いくら制してもワイワイ騒ぐばかりで [60] 聞き入れず、立ち去ることはおろか、その自転車を手で撫で廻す始末であった。やっと、この騒動を聞き、駈付けて来た巡査に助けられながら、ほっとして、全市の某料亭に到着し、全市の名物の串刺鯛を焼かせて舌鼓を打ちながら、途中の疲労を回復し、その日は全市に一泊されたのであった。そこで、その翌日は、熊本市に向け出発し、途中例の如く難行を続けながら、無事に全市内にある、予てパウルス商会の定旅とされていた、栄徳旅館に宿泊することが出来た。三人はそこで、暫時休憩の後、中善寺湖畔、本明寺や水善寺等の名所を探訪して興を添へ、又大分県では別府市や、宮崎県宮崎市やその附近等の名所旧跡等を探り、巡

歴し続けられたのであった。併し、三人の目標である巡遊よりも、途中この乗車された自転車を見んものと人々が、その周囲に群り集って来て、その進行を妨げられるには難有迷惑で、困難を極めたと後の語草になったのであった。それ程、その時代の未だ文化の進まない物珍らし [61] い世であったのであろう。扱て、人にはその人の性格や性質が、各々違っている者が多いので、食物の好き嫌いもあるものである。併し十人が十人で重宝がり、現代文明の世の中で、万人向の食物を嫌いで、終世まで食さないで終ったと云ふのも、一寸珍しい話してである。それは、トヨ女が一人であって、人一倍女性ながらも優先的に新しい、進歩的な周囲の環境に恵まれながら、只一つその万人向の食物の嫌いであったと云ふことは、如何にも不思議なことと云はなければならぬ。それに拘らず、トヨ女は和洋食の料理方も一通り見聞し、研究され、試食されていたのであったが、或る時、偶然な機会にショックを受けてから、如何してもその食物を食する氣になれなかったのであった。それは、トヨ女が、或日パウルス商会の二階で、女中達を勵ましながら家事の雑務に追はれていた時であった。全商会に勤めている茶目氣の多い船頭が、止せば良いのに、トヨ女が、 [62] 如何に感受するか試めすために、悪戯氣を起し、突然階下から、「若奥様（トヨ女）！一寸、二階の窓から下を御覧なさい。」と呼びかけたので、トヨ女は用事の手を止め、何んとなか窓脇に来て、何事だろうと階下を見下した時、丁度その時が、牛の屠殺が始まり、屠殺者の手に依って牛の首が切断され、その首のない胴体の首の附根から血が滴り落ち、その附根の肉が痙攣を起している最中であつた。こんな場面は、特殊な人は見て経験済であつたろうが、トヨ女は始めてであり、予て食物でも濃厚なものは餘り食べないので、却って斯様な牛の屠殺の惨状を見せつけられたので、如何な剛毅な氣性のトヨ女でも、胸がむかつき、全身が一時に自身まで痙攣を起す様な錯覚に陥るのをやっと堪え忍び、氣を鎮めることが出来たのであった。此の事あつて以来、牛肉は固より、豚肉、その他の肉類も鶏肉や馬肉以上には絶対に食されなかったのであった。こうした事があつてから、家族 [63] 一日食事をする度に、トヨ女が肉類や牛乳までも食さなくなっているのを不思議に思はれた舅パウルス氏が、或日、「トヨは如何して、肉類も牛乳も急に食べな

くなったの。」と全氏が心配して尋ねられてやっと、右の次第を笑ひながら、何のこだわりなくトヨ女が話されたのであったが、常に寛大なパウルス氏も、此の時ばかりは非常に立腹され、後で、船頭は大変その不心得を論されたのであった。併し、何か感ずることがあつてか、それ以来トヨ女は、昭和三十年八月四日夜、八十三才で永眠されるまで、人々に饗応されることがあつても、魚類の外は、肉類は鯨肉でも一切食断ちされていたのであった。明治維新前後までは石油が普及されていなかったもので、特別の部署や特殊な家庭以外は、主に燈火用としては種油や豆油等を一般に使用されていた。そこで、パウルス商会では、これ等燈火の完度を高め、少くとも大浦居留地なりとも明るくするために、R. H. パウルス氏は率先して、海外から石油を輸入し、直に大浦居留地域の内外人を督勵されて住宅や商会営業者の門〔64〕燈や外燈を施設し、石油使用を奨励され、その門燈や外燈の配油代として、月々一戸毎に金貳円也をパウルス商会から徴収されていた。長崎でもその頃は、一般家庭は石油を自宅で使用していた家は稀であったので、優先的に石油を使用した大浦居留地域は、大浦海岸に連立した色取々の各国領事館や商会を始め、大浦下り松海岸通りから、その上方の高台の南山手は固より、東山手一帯の全居留地区域から、光り輝く石油ランプの燈火が、長崎港の海面に反射し、山手辺の樹木の影から点々と洩れる燈火の光のために、長崎大浦全域の夜景を、丁度油絵を見る様に浮出させ、壯観を呈していた。

茲に、パウルス商会に永らく下僕として雇はれていた、親戚知己もない、誰れを頼りにする者もない、哀れな卯三郎と云ふ初老の者があつた。そこで、彼の境遇に同情され、R. H. パウルス氏もトヨ女も、何くれとなく面倒を見ていられた。この卯三郎は、何処と云つて取柄のない彼ではあつたが、性質は至って正直者〔65〕で、物事を飾らない素直な性格の持主であつた。だから、人々からいつも馬鹿の様に揶揄され、こき使はれても、不平不満を抱くでもなく、反抗するでもなく、何時もニコニコとしている様な、奇人変人肌の性格者でもあつた。トヨ女は、こう云つた卯三郎を一層哀れんで、周囲の華な雰囲気にならぬ風采の揚らない彼に、不用の衣類、その他や、偶には小使銭を別に恵まれていたのであつた。彼卯三郎は、暇さえあれば全商会の二階のベランダの上

から、道行く人々や、長崎港内外の艦船の碇泊している情景や、四方の風景を何時もニコニコとしながら眺めるのが、彼の一種の趣味であるかの様に思はれる彼ではあつた。そう云つた彼が、或日、例のベランダの手摺に身を寄せて、頻りに、その日は青空だけを一心に見詰めている姿を、丁度室から何気なく窓外を見渡されていたR. H. パウルス氏が卯三郎を発見され、一寸不審に思はれた全氏は、つかつかと室から卯三郎の脇に歩み寄られ、「卯三郎は空ば〔66〕かり眺めているが、何か空に珍らしいことでもあります。」と揶揄半分に突然尋ねられたのであつたが、彼は別に慌てる風もなく、平然として、例のニコニコ顔で、「大旦那様！（パウルス氏）私は何時も思ふのですが、若しあの空が、土地に落ちて来る様な事がありましたら、人間はどうなりますでせうか。」と相変らずお人良の相を表し、でも真面目くさって半信半疑な目をして、パウルス氏に尋ねられたので、全氏は腹が振れる思いをやつと堪えて、「それは空が、地に落ちて来たら、真先に卯三郎の頭の上に落ちて来て、死んだらどうするか。」と全氏が真面目な様子で云はれたので、さすがの卯三郎も目を白黒させ、寧ろ彼の滑稽なほどに見ゆる顔を眺められていたが、丁度その時、トヨ女も側に来合せていられたので、始めて二人は笑を爆発させられ、廻りは只笑い一色に塗りつぶされたのであつた。R. H. パウルス氏は、この時代の長崎繁栄の頃から、長崎米国領事館を通じて、大浦外国〔67〕人居留地の取締役を兼ねられ、全商会員のドル氏とフランク氏に委嘱されて、不法、不良外人や、艦船乗組員の暴挙を取締らせ、全領事館整備係員と共に連絡し合い、相当の功績を残されたのであつた。偶々R. H. パウルス氏の就寝中のことであつたが、予て捕縛の憂き目にあつた乗組員同僚の復讐を思い立ち、大浦海岸から上陸した二人の艦船乗組員が、全商会の階段をこっそり上り、二階のパウルス氏の寝室の戸の前へ忍び寄り、全氏の室の戸をノックして、「急に艦船の食糧その他の用件で来た者で、夜分失礼ですが、御面会を願います。」と猫撫声でこっそり呼び掛ける者のあることを、パウルス氏が目敏く聞きかれ、夜分のことでもあり用心して直に支度をして戸を静かに戸に沿って聞かれると、少し酒氣のある態度をした二人の乗組員が、目を据へて入口に立塞がっていた。パウルス氏は、予て斯様な種類の輩に対しては、元海軍

将校であった全氏としては、別にさして驚きもされず、二人 [68] の乗組員を心良く室内に招き入れられ、静かに声を閉じ、鍵まで再び掛けられ、沈着な物慣れた態度で応待されたのであった。併、彼乗組員の二人の対談内容が出鱈目であることを早くも喝破されたパウルス氏は、身を用意しながら、終始ニコニコとして合槌を打れている中に、突然乗組員二人は同時にパウルス氏に襲い掛かったが、パウルス氏の比ではなく、難なく二人共ノックアウトされ、直に捕縛され、船頭を起され、米国領事館に引渡されたのであった。パウルス氏は、予ての修養にも依るのであろうが、至って思慮分別のある人で、決して物事に動じない、沈着にして勇猛心に富んだ人柄であったので、こうした暴漢に襲れても、臨機応変の処置を取ることが出来たのであろう。又その反面、非常に温和な、同情心も深く、人に迷惑を掛けない様に常に注意されていたので、こんな騒ぎの中にも、家族に危害があつてはならないことを考慮され、ドアに自から事前に鍵を掛 [69] けられ、思ふぞんぶんに二人の暴漢に怯むことなく、瞬時にして事を解決されたのであった。その二人の暴漢の取調べに当たった領事館の係員の言に依れば、パウルス氏を目当に乱入したのではなく、予て、外人暴動者の捕縛業務に当たっているドル氏かフランク氏を遺恨に思い、襲撃の拳に出たことが、後で解り、パウルス氏としては災難な出来事であったのである。それ等の不良外人の捕縛料として、米国領事館から一人宛五弗の奨励金が懸けられていたので、ドル氏やフランク氏の収入は、パウルス商会から支拂はれる月給と合算すると、相当な巨額に上ったほど、その当時の艦船乗組員中には酒癖の悪い者や、性格異状者が多つたと同時に、長崎港に入港する各国艦船の頻繁に出入していたかが、窺ひ知ることが出来るのである。このフランク氏とパウルス氏の子息 J. R. パウルス氏と共に撮影された寫眞が、その頃の思い出になる寫眞と共にトヨ女の家にもあつたが、その頃の全氏は漫画に良く見受けられる様 [70] な大きい腹をした肥満型で、趣味としては、酒類とヴァイオリンが巧であった。そこで、著者が生れる以前に、著者のためには兄に当る、その頃二三才位の熊定を非常に可愛がり、暇さえあれば、良くヴァイオリンを弾き聞かせ、熊定も亦賢い子であったので、物覚えが良く、知らず知らずの中にそのヴァイオリンの調子に合せ、調子良くゼスチュ

アたっぷりに踊りまくり、その可愛らしい踊り振りに全員が拍手喝采を送り、鳴りも止まな（ここから第 2 巻）いなごやかな雰囲気にも包まれていた、その頃の平和な愛すべき時代でもあつた。又パウルス商会では、米国領事館の事務取扱の資格で、在長崎外人間の他人の移住や、長崎へ転任する者のある時は必ず、全商会へ連絡しなければならない規則になっていた。或時は、パウルス商会から外国艦船へ食糧品等を臨時に雇い入れた渡舟に積み込み、フランク氏が逮捕した二三人の乗組員を全舟と共に運送の途中の海上で、その三人が暴れ出し、[71] 舟諸共に履へさせ、泳いで逃れ去らんとしたこともあつたが、直に応援を述べ、三人は難なく捕縛され、艦船に直接連行され、引渡されたが、全商会から積み込んだ食糧その他の代価は、当然艦船から夫々全商会に相当の辨償金が支拂れたのは勿論であつた。これ等の乗組員暴徒は、後で、相当の重刑に処せられたことは言ふまでもないことであつた。これ等の暴挙者の取締役を委ねられたパウルス商会の家族の身辺にも、日本警察署の好意で、常に憲官を交代で出張させられていた。トヨ女は、夜間にパウルス商会の正門の前に来て警備される憲官の労苦を労つては、パウルス氏父子の食事の餘分の色々の珍らしい料理の一部を大皿に盛って来て、「失礼ですが、よろしかったらお食べ下さい。」と云って、別け與へられていた。その頃は洋食は特に珍らしく、普通の者は口にすることすら出来ない時代であつたので、それ等憲官が、冬の寒空に立たされている時には、一層身が、寒氣を覚ゆ [72] るものであるから、その時節には特に感激して、遠慮なく押し戴いて、「この様な立派な料理頂戴して恐縮です。」と云って、「お宅当りの生活を見ると、お世辞なし、羨しい限りです。」と感慨深氣に云ひ、「でも、多勢の人を使つていなさるので、大変な費用が掛りますのでせうね。」と感謝の言葉をトヨ女に交して、一層忠実に警備に當つて貰っていた時代であつた。こうした美挙でも、トヨ女は決して驕慢な氣持や、見栄的な態度を表すことなく、常に持前の素直な氣持を失ふことがなかつた。只、トヨ女としては、何時でも真面目に働く心労の人々を見るにつけ、慰め勵まさねば、氣が済まない性質でもあつた。眞実、憲官の見た目にも、その頃のパウルス商会の繁栄振りと共に、生活様式も他に比し上層していたことは間違いない事実であつて、パウルス氏父子

の食事代だけでも、その頃の金子で、三万五十円也にも上っていたと云はれていた。そして、子息 J. R. パウルス氏の米国人として [73] の入籍の費用も、月毎に多額な金子が支拂はれていた。全氏は父君 R. H. パウルス氏の一人息と生れ、全商会の全盛期にあつて、彼子息の生涯は短つたが、幸運児であり、自由な天地の下で養育され教育された、我儘者に似合はず、性質は至って善良で、然も物事に器用な質でもあつた。そして、商法にも優れていて、父君パウルス氏の社会的地位と華かな環境に恵まれ、何一つ不自由のない子息は、周囲の環境上からでもあつたであろうが、酒が何よりも好物であつたが、後で、この酒のために生命を蝕まれる結果となつたのであつた。併、父君パウルス氏は、子息の酒好きなのは百も承知で、只子息の賢い、器用さを一層生かしてやり度い心から、全商会や長崎にあつては我儘勝ちになり、物事をルーズになる様なことがあつてはならぬと思はれ、それには廣く欧米文化の理念を植付けさせる目的で、米国の某ハイスクールから大学へ入学させられることになつたのであつた。父君パウルス氏は、商売柄に似はず、甘黨の方であるに [74] 比し、子息は心から辛黨の方であつたので、米国で在学中にも、月に日本酒一升樽を全地に送られると云ふ、理解ある、何かにつき行届かれた好々爺であつた。幸い子息の学校附近に、長崎人で好く子息を知っていた日本人が、日本クリーニング店を開業していたので、そこにその一升樽を送り、依頼され、子息の飲酒好きに提供されていた。従つて、良くその店主も子息の食事の好物の世話やら、身廻りのことも、何くれとなく親切に心配していて呉れるので、子息も良くそこへ遊びに行つていた。子息は、内地の長崎で生れ、長崎で育つたので、少年頃の見たり聞いたりしたことは、何でも覚てる賢い質の人で、全商会に出入の職人の使用する合言葉まで記憶していて、例へば、「桁が間違っている。」と云ふ言葉の中に、その桁の意味も直ぐ覚えると云ふ位に、頭脳の優れた人であつたので、何によらず、此れ亦、人に負け度くない性格の持主でもあつた。子息は特に味噌汁、魚の刺身類や寿司等が大好物で [75] あつたので、前記のクリーニング店主に依頼され、良く自身の好きな食物の料理を作って貰つて、皆にも饗応されて、食事を共にして、楽しみとされていたので、米国にあつても淋しい思いをすることがなかつた。子息が卒業

し長崎へ帰郷されて間もなく、トヨ女と結婚されて生活されていた時も、子息は父君パウルス氏と共にしなければならぬ洋食には厭き厭きしている子息は、町のトヨ女の両親宅の二階に寝泊りする時には、自身の好きな日本食をその両親に注文され、食されることを楽しみとされていた。子息はあのむごい「長崎のカラスミ」一箇位平気で食べて了はれるので、両親もその他のトヨ女の弟妹もびっくりして目を見張るばかりであつた。それで、暴飲暴食の結果、三十七才の若さで早世されたのも、それが為であつたが、後に医師の診断された結果に依ると、他の普通の家庭の人々なら、未だ早く死亡されたのであるが、何分贅沢に育つていられたので、身体の滋養が豊 [76] かであつたので、三十七才までも生き延びることが出来たと云ふことであつた。子息こそ才能もあり、何不自由のない家庭に育たれながら、早世されたと云ふことも、酒のためであつたかを思ふ時、「口は禍の基。」と云はれているのも、只憎まれ口を叩くばかりでなく、飲食にも注意する様に訓されているものであろう。人々の欲望は限りがないと云はれ、亦それに共鳴する者の多くある人の世ではあるが、何事も度を過すと遂に脱線の憂めを見、身を亡す基となることは、歴史が証明しているので、お互に注意して過すことが肝要事であらう。子息 J. R. パウルス氏は、父君 R. H. パウルス氏と船木サト女の仲に生れた時、父君パウルス氏の一番心痛されたことは、米国人としての子息の入籍手續のことであつた。米国人として全国に籍を置く時は、必ず、全国人の家族の者の女性の子とするか、又は、その寡婦の子として入籍を依頼し、許可を得て入籍の手續を取らなければ、全国政府の許 [77] 可が下りないのであつた。そこで、父君は或知己の照会で、或寡婦の子として子息を入籍させて貰つて、その礼金として毎月金三百円也をその寡婦に送金されたのであつた。又父君パウルス氏はパウルス商会の利益ばかりではなく、大浦居留地内の各国人間の福利増進をも計られ、始めて長崎でオクシヨン（競売）の運営を計画され、白と黒色からなる元禄模様のある万国共通の大旗を使用する許可を、米国領事館に申請され、開催されることになつたのであつた。このオクシヨンは云ふまでもなく、これは各人持寄で、各種各様の不用品から、大にしては老朽の艦船等の競売も依頼を受ければ、引受けられ、大いにオクシヨン景氣を奨励され

たので、一般に歓迎され、盛大に開催の運営となったのであった。会場はパウルス商会内に施設されていたが、一例を挙げると、浦汐更紗が、小切ながら一束で、金式円也の安値で落ちたこともあった。競売は色取々の珍しい品物が集るの [78] で、トヨ女は祖父パウルス氏の最後のハンマーの断定の音を聞く寸前に、全女の好きな品物があれば、パウルス氏に手と目で合図を送り、落札して貰っていた。これ等各国人家庭からの持寄品中の古着類は特に、衛生的概念の基に、一応クリーニングして出品されていたことは、文明人としての常習であり、怠慢な人々は学ぶべき要素であると思う。こうした長崎の繁栄期時代には、人々は一つの慰安を求めるために、毎年炎暑の季節になると、長崎大浦居留地区の各国領事館員や、商館員や会社、銀行員が集りレクリエーションの爲め、夏季水泳競技大会が、長崎港外で盛大に開催されることになっていた。領事館では、長崎に於て領事館事務取扱国を除き、左の各国領事館側から全大会に列席していた。

- 一、支那領事館
- 一、佛蘭西領事館
- 一、独逸領事館
- 一、英国領事館 [79]
- 一、露西亜領事館
- 一、米領事館
- 商館、会社、銀行等
- 一、R. H. パウルス商会
- 一、ホームリンガー商会
- 一、グラバー商会
- 一、ブラウン商会
- 一、ボーデンハウス商会
- 一、アカマン製粉工場
- 一、レーク商会
- 一、イルマン英字新聞社
- 一、アーレン商会
- 一、バルメ船舶請負並に石炭商会
- 一、チャイナアンドジャパン貿易会社
- 一、クラークソン商会
- 一、カルノー商会
- 一、エバンス商会
- 一、フレイジグ商会

- 一、ジンスパーク商会
- 一、大北電信会社 [80]
- 一、香港上海銀行
- 一、ジャーディンマゾソン汽船会社
- 一、キスリン商会
- 一、カンストアルバース商会
- 一、ロイドレヂスター
- 一、メス商会
- 一、ピグナテール商会
- 一、露国義勇艦隊出張所
- 一、ルソチヤイニス銀行
- 一、スキバー商会
- 一、スタンダード石油会社
- 一、サフィア商会
- 一、テーラークーパー商会
- 一、ウルソー商会
- 一、ウォーカー商会
- 一、W・D・ウエントウオース商会
- 一、A・W・ウイルソン商会 等。

(附記 上記、会社、商会、銀行等の大部分は、R. H. パウルス商会所有の明治三十五年二月二十四日発行の長崎市下り松四十 [81] 七番長崎プレス社の“Nagasaki Directory 1902”の著作に依り記載したもの)

丁度明治二十年前後から夏季には、長崎港外鼠島、高鉾島やその附近の福田の松原、深堀、小瀬戸、神ノ島や伊王島の海辺沖で、右記載の各国商社の発案で、毎年夏季水泳競技大会やヨットレース等が、等級をつけて盛大に開催されたのであった。各商社では、優秀な水泳伎倆者やヨットの操縦技能者を選出して、その技を競ひ合ふ習慣となっていた。水泳競技としては、障害物競技もあって、団平船を幾隻も沖の方に一定の間隔を置いて繫留させ、その船腹を潜水し、力泳するのを各商社の社員、家族等の声援の下に競泳するのであって、その盛況振は海陸に木霊して、狂想曲を奏する様な雰囲気の中に行はれるのであった。個人競泳には賞品として等級に応じて授與され、一等には金時計と鎖等の豪華な賞品が渡され、団体競泳には銀カップが授與されるのであった。そして、夕影までにそれ等の競技が終ると、[82] 白砂青松を背景に各人各様の思い思いの形態をして記念撮影されるのであった。斯様な記念撮影された寫眞が、数多く著者の

少年時代まではトヨ女の町の両親宅に保存されていたが、その後如何になったか記憶にないが、将来の史料として、今尚惜しい気がしてならない。これ等の寫眞資料の中に、祖父R. H. パウルス氏が各国元首や高官から授與された貴重な寫眞があった中では、明治大帝、昭憲皇太仁、李鴻章、露国ニコラス皇太子や三菱の岩崎彌太郎氏の寫眞もあって、それに明治維新史に功績を残された西郷隆盛以下数多くの偉人の諸氏の寫眞も、良く著者は少年時代に日常見るのを楽しみにしていた。その他長崎市全景のものや、各国艦船の長崎入港の壯観な寫眞等もあったが、今は皆、著者の思ひ出としてのみ記憶しているに過ぎないものとはなったのである。只、著者が、此度の昭和二十年八月十五日の終戦以来、長崎県庁から全県立長崎図書館に全三十年十一月四日まで、奉職を命ぜられてい [83] た期間中に、著者が所持していた露国ニコラス皇太子が、明治二十四年四月二十四日朝、軍艦アゾヴァ号で長崎に入港され、有栖川宮威仁親王等の出迎を受けられ、全日午後二時長崎大波止に上陸されて後、人力車に乗車されていたお寫眞と、全皇太子の御召艦アゾヴァ号の長崎入港の記念寫眞だけは、県立長崎図書館に寄贈したのであった。尚亦、此れ等思い出の寫眞の中にも、特に印象づけられた物の中で、R. H. パウルス商会では、全商会の階上のベランダで、毎年七月四日に盛大に開催されていた米國独立記念祭に、トヨ女は勿論、家族やその他の来客と共に記念撮影された大型寫眞もあったが、それ等も著者が青年時代に東洋各都市を転々として、社会に活動していた時代であったので、その後、此れ亦、何処に散逸したやら、行方不明になって了った。扱て、長崎大浦外人居留地区の夏季慰安水泳競技大会には、外人居留民を代表してR. H. パウルス氏が、その競技の審番係として選 [84] 出されていられたが、こうした競技には必ずと云っても云ひ位に子息パウルス氏が優勝されるので、その度に父君のパウルス氏は、却ってその子息の優勝を餘り喜ばれず、微苦笑されていた。それは、丁度父君パウルス氏が、自身の子息を最眞目に見て勝を子息に譲らせる様に皆から思はれはしないかとの氣慮されるからであって、心から嬉しい顔はされなかったのであった。そこで、父君パウルス氏は子息J. R. パウルスも同伴のトヨ女も審番係場へ呼び寄せられ、訓す様に、「他の者にも思惑があるので、優勝は誰しも嬉

しいことではあるが、偶には手加減して、人に勝を譲るのも悪い氣持のものでもないから、勝せなさい。」と子息の面前で、懇々と父君パウルス氏は全氏の豪快な氣性を表はされ、諭されたのであった。それ程、父君パウルス氏は公德心に長けた小心者の真似の出来ない性格の人であった。その反対に、子息は前述の如く、物事に天性的に器用 [85] であり、勝氣であって、競争事に我武者羅なところがあつた。そして、何時、如何なる処で、何によらず、技術を磨くのか、家族の者は餘り知ることが出来なかつたので、時と場合咄然とさせられる様なこともあつた。舅R. H. パウルス氏の斯うした公德心に満たされた人柄の膝下にあるトヨ女は、一層徳義心と教養を身に着けることの出来る、幸運の年月を経て来られたので、後世その良き感化の表はれとして、美德を人々にも盡される様な結果になつたことは、その頁を読者が繰れるに従つて理解されることと信ずる。当時長崎では、馬の体育の奨励の目的から、盛んに競馬が開催されていた。パウルス商会には既に早くから、欧米産の發育の良い光沢ある黒と栗毛の体格の良い優秀な二匹の馬が、二頭馬車用として飼育されていた。その時代までは自家用として飼育している家庭はなく、只政府の要員の交通用として使用されていたに過ぎなかつた。R. H. パウルス氏も亦、欧米本国でも未だ、現代の様に [86] 交通機関が発達していなかつた時代で、只馬車だけが、交通の代用に使はれていたに過ぎなかつた。こうした習慣を植え付けられたパウルス氏は、必然的に長崎でも使用して見たい習性の基にパウルス氏は捕はれたのであろう。であるから、米國からわざわざ馬を輸入され、使用される筈がないのである。パウルス氏はこの馬車を操り、暇さえあれば、一人の時もあり、亦家族同伴の時もあり、主に自身で手綱を取られ、市内や郊外を良く散策されるのを何よりも楽しみとされていた。

固より、長崎大浦居留地区の外国商社でも自家用車を持っている処はないのであるから、長崎地方では珍らしいので、パウルス商会の馬車は直に長崎名物の一つになされたのであつた。現代でも著者が、長崎繁華街の或知人の老舗を訪れると、その主人が、「パウルスさんのあの馬車の颯爽とした風格とその馬の目の外側に取附られていた馬の黒色の目隠が、未だ忘れられず、印象的であつた。」と今だに懐旧談を持出す人すらある位い

である。そこで、長崎地方に競馬が開催されると、子息の J. R. パウルス氏は乗馬にも勿論上達されていたので、パウルス商会の持馬を出場させられていたが、その馬が出場する度に、一等を獲得していたのも、無理もない話で、廣汎な、大規模に、馬種の改良の点でも進歩的である欧米産に、到底その頃の内地産の馬では勝目がなかったのは、当然なことであった思はれる。だから、全商会の馬が出る度に、競馬関係者から苦情が出る仕末であったので、遂にパウルス氏も馬を出場させるのを断念されたのであった。丁度、馬の話の序に、全商会に他にも飼育されていた、白毛の仔馬の奇病の話が続けることにしよう。パウルス商会では、予て、子供や婦人用に別に一匹の白毛の愛らしい仔馬が飼はれていた。この馬は、全商会の建物が、長崎大浦海岸通りの南寄の、そして三角形の数百坪の土地の角に建てられていた関係上、港内に面しているので [88]、夕影近くになって港内の満潮時になると、海水の汐香が、微風に乗って来る頃、この可愛らしい仔馬の目の中から涙がポロポロと流れ出るのであった。トヨ女は毎日の様に家事の餘暇を利用して、なるべく使用人の手を煩はさない様に、自身でこの仔馬の食事を與へに行くのが習慣になっていた。或夕、何気なく、薄明のする馬小屋の中の仔馬の目を見てもなく見ると、その目から涙がポロポロと止めどなく流れ出ているので、トヨ女は奇妙な感に打れながら、食事を與えてから、早速舅パウルス氏の室を訪れ、その仔馬の状態を話されると、全氏は既に、その仔馬の奇病を熟知されていたと見えて、「その仔馬の目は、俗に汐目と云って、満汐時になると目から涙が出ます。」とトヨ女に前置して話されて、「自分も始め、これと知らず買ったのですが、可愛想ではあるが、近い中に他に賣り渡すことになっています。」と別に驚いた風もなく、笑いながら告げられたのであった。その仔馬は、トヨ女が [89] 食事を與えに行く度に、近寄ると直に全女の顔や手をペロペロと舐め廻し、目を細めて、さも嬉しい様子や嬌態を演じたようで、蓄類でも、丁度愛犬が主人に尾を振り喜びの表現をする様な仕種をするのと、少しも変らなかつたのであった。或日トヨ女が、所用や私用のため他家を訪問するために全商会から外出し、夜遅く帰宅の途にあった時の事であった。全商会には、予てから番犬として飼育されていた、賢い、表面は柔和な顔をしているが、

勇猛なルシア種のジミーと云ふ大きい犬がいた。その当時の長崎は、古から開けた伝統を誇る町とは云いながら、何処も同じ、無頼の徒が横行していたので、用心のために頑健な犬を飼育してあった。その犬は丁度、イタリア国境のアルプス山へ登山する者が、途中遭難に遇った際の常備犬として訓育されている、セントバーナード種の様な大きい犬で、大変利発な犬であった。トヨ女は、何か一寸とした買い物がある時にはこの犬に使をさせ、バ [90] スケットの中に必需品の書付を入れ、予てこの犬に教へられている店に買物に出されていた。そして、このジミーは、小児よりも寧ろ便利なほど、良く物を落さず、用件を果していた。或夜トヨ女が遅くなって急ぎ足を運ばせ、全商会の脇の倉庫の辺の通りを通りかかると、突然トヨ女の前に一人のだらしない風をした男が現はれたのが、その頃長崎でも困った特産物とも云ふべき白ドッポ組と稱された無頼漢で、現代語で云へば、遇連隊の一種で、トヨ女の歩行を遮ぎる様に全女の前に接近して来たのであった。普通の女性なら、この時の氣味の悪い思いを寄せるのであろうが、トヨ女は思い切って、怯む様子もなく、居留地だけは場所により人道の石畳を敷き詰めてある倉庫脇の道を真直に歩を進めて行き、その無頼漢とも見ゆる男の横を機敏な動作で通り抜け様とすると、全女の歩む方行に立塞る様にして、トヨ女の歩行を妨害しに掛り、トヨ女がその男の右脇、左脇と通路を変へても歩行を妨害し、無言の脅迫な態度に出る [91] ののであった。深夜のことで、辺りは静まりかへり、周辺の洋館は皆燈火を消し寝静まり、空は曇り勝ちで、漸く点々として立つ外燈の光が薄ぼんやりと周辺を照しているばかりであった。トヨ女はこの時、日傘を右手に持ち、いざと云ふ時はこの男を一突きなりとも相手に応酬してやる氣構で、静かに慌てず立ちつくし、「こんな事だったら人力車で帰宅するんだった。」と心中に呼び掛け、後悔しつつ、でも予て藝能で身を鍛へた精神力と沈着な態度に、迂闊にこの男も先手を打ち損っているもので、時間が長引けば長引くほど、どんな行動に出るか解らないので、トヨ女は咄嗟に、ジミーのことを思い出し、唄で鍛えた腹声を張り上げて、愛犬ジミーの名を「ジミー、ジミー」と二声続け様に叫ばれたかと同時に云って云い位の速さで、そのジミー犬は全商会の正門の脇の塀を一飛びにして、疾風の如く、咆哮しながら走り来っ

たので、突然勇猛な大きい犬が現はれた [92] ので、びっくり仰天したその無頼漢は、横道さして死物狂いになって逃れ去の後をジミーは追跡して行ったので、トヨ女はホットして氣を取り直し、ジミーのお陰で危害を救はれ帰宅されたこともあった。トヨ女がこうした生活環の多忙な中であって、良く舅、姑や、夫の用件や、社交上の内助に盡力されていたので、偶に出先の用件のことで、夜遅く帰宅されることがあっても、誰れも不平不満を全女に対して抱く者としてなかったのであった。

丁度明治二十四年四月に、突然露国のニコラス皇太子と御同伴で、希臘国皇太子（当時御兩人とも二十一・二オの頃）も共に露国御召艦パミチャ、アゾヴァ号で、長崎を訪れられた時のことであつた。パウルス商会主の R. H. パウルス氏の信任を予て得ていられたトヨ女に、全氏は早速、全商会を代表して両皇太子を御召艦アゾヴァ号を訪れる様依頼されたのであつた。トヨ女は直に華麗な花束や、全商会で予て使用していたクックに命じて [93] 製菓された大きな洋菓子（クリスマスケーキの様なもの）を持参することになったのであつた。トヨ女も、パウルス商会関係の露国人に対しての用件の必用上から、露語も聊か勉強していて、解していられたと云ふのは、その頃、長崎で有名な露国通で知られた、全市稲佐町の住人で、露国の女学校までも通学させて貰ったと云ふ道永栄女について、露語を教つていられたのであつた。併、舅パウルス氏は、相手が皇太子であられるので、万一言葉の行違いから失礼があつてはならないと大事を取られ、前記長崎市外茂木町出身の道永栄女と、此れ亦並び稱された全道永栄女の隣家のホテルの女将で、諸岡マツ女にもトヨ女と同伴する様に依頼され、他に全稲佐町から樺島町に移転された有名な露国貿易最初の喜平商会主の中村喜平氏と共に三人で、お召艦アゾヴァ号を訪れさせられたのであつた。トヨ女達三人は、夫々衣装を凝らし、パウルス商会の脇の岸壁に、予て繋留中の全商会のランチに便乗して直 [94] にお召艦アゾヴァ号に向はれたのであつた。全艦の周囲には予て水上警察署と税関のランチとが警備していたので、トヨ女は予てパウルス商会のお陰で、全署員の役員も全女を良く見知り越の人々でもあり、パウルス商会を代表して訪れたことをトヨ女が報告されると、心良く歓迎を受け、全艦のタラップをトヨ女が先頭に三人はやつと全艦のデッキを歩む事

が出来た。予て、R. H. パウルス氏から全艦に三人の訪問することを通知してあつたと見えて、トヨ女が全艦のデッキ踏と同時に、直に全艦のキニャージ、ガリンチンと云はれる侍従武官長の歓迎を受け、握手を求められたのであつた。トヨ女は、R. H. パウルス氏好みの文金高島田の全女に良く似合ふ顔に、金糸、銀糸を織り込んだ着物と装い帯を締めた容姿と、少し丸味をした面高なくつきり浮かんだ二重瞼の智的要素を表現した、稍大まかな黒水昌の様な目をしたトヨ女の全貌は、決して人に引けを取らないまでの落付と教養と品位と相俟つて、寧ろ親しみを以て全艦員に迎へられたので [95] あつた。トヨ女等はその全艦の侍従武官長の先導で、露国皇太子にトヨ女を紹介されると、高貴な育の人の特長として、自然的に社交慣れた態度で、直にトヨ女に握手を求められ、「今日は御苦勞でした。お待ちしていました。」と優しい言葉で云はれ、日本姿の独特な華やかな中にも、高雅な衣装と、トヨ女の顔をしげしげ見ていられたが、「日本の衣装も相変らず綺麗です。併、あなたの容貌も日本人の代表的で素晴らしい。」と殊の外、トヨ女を気に入られ、始終ギリシヤ皇太子と共に全女に対して何かと親しく話し掛けられるのであつた。トヨ女の話に依れば、「両殿下共に至つて平民的であらせられ、普通の紳士の動作なり態度も、少しも変らせられなかったので、自分として少しも窮屈な思いをせずに済んだ。」とトヨ女が後世、独身暮らしをされる様になって、著者と共に生活している時に思い出した様に話して聞せられていた。そこで、トヨ女も光榮に浴し、直に持参の献上品を恐縮し [96] ながら露国皇太子に差し上げ、「粗品ながら長崎のパウルス商会からの殿下への心からのお祝いの印です。」と御進呈申し上げると、非常にその好意を喜ばれ、早速お取り上げになり、侍従武官長等と共にトヨ女等は御会食の榮に預ることになり、ロシア式の重厚な豪勢な食堂に案内され、御陪食の榮を和な中に賜つたのであつた。そこで、一同団欒の中に食事が終ると、露国皇太子は、予て御準備されていたと見えて、手づから金製の真珠入ネクタイピンと共に、御自身の中型お寫眞を示され、「この品は特に今日の私等のお礼と記念を兼ねて、あなた自身に上げますから、後でお持ち帰り下さい。」と申され、他に高級煙草一罐やら、数々の珍しい品を脇に一杯に賜はり、トヨ女は幾度も感激し、同伴の二人の通訳

係として来られた人に、一応その品々を手渡され、トヨ女が皇太子に感謝の言葉を申し述べて話されていた時であった。皇太子はなおも、トヨ女を直ぐに全艦から帰へし度くないと云ふ御様子で、ト [97] ヨ女に対し改めて、「なんでも宜しいから、あなたの好きな日本音楽を私にも一同にも聞かせて下さい。」と御要求になったので、トヨ女は、予て藝能関係は名取以上の嗜があるので、易々として承諾され、「ふつつかながら、いさい承知改しました。」と心良く申し上げたので、皇太子等一同大変御満喫の御様子で、早速、全艦の軍楽隊長をトヨ女に紹介され、全隊長に直ぐ、トヨ女の三味線と全隊長のピアノとの合奏の準備をする様に命ぜられたのであった。トヨ女は、軍楽隊長に導かれ、艦内大廣間に設備されたピアノと、その脇のテーブルの上に整然と置れている普通の三味線とも思はれない柄に巻絵の施されてある立派な三味線の前の椅子を指され、トヨ女は着席すると静かに瞑目の形を取って控えておられた。軍楽隊長もトヨ女の脇のグランドピアノの前に着席され、一時両人は呼吸を整えて控えておられた。その室の周囲には、トヨ女の弾く日本独特の音曲をこの際良く翫味し度いものと云ふ表情をしている露国艦員が、固唾を飲んで、[98] 謹聴しようとかき一つする者がいないほど、静かな空気が、室一面に流れていた。トヨ女は、軍楽隊長と合奏する一寸前に、全隊長の楽器室に呼ばれ、日本音曲の楽譜の選択方を依頼されたので、全女はあれこれと選択する中に、日本名曲の中の目出度いものとして知られている「万歳」と「松づくし」の楽譜を選び出され、それを楽長に渡されたのであった。楽長は幾分緊張した面持で、やをらグランドピアノに静かに手を觸れられ、その日本楽譜を見詰め、試す様にほんの軽くキーを叩かれ、調子を取られていたが、間もなく心機が熟されたのか、脇のトヨ女の方を静かに振り向かれ、「始めませう。」と小声で合図され、両人は同時に合奏を開始されたのであった。トヨ女はと云ふと、全女のはりのある元氣に満ち溢れた、でも落付のある唄声と、その三味線を弾く熟達した撥の捌きと相俟って、楽長の弾く、神技とも思はれる自由自在に玉を転す様な力強いピアノの美音とに良く融和し、聞き入る艦員の目にも、[99] 暫く感動の息遣いが色濃くなって行った。トヨ女はと見れば、日本でも最高級と頷れる葵の紋のついた優美な巻絵の施されてある三味線

を、静かにやんはりと全女の膝の上に置かれ、心魂を打込んだ様な撥の捌きと唄声に熱を帯びて来るのであった。そして、両人の真剣味を帯びる合奏の、「万歳」と「松づくし」の曲の優美な音が、その曲の場面を良く展開され、室内一様に充満されて行くのであった。そして、知らず知らずの間に、艦員の魂を夢幻の境に誘い込み、並居る露国武官連も感動の一色に塗りつぶされた様な、静かな溜息すら室内に流れ渡りつつ、暫く合奏は終りを告げたのであった。皇太子は合奏が済むと、トヨ女に直に再び握手を求められ、今日の労を犒はれたのであった。斯うした日露人のなごやかな雰囲気の中に、再び楽長からトヨ女は楽器室に案内されたが、そこには、音楽研究資料の世界各国のあらゆる珍奇とも云ふべき楽器類や名器等が、整然と保管されていた。[100] その中にも、一見して日本三味線の最高級とも思はれる、すばらしい徳川幕府時代の巻絵の施されている三味線類から楽譜類に至るまで、保存されていた。トヨ女が楽長から見せられた際に痛切に感じられたことは、楽長の趣味と云ふよりは、こうした楽長の専門家として心掛けに胸を打られ、何処の国の人々も藝術なり、技術なりの奥義を極める為めには、より一層の細心の注意と、不屈な精神を以て研究心を起さなければ、何事も人の上に達し指揮することは不可能であろうと、つくづくトヨ女は感じさせられたのであった。トヨ女は間もなくして、露艦アゾヴァ号の両皇太子や侍従武官長や楽長等の主った人々に見送られ、別れを告げられ、全艦のタラップを降り切ると、水上署員が乗船するランチに行き、トヨ女は全署員一同の警備の労の印にと、皇太子から戴かれた煙草一罐を皆に喫する様に手渡された際、署員一同は、「女性の方はほんとに徳ですな。」と羨望する様な嬉しい様な微笑を浮かべ [101] せながら、手渡された露国煙草を物珍しい氣に見て、「こんな結構な舶来煙草を喫むのは生れて始めてですよ。」と皆嬉し相に、早速その煙草を別け合いながら、喫するのであった。

皆てトヨ女は、少女時代から物事に負けることの嫌いな性格であった関係上、記憶力も人一倍優れていて、良い優れた師匠があれば、両親に対して、こればかりは我意を通してまでも、その師匠に師事して藝能を勵まれていた。その結果、ぐんぐんとその天分の才を発揮される事が出来たのであった。当時長崎に滞在して、その指導者

中に大阪の紀之国屋即ち、昔で云へば、千両役者の系統を歩む笹巻冠若の妹に当る大夫元を、トヨ女の修業のために、R. H. パウルス氏が特に招聘され、新内、常盤津、清元、長唄や歌沢等を師事させられていた。舞踊では、山村流の大阪上方歌舞伎の大御所実川延若の流れを汲む中村宗十郎に師事して習得せられていたのであった。長崎は米国合衆国使節ペルリ提督が、サスクエハンナ号以下数隻を伴 [102] うて、嘉永六年六月浦賀港入港に端を発し、翌年全提督が、幕府当局との間に締結した安政開国條約にその基礎を置く様になり、それ以来相前後して、英、佛、露と大國間にも急速の開国通商條約が結ばれ、長崎も亦、ポルトガルやオランダ両国の後を継ぎ、これ等の大國間の通商貿港に全幕府から指定され、明治維新前後から、露国艦船の出入も繁くなったのであった。そこで、露国人は、主に長崎稲佐町方面の丘の上に避寒する目的のためや、貿易のために訪れる様になったのであった。それ等の露国艦船で長崎へ入港していた主なるものでは、「パミチャアゾヴァ号、マナマフ号、ドンスコイ号、マンジュール号やその他幾隻となく、浦汐ダルニー（大連）、ポートオーザー（旅順）等から継ぎ継ぎに長崎港内外まで、入港艦船で満ちていたほど、その時代の長崎は繁栄期であって、露国人で充満された、長崎稲佐町方面に住む児童や学童等まで、その頃の時勢に応じて露語を解さぬ者はな [103] かったほど、日露人間の親しみ感と繁栄振りに包れていた土地柄でもあった。その頃の流行唄でも証明されている様に、如何に長崎が他に率先して、文化の点でも優先的に盛大であったかを、如実に物語っているかを、次の唄でも理解することが出来るであろう。

記

一、鶴の港の その長崎で、ねーエ

あまた名所の ある中で

景色のよいのが 諏訪公園

一、春は花見の賑かさア

元日櫻や 喜の本屋

大千亭や 曙に

調べ 合せる 三味太鼓

一、夏の涼みは 浴衣がけ

暑さ忘るる 床の上

水の吹き上げ 吹く風に

パッパと散り来る 心地よさ

一、秋は紅葉の 錦織

池の水さえ 赤々と [104]

夜は月影 輝きて

人の肌さえ 白々と

一、冬は見渡す 山々に

雪見の人も 数多く

霞にまごう神崎(コウギキ)に

立つは煙が 叢雲(ムラカモ)か

一、鳴る一は一 入船の ねーエエ

笛の一音かねーね。

この様な唄声等が、夜晝となく此処、彼処の町の料亭やホテルから騒しいまでに流れて来て、長崎の繁栄振りを表現していた。次にその頃、引続きパウルス商会から食糧品、雑貨類の仕入先の主なるホテルや料亭を紹介すると、

記

一、長崎県雲仙の雲仙ホテル。（全ホテルは全地で、最古のもの）。

一、長崎県小浜の小浜ホテル。（全ホテルは全地で、最古のもの）。

このホテルの株主はキク女と云って外国人の誘致、斡旋者として、最初の功績を残した女 [105] 傑でもあった。全女は、英、佛、独、露語に通じていて、遠くは支那上海、南京や漢口方面へまでも旅行し、内外人とも面接の上、小浜が如何に避暑地としても亦、療養地にも最適であると云ふ事を、大いに説得、勧誘されて、その頃、全盛を歌はれた人で、トヨ女とも至って、商品取引上からでも、昵懇の間柄であった。このキク女は不幸にも、或日飲酒の上、全地の海岸で海水浴中に溺死されたと云ふことで、誠に惜い人物であったと同時に、儀礼的な外交官よりも、寧ろ遥に実質的に優れた社交家で、事業熱心家でもあった女傑型の婦人であった。

一、福屋。（当時洋食専門料亭で、当市中小島町在、旧名上長崎村小島郷）。

この料亭は、R. H. パウルス氏父子やトヨ女が、屢寸暇を利用して慰労の意味で訪れられる、特に親しい料亭であった。偶々この料亭に全氏等が訪れられた時であった。この内の祖母が、パウルス父子に

誇 [106] らし氣に、卓上の洋酒を指し、評価して云ふには、「この洋酒は始めて長崎に到来しました、他にない酒ですたい。」と云はれたので、パウルス氏父子等顔見合はせ、笑ひを堪えられていたが、子息が茶目氣を出され、「ホホー、私は生れて始めて、こんな甘い酒を飲んだですたい。」と微笑して話されたので、この料亭の女将は大変赤面されて、「お婆さん！何んにも御存じないとは云ひながら、そんなことをパウルスさんの前で話されると笑はれますよ。」と祖母を窘められ、「この酒等も皆、パウルスさんの方から別けて貰ったものですよ。」と話されたので、この時になって始めて皆は腹を抱えて爆笑されたのであった。

一、春若屋。（丸山町杉本屋附近）。

一、宝亭。（小島郷）。

一、鹿島屋。（丸山町）。

大体以上が、パウルス商会に関係のある主な料亭であった。その他、多少の関係があ [107] っても、独立したホテルでは、次の様なものがある。

一、長崎ホテル。（下り松）。

一、ベルビューホテル。（大浦上田町 日本最古のホテル）。

一、フランスホテル。（大浦町）。

一、ジャパンホテル。（大浦町）。

一、外国亭ホテル。（外浦町）。

一、精洋亭ホテル。（西浜町）。（旧名 清洋亭）。

一、迎陽亭。（上筑後町）。（日本、西洋及支那料理）。

一、富貴樓。（西山町 日本料理）。

一、環林館。（西山町 日本料理）。

一、一力。（新橋町 日本料理）。

以上が、長崎市内でも古から営業し、繁栄していた一流のホテルと料亭である。その中でも現在存続しているのは、精洋亭ホテル、富貴樓と一力亭であるが、その頃の精洋亭ホテルと、今度の戦災で跡形も無くなったが、外国亭ホテルは特に日本人経営者の中でも内外人の客足が繁く営業が盛んな時代であった。その精洋亭ホテルや外国亭ホテルは、外観の装 [108] 飾にも美麗を盡し、色取り取りの行燈（ボンボリ）を階上、階下の両面の軒先に釣り下げられていて、夜ともなれば、人々の目を引き讚美的となり、遠方からも眺められ、一大壯観を呈して

いた。トヨ女はこうした長崎の繁栄期中にあつて、全女がパウルス商会の家族や雇人の日常の内輪の補助や指図の多忙な仕事に日々を追はれつつ、時たま有名、無名の友人知己を訪問されることがあつても、舅パウルス氏の身の廻りの世話も決して怠る様なことはなかった。その頃のトヨ女は二十五・六才で、働き盛で、生れつき健康体ではあつても疲労を知らず、精力的に良く活動され、人のためにも良く世話をされ、特に優しい理解に富まれた舅のR. H. パウルス氏の身边にも氣を配られ、陰になり日向になって獻身的に奉仕されていた。だから、全氏も亦、誰よりも特別にトヨ女を熱愛され、色々の珍らしい話をして聞せられたり、全女に似合な品物があつたり、他で発見された場合は、一番先に全女に分け與えられていたのであつた。併、トヨ女は何によらず、欲 [109] 得づくで、全氏に奉仕されるのではなく、姑サト女に代り潔癖で、然も几帳面な性質のトヨ女としては他人のことで見ても見ぬ振をしていられない性格の人であつた。例へば、舅パウルス氏が外出される時には、前以て洋服類の点検は固より、シャツのボタンの不足していないか注意され、衣服の襟垢や皺の手入を怠つてはいないかと、何かにつけ、細心の注意を拂はれると云ふ様な注意力と親切心の持主であつたから、姑サト女も大いに助り、全女からも此の上もなく信頼されていた。トヨ女は亦、こうした舅パウルス氏とは、丁度仲の良い親子の間柄の様に意氣投合され、全氏が何事によらず、「これは良い、これは好き。」と主張されると、トヨ女も亦満足して同意され、又常儀的に理解し合つておられた。全パウルス氏は、トヨ女の島田髻が一等氣に入られていたので、トヨ女が家にいるときでも、外出する時でも、常にその島田髻を廃さぬ様に奨励されていたので、或日トヨ女が全氏に [110] 対し、「日本内地では、この島田髻を結ふのは未婚者か藝者衆に限られています。」と笑いながら云はれると、全氏は真面目な顔して、髻などは自分の顔に似合いさえすれば、人に氣兼ねしないで宜しい、遠慮しないで結つていなさい。」と西洋風の自由な考へを止められないのであつた。そして、日本の習性と儀礼的な風習を良く知られていながらも、只トヨ女が、より一層美しく見られるのを楽しまれる一心からであつた。だから、全氏はお気に入りのトヨ女を、機会ある毎に知名の人の会合にも共に全女を同伴されていたので、

全女は一層教養が身に着き、内客外客を問はず、見聞を廣めることが出来たのであった。そして、優しい舅パウルス氏と共に住むなごやかな生活の中に、知らず知らず、世間並の人々よりも一層自然的に内外の事情や習慣性をも取得し得ることになり、生きた学問を身に着けることが出来たのであった。トヨ女が、斯うした良い環境に恵まれなが [111] ら、舅パウルス氏への奉仕の数々の中に一寸変わったことでは、全氏が就寝される前には必ず、西洋の習慣と衛生的な習性で、足首を洗淨して床に入られることであつた。そこで、トヨ女は率先して自身手伝い、お湯を洗面器に入れ、全商会で販賣している最も安価な香水を、足の臭氣を除くために、それを注入して、全氏の両足を洗面器に入れて洗ってやられるのであつた。こうして、就寝する時には、一日の足の疲れの疲労回復剤にもなり、斯うした些細なことでもトヨ女に手伝って貰ふことを何よりも楽しみとされていた。扱て、この R. H. パウルス氏と同時に安政四年に英国から長崎に来崎されていた英国紳士で、トーマス・A. グラバー氏と弟の A. B. グラバー氏の兄弟があつた。その全氏等の本邸は、明治三十五年に当市長崎プレス社の発行した人名録で見ると、兄トーマス・A. グラバー氏は下り松から上り、現在の大浦天主堂へ行く、急勾配の石疊の小路を直行し、全天主堂前の右角から手前二軒 [112] 目の家数であつて、その辺が千杉と呼ばれていた関係上、昔は杉林があつた処であろう。それに反して、弟の A. B. グラバー氏は、世に有名なお蝶夫人の縁の土地で本邸とされている、南山手一本松のグラバー邸に住居されていた。この兄のグラバー邸内に古から一本松が聳へ立っていたことから、長崎人は、一本松のグラバーさんと云へば、直に、「アア、あの英国商事商館のグラバーさん。」かと親しまれていたグラバー兄弟であつた。後になって、その一本松の地の名稱が、一本松から松ヶ枝町に変わり、現在の下り松と改稱される様になつたのであつた。R. H. パウルス氏は勿論、グラバー氏兄弟とは安政年間からの古い友人であり、何かと両者間に営業上の用件もあつたことから、グラバー邸にも舅パウルス氏と共にトヨ女も往復されていたので、兄のトーマス・A. グラバー氏の夫人ツル女ともトヨ女は親交があつた。序だから、茲にツル女の性格と人柄を、参考のため [113] め附言して置き度いのは、現在世人の注目の的となつている、兄グ

ラバー氏の夫人おツルさん事お蝶夫人の縁の地と知られている現在の南山手のグラバー邸である。その兄の全氏の邸宅に、元から弟のグラバー氏が住居されていたことから、そのお蝶夫人の縁の邸宅が、「その場所として矛盾したことになりはしないだろうか。」と著者は思い廻らざるを得ない。尤も、その南山手のお蝶夫人の縁の地としてのグラバー邸から約半町下の千杉と昔稱された場所に建てられているグラバー邸も大同小異で、同じクラシックな様式であつて、それに附随した相当風味ある庭もある別邸ではある。併、その邸園の周囲の環境としては、やはり長崎を一眺千里の中に見渡される絶景の稱ある南山手のお蝶夫人の縁のグラバー邸として知られているその本邸とは、場所柄でも比べものにならない。長崎史談会員でも、暫くこのおツルさん事お蝶夫人としての縁の土地が、現在市当局から認定されている南山手のグラバ [114] 一邸が、真実そのお蝶夫人が、社交的に生活していた土地柄であるか否か問題にされ出して来ていることでも解るのである。昔から良く、「百聞一見に如かず。」と云はれている如く、古い実録や実話等は、人も世も時の流れと共に変動するにつれ、薄らぎ消え去ることは当然であつて、況んや、如何に学問的に教育されている者でも、その調査資料の点に於いて、その環境に恵まれていない者には、間接的に調査、探究しなければならず、餘儀なくされるであろう。従つて、その調査は、完全な資料を得る事なく、不正に終り勝ちになるものである。トヨ女は、こうしたグラバー邸へもパウルス商会の所用や私用で度々訪問されていた関係上、ツル夫人とも親しく交り、お互の趣味、趣向も共に合い、取分け藝能関係もお互に豊富に蓄積されていたので、トヨ女はツル女の人の人柄や性格をも熟知されていたのであつた。そのツル女も亦、元は武家出身の人であつた。彼の維新改革のための王政復興の波に乗せら [115] れ、徳川幕府の互解の餘波を蒙つて、武家と云ふ武家は殆ど、その後の生活上の死活問題に直面し、生活設計の建直しを餘儀なく始めなければならなかつた。そして、武家は武家なりに修業と教養を身に着け、藩公から只扶持を戴いてその生活の糧を得ていて、士農工商の階級の基にあつて社会の長とされて満足されていたころの時代とは異り、これからは自力で、生活戦線に乗り出さなければならぬ運命に立たされたのであつた。そこで、武士が自活する

には、色々の方法を案出しなければならぬとしても、その主人は寺小屋の師匠するか、婦女子は主に手内職をするか、又は他に身を落して働くかして、生活の糧を稼ぐ外に、町人、百姓の様に独立し自活する商法の経験はなく、今までの様な四角張って、用を足す訳には行かず、始めから商法を覚えるにも一年生から始めなければならず、餘儀なくさせられたのであった。ツル女も、元斯うした境遇の武家の中であって暮して来た人であったので、[116] その一家の生計の足しに働かなければならぬとしては、早道な生活の資として藝技にでもなるより他に手段方法がなかったのであろう。ツル女も斯うした世の風評に洩れず、武家生活の犠牲となり、大阪から藝技に打って出られたのであった。そこで、斯う云ったツル女が、トヨ女の訪問を受け対談される時には、決して九州辯で話されるでなく、亦長崎辯では勿論なかったのであった。それは、ツル女は大阪辯丸出しの独特な軽快な発音で話されるのであった。が、武家出だけに、決して蓮葉な話し振りをされるのではなく、懇な落着のある控目な言葉で話されていた。ツル女は前述の如く、大阪から藝技に出られて後、福岡に転住され、尚もそこで藝技を働いておられた時に、彼のトーマスグラバー氏の目に留り、二人はその地で結婚式を挙げられ、長崎のグラバー邸に落ち着かれたのであった。このツル女が、お蝶夫人として世界的に有名な「マダムバツタ [117] 一フライ」の主人公として祭り上げられるのを反対するのではなく、寧ろ歓迎し度いのであるが、全女の境遇なり性格なりを観察する時、如何してもその主人公であったか否か、大いに疑問視しなければならぬ点が、多々ある様な気がしてならない。そのツル女と主人のトーマス・A・グラバー氏の仲に生れた長女をお花さんと云ひ、長男を倉場富三郎氏と改名されていた二人の子供があった。長男の富三郎氏が成人されると、その父君兄弟も明治の中期まで勤められていた関係上、長崎大浦海岸通り七番館のホームリンガー商会に此度の終戦前まで、全商会の要職を勤められていた。父君グラバー氏兄弟は、R. H. パウルス氏よりは遙か以前に死亡されていたので、長男富三郎氏は、全商会に鋭意忠勤されていたのであった。が、此度の東亜戦争勃発するや、長崎地方の外国人経営の商館、銀行や宗教学校等も閉鎖される様になり、従って外国人の立退が開始されていた中であって、一人倉

場富三郎氏だけは長崎で生れ育てられ、国籍も日本 [118] であった関係上、父君のグラバー邸の財産、その他を維持されていて、平和裡に生活されていた。併、大東亜戦争も、始めの中は連戦連勝の意氣激しく、国民は皆と云ってよいほど必勝の意氣に燃え盛っていたが、だんだん戦況が進むにつれて旗色が悪くなりだし、それを証明する様に頻りに米機二十九が飛来して来る様になり、処々方々に爆弾を投下され出した頃のことであった。戦況が日本のため悪化するに従って、倉場富三郎氏は日本軍閥政府に遠慮されてか、極力自邸に謹慎されている様子で、なるべく外出から遠ざかっていた。併、全氏が、そんな風にして勤慎の状態にあっただけでは、最早軍憲の目を逃れることは出来ないほど、戦況が急迫していた。そして、全氏も亦、軍憲から身辺を警戒される身となり、遂に全氏をスパイの嫌疑で、極秘裡に糾問していた。全氏は度々の糾問と厳しい訊問に堪へ兼ねたことと、特質の英国紳士の風貌を備えられていた全氏の温厚な性格と祖先のプラ [119] イドを傷つけられた思いであったであろうか、將又、世間態を恥られてか、遂に軍憲の隙を見て、自邸でピストル自決をされたのであった。斯うして、不可抗力の運命の基に自決された全氏は、トーマス・A・グラバー氏の子孫として、只一つ長崎に功績を残されている事がある。それは、長崎出島に今尚存在する長崎内外倶楽部の創立に係ることである。この倶楽部は、明治三十二年に創立されたものであるが、当時の主宰者は、グラバー氏兄弟も勿論その置位にあつたのであるが、最初の提唱であり、主宰者は、R. H. パウルス氏であつて、全氏はパウルス商会その他の運営方法に多忙を極めておられた事と、最早初老の時代であつたことから、幸いに倉場富三郎氏の人柄と元氣旺盛な青年であつた全氏に、全倶楽部の管理者として推薦されたのであつた。そこで、倉場富三郎氏はパウルス氏から引継がれた全倶楽部の運営を保持され、向上発展に努力され、昭和十四年五月十六日附で、[120] 長崎内外倶楽部会長県知事川西実三氏から感謝状を全氏に授與されたことでも明である。R. H. パウルス氏は、斯うした倶楽部事業にも長崎ばかりではなく、廣く神戸市の外人の社交の一端にもと、相当の使演と出資をされて、神戸外人倶楽部にも寄與されたのであつた。扱て、その倉場富三郎氏の姉に当る長女のお花さんは、始め三菱長崎造船所の創立者であり、

主宰者であった岩崎彌太郎家へ縁談が進められていたが、グラバー家の家事の都合上、その頃ホームリンガー商会に当時全商会主のF. リンガー氏の片腕として有望され、勤務していられたW. G. ベンネット氏の妻女として迎へられたのであった。全氏はその後、全女を伴い、朝鮮仁川のスタンダード石油会社に転勤され、その地で生活することになったのであった。R. H. パウルス氏の子息、J. R. パウルス氏も後で、ホームリンガー商会に勤務するようになったのも、父君パウルス氏が、我子を始めから自分の膝元で働かせると我儘 [121] 勝になる恐れがあるところから、兼ね親友のホームリンガー商会主のF. リンガー氏に依頼され、全商会に勤務させることにされたのであった。このリンガー商会に勤務されるようになった子息のJ. R. パウルス氏が、人々の意表に出て、全商会の全員を驚かされる様な冒険的事業を敢てされたことであつた。それは、子息パウルス氏の提案で、長崎凧を浦汐市に持出し、出張販賣することであつた。

この全氏の提案をリンガー商会主やその他の幹部に相談されると、皆この奇抜な提案を一笑に付し、誰も本気で賛成する人はなかつた。併、前述の如く、子息パウルス氏は、物心両面に恵れ、何事も自由に教育され研究されて来られたので、体験に物を言はせて、その頃特に盛んであつた、長崎名物の一つに数へられる長崎凧揚にも興味を持たれ、当時の金で凧揚の費用でも月に三百円餘も長崎凧揚組合に納められていた。そこで、良く家族同伴の時もあり、一人の時もあり、当地凧揚場所とし

[122] て知られている、東は風頭山から、北は金比良山等にて、長崎人は盛大に凧揚大会を催すので、酒、肴を携帯させられ、腕を磨かれていた。子息パウルス氏は元来、物事に天性の器用な質であつたので、凧揚等も玄人の域に達していられた。そこで、長崎凧屋組合からも良い顧客と歓迎され、顔も売れておられていたので、全組合員の二人ばかり同伴させ浦汐市に渡り、凧揚の指導を兼ね必ず長崎凧を賣捌き成功させて見せるからと、全氏の自信と熱意に絆れ、リンガー氏も遂に動かされたのであつた。そこで、子息は始めに、三百枚の長崎凧を凧屋二・三名に携帯させ単身浦汐市に渡り、各機関を通じて宣伝、指導に極力務められた結果、遂に予想外の成績を上げられ、三百枚の凧では不足を来したので、後便で長崎凧を追送させるやら、大騒ぎを演じる位に多大の収穫

を得て意氣揚々として帰崎され、リンガー商会の者をアット云はせられたのであつた。斯くして、子息パウルス氏の機敏と商才を認められる様になり、当 [123] 時未だ、二十代の子息が全商会から受ける月給は二百五十円餘貰はれていたと云ふ。その当時は既述した如く、長崎港に出入する艦船が頻繁であつたので、その中には捕鯨船もあり、北は洛慎州から南は南洋方面の周辺まで、漁区として活躍していた露国々籍の捕鯨船も長崎港に定期に入港し、在長崎露国義勇艦隊支部内に設けられていた露国捕鯨会社を通じ、鯨肉の取引が盛んに行はれていた。その捕鯨船等の船長のセルゲフ氏と云ふ人とその夫人の木山トク女は、人々の評判の良い篤志家であつた。全夫妻は全船で長崎に入港する度にパウルス商会に度々訪れられ、R. H. パウルス氏やトヨ女と共に鯨肉の料理で食事を共にされるのが楽しみにされていた。全夫妻は、当市浪之平町七五番館に住はれ、特に全夫人のトク女とは昵懇の間柄であつたので、トヨ女が後日パウルス商会から別居され、町の中央に住まれている時でも、トヨ女の幼児（著者）にわざわざ主人に頼んで、上海から、[124] その頃珍しい立派な子供帽や洋服類を土産としてトヨ女に贈られていた。そして、早速持参した品を、全夫人自ら幼児に着せて見て、「良く似合つてよかつた。」と如何にも嬉し氣に云つて頬づりされ、我子の様に振舞はれるのであつた。一方、主人のセルゲフ氏も同様に、至つて好紳士で、パウルス商会に自ら鯨肉を持参しては、R. H. パウルス氏と共にその鯨肉をコックに料理させ、食事を共にして雑談されるのを楽しみに、全商会を訪れられていた。トヨ女が晩年、孤独な生活を送られる様になつてからも、偶に思い出した様に、此れ等の親しかつた人々の追憶に耽りながら、「これも皆、R. H. パウルス氏の高德に依るもので、何時もその頃の悪意も掛引きもなかつた善良な人々の親切心に感謝しつつ、懐しい氣持で一杯である。」と今は無き親しかつた人々を述懐して、著者に良く話されていた。茲にトヨ女が、R. H. パウルス氏の関係者中特に世話になられた最後の人として述べなければならぬ事は、その当時パウ

[125] ルス商会主R. H. パウルス氏が、陰徳を施された英国紳士で、人格者であつた愛蘭の人で、元世界航路の船長B. J. ランドホーム氏の生立と美挙について述べさせて戴いて、それ以後は、愈、トヨ女が数奇な運命

を辿られることになるのであるが、幸不幸は別として、何故トヨ女がR. H. パウルス商会から離れ、独立独歩の道を辿られ、上海方面へも活路を求めねばならなかったかを最後に、此のトヨ女の実歴伝である、「母の残像」を終らせて戴くことにする。

扨て、私は（著者）、母トヨ女は勿論、私が中学時代全女の庇護の下に通学していた時、偶然にもこのランドホーム氏と幾年かの後、長崎の町の中央での奇遇を喜び合い、全氏の懇切なるお世話になった、神の如き無限の愛と、崇高な人格とを偲び、思い出の記として、述べさせて戴く次第である。B. J. ランドホーム氏の祖先は、元スウェーデン国ストックホルム市に永住されていた。後、全氏の嚴父の時代に愛蘭国に移住され、三人姉弟の父として、全国 [126] で永眠されたのであった。その父の末子であったこのB. J. ランドホーム氏は、欧州は固より、東洋航路の船長として遍歴された関係上、長崎寄港の際はその都度、R. H. パウルス商会の二階の一室を無償で、全パウルス氏の好意で借用され、全夫人の松本ヒロ女と共に滞在されていた。トヨ女は、その頃から、全夫妻にも持前の親切心から身の不自由なことがあれば、何くれとなく良く世話されていた。全氏は、明治二・三十年前後頃、永らく長崎、上海、香港航路の優秀な船長として知られ、支那上海市に、その頃、数多の貸家を所有されていた。其後間もなく、上海市内の全氏の貸家を相当な価格で全部売却され、長崎県西彼杵郡大草村の大草駅から北に沿ふた海岸辺に二階建の洋館を建て、老後を保養しながら安楽に暮らされていた典型的な、そして、恐れ大いが、英国の故ジョージ階下の面影のある英国紳士であった。そして、その建物の脇に相当の敷地があるところから、其処に種々の果実の木を植えられ、来客や知己の訪問した際に、その [126'] 実を供応するのを楽しみとされていた。当時、長崎市銅座町に全氏の夫人の縁家（傘製造店）があったので、大草村からそこへ二三日滞在されていた。全氏の大草村の家庭へは、良く色々の知名人や全氏の知己の来客のある中でも、当時長崎県知事であった李家知事も部下二・三人を伴い、全氏を訪問される時もあった。この李家知事が、或日、このランドホーム氏から一度訪問の儀礼のことで、全氏の温厚な性格にも似合はない、心から李家知事を詰責され、訓されたことがあった。と云ふのは、全知事が或日曜日

に全村近くまで来た序に、何んの前振れもなくランドホーム氏を突然訪問された時のことであった。最早周知の如く、欧米では他家を訪問する時には、その訪問先に一応「何日、何時頃に訪問するからよろしく頼む。」と云ふ様なことを通知して置く、紳士の礼儀が重んじられていた。それは云ふまでもなく、お互に各家庭では夫々の役割や所用があつて、午前、午後とその家の一日の計画的用事が進めら [127] れるからである。丁度、その日曜日には、ランドホーム氏が、餘生を暮られ、他の目には延氣で安楽に生活している様に見えても、老年になつても欧米人の習性として、健康上運動精神が忘れられないであることと、昔の船長時代までの苦勞と修業の時の習慣で、我家の洋館の板壁等をペンキで塗り替えられていた時のことであった。全氏が、只ペンキ塗りだけであれば、左程赤面されなかつたのであるが、何処の人々でもそうである様に、汚れても差支えない様にボロボロの衣服と云つた粗末な服にペンキが附着しているのを着て、見すばらしい自分の醜態をしているのを却って恥入られたことと、英国人としての「プライド」を酷く傷けられた思いで、我慢が出来なかつたのであろう。遂に温厚な全氏の性格を一時忘れさせ、李家知事に対し、「あなたも紳士でありながら、どうして今日訪問すると云ふことを知らせて下さらなかつたか。」と身を振はせる様にして詰問され、「御覧の通りの始末で、あなた方を歓待する用意 [128] もないので、折角の御來訪であるから、粗茶なりとも差上げますから、暫時お待ち下さい。」と云はれて、そこそこにその作業を中止され、その日は知事等も赤面やら、恐縮されるやら、その無礼を詫びられ帰宅されたことと云ふことである。この事は上下を問はず、良く日本人は他家を訪問する際に、序であつたからとか、その前を通つたのでとか、と云つて気軽に云つて訪問する人々があるが、火急の場合を除き、前以て先方へ通知して置くか、朝、昼、晩の食事時が済み、夫々時間の餘裕のある時を見計つて、日本は日本としての現代の習慣上訪問するのが、最良の方法と思ふのである。茲にトヨ女が、このB. J. ランドホーム氏と再会され、旧友として交友を温められる様になつた事情を述べる前に、少し過去に溯つて申し述べなければならぬ。と云ふのは、前述の如く、永らく病床の人となつておられたR. H. パウルス氏が、明治四十二年八月十日にパウルス商会の

最後の生残りの一人であった全氏が、永眠されて以来、全商会も遂に [129] 解散の区点なきに至ったのであった。そして、その頃の長崎は、以前の様に繁栄した長崎ではなかったので、日本人商会員だけが、全商会の運営に当たっていた関係上、全商会主のパウルス氏が死亡されると、間もなく、米国領事館からの全商会の解散命令や整理やらあって、全商会の閉鎖が確定したのであったが、全商会の残品の処理上、近くの洋館を日本人商会員が共用して、一時経営していたのであった。併、R. H. パウルス氏の居ない全商会は、直ぐに維持費その他の資金に困り、一年の続かぬ中に、再び解散の憂めに立ち至ったのであった。その頃、全市大浦元町のオランダ坂に本邸（現乗光院跡）のあった沢山精八郎氏が、全パウルス商会の跡を米国領事館を通じて譲り受けられ、それまで、長崎港内に出入する各艦船に供給する水船専門の営業を続けておられたのであった。そのパウルス商会跡を譲り受けられた沢山氏は、全商会の本館を改造され、沢山汽船機械会社を改稱され、徐々に海運業を發 [130] 展され、全会社の隆盛を見る様になったのであった。この時代のトヨ女の生活情態は後に詳しく述べるとして、事情あってパウルス家から別離され、同時に長崎から上海市に渡られ、全地で生活戦線に打って出られている中、縁あって全市の某日本財閥の経営に係る有力物産会社に勤務されていた松木氏と結婚され、間もなく長崎の全会社の支店に転勤になり、数年後には全社を辞職され、朝鮮某地のスタンダード石油会社の支店長として勤務されていた時であった。その後、トヨ女は、松木氏とも死別されて、愈々結婚生活に終止符を打れる様になって、予て長崎の全女の両親宅に預けられていた正夫の教育と教養を受けるために単身長崎に帰り、親子としてトヨ女と正夫は離れ離れに暮らさなければならぬ様に餘儀なくさせられていた二人は、やっと十五年振りに再会し、親子水入らずで生活することになったのであった。そこで、早速トヨ女は貸家を物色されている中に、全市本紙屋町に下宿屋向の手頃な家が見つ [131] かり、その家は階上、階下共各三室もあり、元料理屋を営まれていた家と家主が云っていた。トヨ女は、予て、面接があった長崎高等商業学校の主任教授に渡りをつけられ、全校の成績順に決められていた、A、B、C組の一等優秀なA組の学生を三・四人選抜して貰い、こうして下宿屋生活を始められてい

た丁度その頃、トヨ女が旧知のランドホーム氏に再会されたのであった。それは、大正の初め頃の或日のこと、偶々トヨ女が所用のため、全市本石灰町の現在の宝塚映画館の前を通行されていた時のことであった。二人はパウルス商会で知り合っていた以来、絶えて久しく、会合する機会に恵まれなかったのであったが、突然トヨ女が、ランドホーム氏から肩を叩かれ、思はず振り向かされると、ニコニコしながら全氏が側に立たれ無言で、感慨込めて、トヨ女に握手を求められたのであった。その時の二人の喜ぶ様と云ってはなく、お互に健康を祝し合はれ、途中ではその後の詳しい話が出来ぬところから、[132] 前述の如く大草村の全氏の住家を訪れる様にトヨ女に申し渡され、相変らずの全氏の優しい言葉を掛けられたこの時のトヨ女が感じたことは、丁度、慈悲深いお観音様の声を聞いた様な思いであったのである。後日、トヨ女が著者にこの時の感想を思い出す度に、「あの時は丁度、助け神様の思いがした。」と述懐されていた。そして、その時、全氏は、トヨ女に別れ際に全女の手を握らせられ、「これは一時のお礼心です。」と云はれ、「今でもパウルス氏とあなたの御親切は忘れません。パウルス氏の孫の正夫さんの教育を私からも頼みます。」と、その頃の金子で、五十円をも恵まれて、「下宿屋は直に止めなさい。」と訓され、「色々これから話すこともありますから、忘れない様に是非大草の方へその中に来て下さい。」と懇に告げられたのであった。その後度々、ランドホーム氏もトヨ女も両家を往復訪問される様になり、その中に正夫の教育上、周囲の善悪の環境にも留意されて、全氏の世話で、長崎港を見渡される見 [133] 晴しの良い閑静な東山手の或洋館にトヨ女親子は落付く様になり、其の家から正夫は通学することになったのであった。正夫親子は、斯うしてランドホーム氏の庇護の下に生活する様になり、数年の後、正夫が某中学を卒へると、間もなく、丁度大正六年九月二十日に六十四才で全氏は永眠されたのであった。

著者が知る限りでは、どうも永らく船員生活を続けている者は、概して身体を無理して働く加減か、得てして若死する人が多い様に見受けられるのである。ランドホーム氏もその一人であったかも知れないが、全氏こそ文字通り温厚篤実な、そして、晩年、人も羨やむ程何不自由なく暮され、人々からも尊敬されていたB. J. ランド

ホーム氏も、未だ六十四才の若さで安楽死されることになり、全夫人松本ヒロ女も、その後間もなく全氏の後を追はれる様にして永眠されたのであった。扱て、このB. J. ランドホーム氏は、英国は愛蘭に生れ、全氏の厳父は全地で永らく軍籍にあった武人肌の名の通りの厳格な性格の人で、幾多の功績ある勲章を身 [134] に着けられた寫眞を全氏から見せられたことがあった。それは、ランドホーム氏も云はれた通り、如何にも武人の風格を備えた人で、ランドホーム氏はこの父の子息で、三人兄妹の中の末子であった。そして、その父の武骨な風貌に似ず、ランドホーム氏は至って貴公子然たる柔和な品位のある優しい面影をしておられたのは、慈愛に満された優しい母親の面影を受け継がれていた所為でもあろう。そのランドホーム氏は、三人兄妹の中でも一番生れつき健康体であって、元氣な、寧ろ腕白小僧に類する少年であったので、度々父に叱られ通しであったが、その度に優しい母親が代って父に詫びをされる役を引受けていられた。併、彼ランドホーム氏は、その少年時代から、他の何物よりも船について人から聞かされることと、船を見物するのが大好きであったので、暇さえあれば、その色々の変った珍しい船を見物するのを楽しみとされていた。が、後では、立派な船が [135] 入港していると云ふことを聞くと、学校を休んでまでも愛蘭の波止場まで見物に行き、学業を怠って父から詰責されたこともあった。それでもランドホーム氏は船に取憑かれでもした様に、知らず知らずの中に全氏の足は波止場の方へと向き、船を憧れる心は益々好奇心と、寧ろ研究心に燃え上がるばかりであった。だから、全氏は、父の目を盗んでは、尚も船を見るために学校を休み、波止場に行つて船員等と遊んでいたところを三度とも、この厳格な父の目に止まり、父の怒りは解けず、遂に三度目には昔からの英国の風習として上下を問はず、全氏は勘当を言い渡されたのであった。この時十五才であった全氏を哀れんで、優しい母が歎願されたのであったが、その甲斐もなく全氏の勘当は許されず、「可愛い子には鞭で育てよ。」と欧米の教訓通りに実行されたのであった。そこで、ランドホーム氏は、仕方なく両親から貰った英貨五ポンドの金子を所持され、飄然と [136] 全氏の家を出られ、全氏の足の向く処は、やはり同じ波止場であった。全氏は波止場に来たものの、未だ十五才になったばかりの全氏は、

父に勘当を受けたショツクと、これから先の自分の行末を考へ、思はれる時、いかな全氏も途方に暮れて、誰に相談する街も知らず、ぼんやりとその場に立ち止り、途方に暮れられていた時、幸にも大型汽船が波止場に繫留しているのが目に止られたのであった。全氏はその船に引附けられる思いで、そして、持ち前の元氣な跣歩りで、その船の脇に歩を進めて行き、その船の船員らしい人に、「自分はこの船のボーイでも何んでもして雇いたいから、船長に一度会わせては下さいませんか。」と熱心な氣色を顔に表し要求されると、その船員は親切者であったのであろう。何の揶揄ふところもなく全氏をその大型船に引連れて行き、船長に全氏を会わせ、全氏の要求を簡単に説明してさえやったのであった。一つには全氏の徳でもあったのは、全氏の風貌や [137] 風采が、普通の平凡な少年よりもどこか違った品性があり、又至って美少年でもあったので、遂に船員が好意を持って案内したのであろう。船長室には幸い、全夫人もそこに居合せていたので、ランドホーム氏に取っては一層好都合でもあった。と云ふのは、全夫人もランドホーム氏の品位のある人柄に満足な目で迎へられ、全氏のために雇入れることを船長に助言さえして呉れたのであった。船長は、然し、慎重な態度を示され、「どうして未だ、少年の身で、船に乗る氣になったのか。」と全氏に一応その説明を求められたのであった。そこで、全氏は、現在までの成行を熱心に話された後に、「私は生れ附、船が何よりも大好きでありますので、時々学校を休んでまでもこの波止場に来て、色々の船を見るのが楽しみでした。」と一寸言葉を切つて伏目になられたのも両親や兄妹の懐しい面影が、急に眼中に浮んだのであろうか。涙ぐみながら、「そして、二度目ま [138] では学校を休んだことも父は許して呉れましたが、三度目には遂に父から勘当を受け、こうしてこの船に乗組員としてお願いに上がりました。」と云い、「どうか、私で出来ることなら何でもして、骨惜みなく働きますから、雇うて下さい。」と一所懸命になって、誠実を顔に表し願はれたのであった。この船の船長も立派な紳士であったと見えて、物解りが良く、事情を了解され、一度この少年を試用して見ようと決心されたのであった。又一方には、全夫人も先刻から全氏の純情と容姿に魅せられていたのと、全夫人も一人の同年輩の男の子があるところから、少年同士の話し相手にも好

都合であると、遂に船長夫妻が相談し、船長室附のボーイに全氏は採用されたのであった。そこで、一応全氏は、職が決まると、誰よりも先に一心不乱になって労務の傍船に就いて研究を怠らず、勵まれ、幾多の困難と戦いながら職務に従事されている中、船長が或日、「ボーイから水夫としての修業も [139] 船で成功するためには必要であるから、その水夫の務めを今日から実行しなさい。」と船長が全氏を転職させられたのであったが、全氏は何をするにも船員の氣に入る様職務に努力されている中にも、我儘な船長の子息に、時には無理な事を云はれたり、要求されたりして、虐められる時もあったが、良く忍び、耐えられ、船員生活を続けておられたのであった。或時、船長が、全氏の真面目な勤勉振りと意氣とを常に注意されていたことと、人の頭に立つ立派な人の眼力は尊いもので、全氏の人柄を見極められて、遂に船長は親切にも、全氏を商船学校に自費を投じて入学させられることになったのであった。そうして、船長の考へでは全氏を一廉の船長と成功させ、全氏の親元に一度綿を飾らせたい慈悲心から、全氏を入学させることを決意されたのであった。そこで、ランドホーム氏は船長の好意を感謝しながら職務に忠実であった時と同様に、学業にも勵まれている中に、成績も優秀で、商船学校を卒業 [140] され、再び全船長の元に帰船されて、全船の職務に従事されている中、一・二回船長の好意で、実地に船長の代務に廻され、茲に始めて船長として自身舵を操縦する身となられたのであった。そして、上々の成績で船長の任務を果されたので、船長は非常に我が事の様に喜ばれ、一度ランドホーム氏の親元へ全氏に帰宅する様に命ぜられたのであった。ランドホーム氏は二・三日の暇を貰い、全氏の懐しい家庭を訪問された時は、実に父から勘当（ここから第 3 卷）を受けて以来、十年振りの歳月が経っていた。

ランドホーム氏が久し振りに我家の戸をノックされて、第一番に静かに出迎へられた人は、全氏の脳裡に甞に忘れる事の出来ない、彼の懐しい母親であったのであった。ランドホーム氏は、最老年老はれた母親を感慨深氣に、目に涙さへ浮べられ、暫くの間見詰められていると、母親は未だ、無言で見詰めているこの立派な紳士を、何人なるか見当がつかない様子で、「どなた様でいらっしゃい [141] ましたでせうか。」と穴の開く程全氏の顔と最

早一層立派な風格と容姿とを、怪訝な顔して見詰められていたのであった。ランドホーム氏は静かに微笑しながら、「私ですよ。父から曾て勘当を受けて出て行ったランドホームですよ。」と始めて全氏が明された時の全氏のこの愛しい母親は、只茫然自失せんばかりにポカンと口と目を開かれ、その立姿の儘思はず、床に尻餅を搦かれたのであった。それ程ランドホーム氏の魂の錬磨と、天性の容姿から来る侵し難い風格に成人された全氏は、実の母親さえ見覚える事の出来ない程な立派な人になって帰られたのであった。全氏は、二三日我家へ落付かれ、両親、兄弟の前で、全氏の現在まで辿られた苦難の道や、船長の好意で船に働かせて貰い、その上、商船学校まで卒業させて戴いて、やっと船長の免許状を獲得することが出来た話をされ、皆を慰め勵まされたのであった。その頃から、ランドホーム氏の兄は身体虚弱な身の上に、肺炎を患って [142] 病床にあり勝であって、全氏の家庭も、全氏が少年時代の様な裕福な生活でもなく、家計も不足勝ちであって、只頼りになるのは少年時代に腕白者で、両親に心配ばかり掛けておられた、このランドホーム氏のみとなったのであった。誠に人の運、不運は、「人間万事塞翁馬。」で、何時如何なる事で、この世の禍福が生ずるかは、人の運勢ほど、計り知ることは出来ないものである。ランドホーム氏はその後、欧州航路を振り出しに、世界航路の幾万屯と云ふ大船の船長を経験され、遂に東洋航路にまで進出されて、全氏が晩年に至り、前述の長崎県西彼杵郡大草村の寓居で、一九一八年九月二十日、即ち大正六年九月二十日に六十四才で永眠されるまで、全氏は本国の愛蘭の実家へ、その当時の金子で、金三百円也毎月送金されていたのであった。斯う云った真の人格者である B・J・ランドホーム氏が、故郷の愛蘭国から世界各地に船長として船と共に一身体となつて寄港されていた時の船員の奇禍や、可笑しかつ [143] たこと、面白かったこと等の逸話を、トヨ女の宅を楽しみにして訪問される度に、座談的に話して聞された中の二・三を茲に紹介すると、次の様な事があつた。B・J・ランドホーム氏が青、壮年時代に、世界廻航の船長として航海の途にあつた或日のことであつた。全氏が、アトランチック海の某港に寄港されていた時に、全船船員の一人が、全船の胴体を、ペンキ塗替作業中に足場に腰打掛けて、熱心に作業している時、予期しなかつ

たとは云へ、突発的に大鯨の襲撃を受け、アット云ふ間もなく、彼の船員の腰から全下部を喰いちぎられ、哀れにも海水の底の藻屑と消え去ったこともあった。又、或時は、各国の港に船が寄港する度に、ランドホーム氏の船長室へ待ち構へている様にして、突然何の前觸れもなく訪れる、大膽極まる各国の美人連（欧米諸国では、金のだぶつく者を目的に、常に紹介もなく面会し出入する貴婦人の様な美人連であって、世界観光船や遠洋航海船の大船に、夫婦気取りで雇はれ、旅費や小使 [144] 錢一切を男に負擔させ乗り込む美人連や、あらゆる交渉を持たむ私娼型連中である。）が、ランドホーム氏の室を訪れたのであった。そんな美人連が船を訪れると予期していて、全船員等が、岡焼半分は船長室の真上の床に小穴を穿って、全室の下の船長室を覗き見る習性があった。ランドホーム氏は氣転の利く、利発な物慣れた人であったから、その度に何時も、斯の様な無作法な船員に対しては軽く詰責されるだけで、その穴を塞がせられていた。ランドホーム氏は、此れ等の私娼連が、媚びを含んだ態度で船長室を訪れる様なことがあっても平然とされて、普通の来客と変りなく落ち着いた話振りで茶菓子や酒類など饗応され、雑談され、体よく送り帰えされるのであった。ランドホーム氏が何故に彼の婦人連を非常に警戒されていたかと云ふと、成程、彼女等の容姿や容貌は衆に優れ、立居振舞や談話等にも感受することが出来る様に、あらゆる教養を身に付けていて、自信満々たる態度を表す [145] ののであるが、その反面彼女等の心底には何時も悪鬼の如き、所謂「外面如菩薩、内面如夜叉。」と云ふよりも、「人面獸心。」の類に等しい性格を貯へている婦人連である。そして、物事を表現するのに、怒喜哀樂の情が極端であって、一度怒氣を表はす時は相手次第では殺人も易々と実行しかねない種類の女性が多く、この文明の名の基に、何処の国々でも男女を問はず、跋扈していると云ふのは難はしい世の中ではある。この様な種類の女性関係の記事等が、欧米等の亦新聞の種になって新聞紙上を賑はしている連中か、さもなくば、「ギャング」等の仲間事件等である。著者が、十七・八才の頃、即ち大正二年頃と思ふが、母トヨと共に或日曜日にランドホーム氏邸を訪れた時のことである。その日は特に、空一面に晴れやかに澄み渡っていた初夏の候で、大草村の内海は静かに凪いで、ほんの申し訳の様に微風が、

山々を背景にした大草海岸を吹き戦いでいて、氣分が爽快に打れる絶好の日和であった。

[146] だから、正夫も遂に全氏の寓居の海の前方に浮出ている、丁度琵琶の形に似てるところから琵琶島と名付けられたのであろう、その島へと二艇櫓のボートで遊覧して見度い衝動にかられたのであった。予てから、ランドホーム氏邸の直ぐ下側の脇に小型モーターボートと共に繋留されていた全氏の常用の二艇櫓のボートで一渡り、その琵琶島周辺を漕ぎ廻って帰宅の途中であった。ランドホーム氏は全氏の邸宅の窓から、正夫の漕ぎ振りを前から望遠鏡で注視されていたと見え、「ミスター正夫！ボートの漕ぎ方と操縦の仕方を教えませう。」と呼びかけられ、全氏の屋敷の下の直ぐ脇の浜辺まで来られると、正夫と交代され、待ち構へていた様にそのボートに乗り込まれ、全氏の夫人とトヨ女の見ている前方の海面で、全氏独特のボートの正式操縦方を教示されたのであった。その時の全氏の卓越した櫓の手捌方は、曾て正夫が見聞したこともない程な全氏の技倆が優れていたことであった。

[147] その時のボートの操縦振りは、老年とは思へない程に易々としていて、誰でも無意識の中に恍惚感に捕へられる思いであった。その全氏の曲技的とも思はれるボートの操り方は、そのボートを、丁度一定の海面に停止させ、ボートのオールを左右に逆に取られたかと思はれる中に、その手に力が入ったのかオールは跳躍して、恰もコンパスを使用する時の様に易々として、幾回も漕ぎ廻されて見せられたのであった。間もなく全氏は、正夫をそのボートに同乗させられて、櫓の漕ぎ方等何にくれとなく親切に指導されたので、正夫は此れも一つの良い学問を受けた思いで、全氏に礼を申すのを忘れなかった。そのボートの指導が終ると、直に全氏の宅の応接室に案内され、小憩の後に全氏の予てから蒐集に係る世界のあらゆる珍らしい、そして有益な雑誌や、貴重な医学解剖学や、世界人種と動物との身体の比較組織の解剖寫眞の医学雑誌等の分厚な珍書の閲覧を受け、夕食後トヨ女と共に又の [148] 再会を約し、辞去したのであった。或日ランドホーム氏が、長崎の町々を散策されていた時であった。全氏は自分の前方からトボトボと元氣のない様子で来る可憐な一少女に目を止められたのであった。と、その少女が、全氏の目の前に差懸ったのを見れば、全女

の貧弱な着物を着ているのに似はない、可愛らしい少女であった。併、その少女の着物はと見れば、貧弱さばかりでなく、その着物の裾前当りが切地が足りないのか「開い。」と片言交りの日本語で優しく諭され、金五円也を見知らぬこの少女に恵まれたのであった。

著者は、斯うした、その頃の得難い人格者であったランドホーム氏の人柄を他の人々と比較しながら、何時も脳裡に刻み込まれていて、今の世の何不自由なく暮らしている人でも、正直に云へば、只見榮的に外では公德心等の滋養の教へを宣伝し廣言を吐く人の多くあるにも拘らず、内にあっては、只自己本位に振舞い生活する人の多い俗社会である様に見受けられる [149] のである。それに反して、このランドホーム氏の如き真の慈善心の強い人格者は稀れであり、全氏は若年から人一倍苦勞を重ねられ、成功した人に似ず、良く弱者を憐れみ、強者に打ち勝ってその苦勞を生かされて、金子では変えない品位と人格を築き上げられたことに、常に、深く、敬意を表すことを今尚著者の魂から消え去らせることの出来ない思い出ではある。著者も斯う云った美談と誠実な人に接することが出来たその感化かも知れないが、著者が未だ独身時代で、三十才前頃であったと思ふが、著者の習性として食後必ず、運動の為に散歩するのが習慣になっていた。そこで、著者が町々を通行する時に、三度に一度と云っても云い位に家庭の教育が良い様子の子少年少女が、人懐っこい顔して、著者にペコリと可憐な頭を下げ、挨拶する様に、「小父さん。」とか「今日は。」とか云って笑顔を見せられると、遂に著者も童心に返って、独身生活の常で、何時もポケットにキャラ [150] メルやドロップを所持していたので、それを二・三箇その子供等に良く與えて悦に入ったものであった。そうした子供等の優しい笑顔を見るのが、一人ぼっちの著者としては、無性に嬉しい愉快な感情に捕はれるのであった。

茲に附記して述べることは例外ではあるが、著者が中学初年生の頃、母トヨ女の旧友で、その頃長崎市爐粕町通りの県立長崎図書館正門下通りの脇に住居されていた、島内イシ女の息女のオルガ女が、英、佛、独の教授の看板を掲げ、学生や一般人にも指導されていた。このオルガ女の父君は、元露国帝政華やかな時代には、全国で大牧場主として知られ、又銀行支店長も兼ねられて、相当な事業を営まれ、安らかな生活をしておられた。が、彼

のロシア大革命の犠牲者となられ、オルガ女の嚴父の一家は全滅の憂き目に遭遇されて、その父も兄も行方不明になられ、このオルガ女と母堂イシ女と共に身を以て長崎に帰還され、一度トヨ女の住居の東山手 [151] 町に著者も居合せた時、訪れられた事があった。このオルガ女は、長崎住居時代から、女流作家の吉屋信子女史とも親交があった。と云ふのは、丁度、長崎—上海航路の聯級船内で、著者は全船のボーイから、全女史が乗船されていると云ふ事を聞き、早速全女史の一等船室に伺い、全聯級船のハガキ上に「サイン」を要求に行ったことから、偶然にも彼のオルガ女の話が飛出し、著者もオルガ女と親交があること等全女史に話した処、非常に全女を懐しがられて、約半時間餘も両人は談話をなして、別れる際に全女史は、「今一度、オルガ女に再会し度い。」と著者に申されたことが、今だに著者の耳に残っているのであるが、そのオルガ女は最早六十五・六才にならていることと思ふが、その当時可愛らしい子息が一人あったので、その子息も成人され、現在は立派な人物となられ、オルガ女と共に暮し、生活しておられるであろうが、時勢の変遷と共に、今は何処に住まはれていることやら知るよしもないが、風 [152] の便りに京都方面に転出されているとのことだけで、皆目見当がつかなくなつたが、トヨ女の親友であった人の息女の島内オルガ女の面影を偲び、今はなき全女の母堂のイシ女と著者の母トヨ女に代り、一言茲に附言して置く次第である。

終局篇

明治三十五・六年の頃のことであった。丁度その日は正月元旦で、昨夜から降り注いだ雪は、その朝はからりと晴れ渡つてはいたが、肌寒い朝のことであった。長崎の町々も正月飾りの疲れと、正月を迎へた祝い酒に酔い耽っているのか、町中はひっそりかんとしていて、如何にもノンビリとした風情が、長崎を象徴しているかの様に思はれ、朝の陽光がくっきりと四方の山々に反映し、長崎の雪景画を出現させていた。正夫は、町々の中央を流れる中島川の川沿いにある母トヨ女の生家の十坪足らずのコジンマリした二階家で、全女 [153] の父が鉢植から育て上げたといふ幅一呎餘ある甘柿の木が、直ぐ家の側の石橋の間の一坪餘の空地に、丁度電線柱と並行して栄へているのが、いかにもその家の印象を深められ、懐し

い、良くその実を食べた柿の木があったことを、少年時代の思い出として忘れることが出来ない。

その柿の木の周囲が竹垣で囲まれていて、その垣の取替時になると、トヨ女の父に何かと正夫は、垣の修理のことで手伝はされていたのであった。そして、秋の長崎諏訪神社祭りの頃になると、その柿の実が、人も羨むほど鈴生りして、小さいが餘り堅くなく、柔かくもなく、歯当りの良い風味のある柿の実であった。その懐しい思い出の柿木のある二階建の家で、正夫は十四・五才まで、トヨ女の両親やその弟妹の大人の仲にあつて、愛育され成長して来たのであった。

が、正夫が丁度五・六才の時、突然、祖母に当るトヨ女の母ヨシ女が、その家の二階から呼ばれて行って見ると、「これを着て見なさい。」と云はれたのを見ると、正夫は未だ、子供心 [154] にも誰れも此れ迄着ていたのを見たこともない様な素晴らしい色合の、然も手觸りの良い、子供用の外套を手渡されたのであった。併、正夫は、突然のことで、それを直ぐに着るのを躊躇いながら、祖母の慈愛に満ちた顔とその品とを眺め廻しているのみだった。そして、如何して、こんな立派な外套を自分のために特別に買って下さったのかどうか解らなかつたので、「お婆さん！これ、どこから貰ったの。」と尋ねるより外はなかつたのであった。それは、子供心にも、こんな立派な物を買ふだけの餘裕のある祖父母の家ではなかつたのを氣附いていたので、遂に尋ねて見たのであった。それに、母トヨ女も、上海で結婚されて、暫くして全町に杉本家の所有家屋とは云いながら、松木氏と結婚生活早々でもあり、その時分に八十円の月給を貰っていたとか云はれている全氏とても、交際費その他の入費が随分嵩むとか、トヨ女が愚痴めいたことを全女の両親に話しておられたのを薄々聞き知っていた正夫としては、その高価に思はれる外套を、特に正夫のために買ってや [155] られたとはどうしても、子供心にも思はれなかつたのであったので、遂に尋ねざるを得なかつたのであった。そして、トヨ女の両親も亦、予て、R. H. パウルス商会主の孫であることを、母トヨ女から厳しく口止めされていたと見えて、細い目を瞬いて眼鏡越しに正夫を見詰めながら、一寸當惑な顔をして言い淀んでおられる様であったが、「そんなことは心配しないでもよいから、これを着て、隣町（隣町と云つても、この家の脇の石橋を渡る

と、直ぐ右角に可なり廣い敷地に建てられていた説教所のある本大工町のこと。）の黒住教にお参りして直ぐ帰って来なさい。」と云はれたので、物静かな雰囲気と祖父母の慈愛の下に大事にされて育った正夫は、環境上従順で、わりに我儘な性質ではなかつたので、それ以上尋ねるのが、祖母に対して氣の毒にも思はれたので、只「ハイ。」と素直に頷き、紺の着物の上にその外套を自身で着て見ると、身丈も注文した様にすんなりした色白の正夫の身体にぴったり合 [156] い良く似合つた。正夫は祖母に云はれた通りに、それを着て帽子を被り、早々にして戸外に出ると、町内の家々や直近に見える寺々の屋根の上や樹木の上に降り積もつた雪景を眺めながら、高下駄の歯が雪に埋まり、雪道で転ばぬ様に注意しながら、今日は特に晴々とした氣分に耽り、石橋を渡つてその黒住教社にお参りして、お婆さんに云はれた通りに、良く神様にお礼を云つて参詣を済したのであった。併、子供心と云ふものは誰でもが、それ自身物珍らしく然も人にも褒められ度い欲望に駆られるのは、大人以上である様にそしい、只純心な氣持ちを以て嬉しい盛りである時代なので、祖母に云はれた通りに、直ぐ正夫は帰宅する積りであつたが、遂に正夫の足は祖母の近くから素通りして、今の正夫の心境は、他の人々にもこの喜びを別ち與へ、共に喜んで貰い度い衝動に駆り立てられたのであった。その当時は、母トヨは、長崎大浦のパウルス商会の家族から離れられ、支那上海に渡り、全市で、[157] 生活戦線に活躍中に縁あつて全市の日本財閥の経営に係る某有力物産会社の要職にあつた松木氏と結婚され、間もなく長崎市に全氏の転任と同時にトヨ女も亦、全女の両親の家の町の少し離れた全町に世帯を持っていられたことは、前述の通りである。そのトヨ女の住まれる家は、可なり廣い屋敷で、七十五坪からある土地に新築され、表通りに面した二階建と中庭の左端を通り抜けて行くと、裏が平家建で、風呂場も完備された、割合に住心地の良い住宅であつた。その住宅の表通りに面した二階家は某藝妓屋に借し、裏家の方にトヨ女夫妻が住はれていた。正夫はそのトヨ女の住む家を訪問したのであるが、その時は、松木氏は会社の幹部の人々の家庭へ年賀の礼に行かれていて不在で、丁度、母トヨ女と女中一人と在宅中であつた。正夫が訪問すると、直ぐに母トヨ女が、自身導き入れ、座敷に通されたのであるが、賢い

が神経の鋭い意地っ張りな母トヨ女は、正夫の着ている高級な外套の出所を [158] 直感されたと見えて、正夫が母の前に、正月の挨拶をして座すと共に、「そのマントウ（外套）はどうしたの。」と第一声を放たれたのであった。そして、その物柔らかな母の問いの中にも、何んとか厳しい語調のあるのを正夫は感じ取ったのであるが、素直に、「川端のお婆さんが、只これを着て黒住様にお参りして来なさいと云ったので、着て来たの。」と返事をしたのであるが、正夫は子供心にも思ふよう。

「母は今まで、物に飽きる程、立派な物ばかり見たり着たりして来た母が、どうして立派な物と云っても多寡が、子供用のマントウをそんなに気にすることがあるのかと、正夫は情無い思いで、心が一杯になって思はず、自分も涙汲みなのであった。母トヨ女は、正夫がそれっきり黙って了ったので、突然、「こんなものは直ぐ、脱いで下さいなさい。母さんが、他にもっと良い物を買ってやりませうから。」とさすがに狼狽の色を顔に表はされ、でも穢らわしい物でも剥取る様にして脱して仕舞はれたので [159] あった。未だ年輪も行かない正夫に対して、如何なる理由で、斯うも無愛想に母が申されるのか、正夫に取っては解る道理がなかったのであった。正夫は子供の頃から、祖父、R. H. パウルス氏の性格を受け継いでいるのか、餘り物にこだはらない性質であったので、是非ともそれが欲しいとは思はなかったが、どうして、この優しい母が、急に正夫に対してこの様な態度を取られ申し渡されたのか、どうしても正夫の小さい頭脳の働きでは判断が盡く訳がなく、只肌寒い雪の日に無慈悲なほど、正夫から外套を取り上げられたか、正夫の脳裡にはこの時から少しづつ、自分が如何なる立場の生れであるかを疑い思ふ様になったのであった。そして、正夫に取って貴重な、始めてとも思う斯様な立派なマントーを着るのを母が拒まれたかと云ふその事由を、正夫が小学校に通ふ様になってから始めて、偶然の機会から正夫の系統を理解することが出来たのであった。そして、この時の [160] マントーの出先の件について、母自身の考慮で処置されたことから、正夫の将来の運命に重大なる錯誤を来し、狂はせる様な不運な結果となったのであった。この事は事実、正夫が成人して後に、母トヨ女の秘事として、正夫に対し申開をされたことであるが、それは、「私は感情的にあのマントーを、でも涙を呑んでお前か

ら取り上げ、着せなかったことは、重々過失であったが、私がパウルス家から去らなければならなかった原因は、周囲の者の悪辣な手段方法が憎く、そしてお前が段々無事に大きくなり成長して行くのを、お前の祖母のサト女が、垣間見て欲しくなったので、今更得手勝手な氣持でマントーと帆前船を送り、人の心を釣ろうと計ったので、母さんはそれが心から憎く、腹癒せにそれを返してやったの。」と云って、その当時のパウルス家の葛藤を思い巡らされ、物語られたのであった。船木サト女としては、若し母トヨ女とその両親の家族が、今までの誤解から生じた葛藤なり感情的経緯を水に流し、心良 [161] くその送物を受納して呉れたら和解したと着做し、船木サト女の籍に入れ、全女の相当の財産を継がせる決心であったのである。正夫のためには正統な祖母船木サト女が、トヨ女を普通の平凡な女性として一時の疑惑から誤解を招いた事から一大過失を生じ、両者の仲にあつて親任あるトヨ女を妬み中傷し、そのパウルス家両舅姑との仲からトヨ女を裂き、全女をパウルス家から放逐しよう企んだ、人面獣心の輩があつたのであった。正夫の祖母船木サト女としては、自身のためには正統なる可愛い孫に成る可く、否是非、自分の動産、不動産共約百万円からの財産を受け継いで貰いたかったのである。一時は前述の如く、サト女も世に良くあるお家騒動の例に洩れず、周囲の者の悪辣な手段を信じ、トヨ女を假りそめにも疑った事を後で、如何に後悔されたか計り知れないものがあつた。併、その時は、「後の後悔先に立ず。」の如く、トヨ女は既に上海市の人となっておられたので、サト女としては如何んともする方法がな [162] かったのであつた。又假令、サト女一家がトヨ女を探し求めたとしても、実力あるトヨ女の感情と意地とを翻すことが不可能であつたかは、トヨ女に接した者は皆周知の事実であるからであつた。そして、その中に風の便りで、トヨ女が上海で松木氏と結婚され、間もなく長崎に移住されたことを聞知され、サト女がトヨ女の両親宅に正夫の為めの贈呈品となつたのであつた。正夫が、或程度常儀が備はり、見聞したところを総合して判談するに、斯う思ふのである。母トヨ女が、船木サト女と仲直の記しとして、正夫の着るマントーと、祖父R. H. パウルス氏の記念品の木製帆前船とを、トヨ女が昔の遺恨を思はれ、邪慳なほど、トヨ女の妹に命令的に船木サト女に突返された、そ

の真情は解る様な気がするが、又一面には、祖母サト女としては、全女の将来の希望も失い、その夜は眠られなほど悶え苦しまれたことであろう。併、母トヨ女としては内心餘りに男勝の性分で、教養も人一倍身に着けていられたので、却って或意味で [163] は両者間に妥協性を失ふ様な結果になったのであろう。と云ふのは、トヨ女が相手にあらゆる礼節を盡し接するのに、不尊な態度に出られ、人格を踏み躪られたかと思へば、誰れしも残念で、心から腹が立つのは当然ではあるが、昔から言い伝えられている通り、「ならぬ堪忍、するが堪忍。」とは云ふものの、扱て実行するとなると、昔からの例もある如く、なかなかその場合、あらゆる心情に支配され、実行出来ないのは困難なことではある。そして、賢明なトヨ女が、この場合情演を逸し、断じて許すことが出来ない破廉恥極まる中傷者の行為と、それに惑はされた者への反感が、餘りにも大きかったことは、そこまではトヨ女の心の奥に潜める神秘的尊い感情は、お互に知るすべもなかったのである。併、折角船木サト女の斯うした改心と後悔を痛感され、折れて出られた行為を受けられるべきではなかったろうか、最早五・六年も経った今日、心良く全女の意のあるところを悟られ、受け入れられていたならば、船木家にも杉本家に取 [164] っても、将来に幸福を招ねかきしめる結果となったかは、その幼児者に対する後見人の真面目、不真面目の如何んに関することで、将来の幸、不幸は認識することが出来ない様な気がする正夫であった。

何故ならば、人間真理の不可解な事の多いこの世の中では、如何に表面的に幸運な家庭に恵まれている様に見える人でも、未だ、幼い子供の指導や後見に当てられる者が、餘程しっかりした人格者で、実直な人でなければ、色々の方向から子供の養育的、教育的のための物質的補償があっても、著者の知る限りでは、その物質的子供の補償を他に利用され、結果的に「無」に終る様なことが、この人類社会の歴史に証明されている如く、この社会の悪い習性を消滅させない限り繰返すことであろう。正夫が、丁度小学校に通学する様になって間もなくのことであった。正夫はトヨ女の親友の某氏宅に時折遊びがてら訪問していた。全氏は特に正夫を可愛がり、正夫の幼児の寫眞を室内に飾って楽しんでおられたほど、お人 [165] 好でもあった。それで、或日、正夫が遊びに一人

で訪れると、待っていた様に、正夫に、「これから本当のお婆さんの家へ連れて行くよ。」と云って正夫を伴はれ、祖母の船木サト女に紹介された時から、正夫自身始めて、自分のこれまでの奇しき運命の基に生れ出て来たかと云ふことが、その時は臆氣ながら知ることが出来たのであった。そして、全祖母の居るパウルス家へ出入する様になってから、トヨ女やトヨ女の両親と全女の弟妹からも、これまでの両家の経緯を徐々に打明けられ、了解することが出来たのであった。そして、トヨ女の両親は、全女の氣質を親として百も承知していられたので、全女を信じ、成行に任せられていたのであった。サト女とトヨ女の性格としては、精神的にも行動的にも、將又修業的にも両者の生立から、夫々の趣味趣向による修養が相異している点は、他の人々の立場でも同様であって、サト女は前述の如く十五才の少女時代に R. H. パウルス氏に縁附、幸運にも只一つの特長 [166] として佛心の心掛けがあった関係上、主人に信用され、五十五才では若死であったと云ふものの、聖人君子でない限り、人は皆俗人の域を免れることは出来ない。であるから、只単に世間一般の裕福なる家庭人の持つ多少我儘な氣質と云ふか、性格と云ふか解らないが、その点をその頃のサト女としては、環境の変化と云ふか、大いに持ち合せられていた。併、人には各々長所、短所を所有している様に、兩人中何れが、是か非か理解に苦しむ次第である。兎に角、血縁に繋がる正夫としては、成人するにつれ、両者間の過去の、他人の中傷による誤解から、紛糾なり物議を醸し出したことを、何かの因縁事とは云いながら残念に思ふこともあるが、又一面、「生みの親より育ての親。」と云はれている如く、身近な愛情の点については、やはり、乳児から育てて貰った母トヨ女の両親に対する愛情は、正夫に取って絶大なものであった。正夫が小学二年生の頃、祖母サト女の住む大浦の母トヨ女の親友が、突然正夫を全サト女に紹介され、大浦のパウルス商会に出入する [167] 様になってから、正夫は全商会家族に纏はる色々の幸、不幸を味い、その中、正夫が小学四年生の頃には、父に当る J. R. パウルス氏が死亡し、全氏が生存中にも、正夫はお互に父子でありながら一言も言葉を交し合ったこともなく、又その機会を誘致して、歓迎して呉れる者もなかった程、母トヨ女が全商会の家族の一員として暮していた時の、家族の融和性と云ふもの

が失はれていた時代であった。それに、正夫の父の J. R. パウルス氏には、既に他郷から第二番目の妻が迎へられていたことでもあり、正夫の祖父 R. H. パウルス氏が母トヨ女に対して約束された如く、トヨ女が全商会から離れ去った後は、正夫の父と新に迎へる父の妻とは全居を許されず、同じ大浦にある全商会の別館に世帯を持たせられていたからであった。それほど、母トヨ女は、商会主の、正夫のためには祖父の R. H. パウルス氏から信任が厚ったのであって、それだけでも母トヨ女は幸福であり、又、全女も正夫に祖父 [168] の人柄を何時も「お前の祖父パウルス氏は、何事も理解がある立派な人格者であった。」と話されていた。又、祖母サト女としても、正夫には母トヨが存在しながら正夫の父に会わせ、その上、新婦の前で父子を名乗らせても、今更如何ともする方法がなく、その儘放任されていたのであった。それに、父としても、新婦の氣兼ねされてか、又は母トヨ女に対し遠慮されてか、祖母サト女が揶揄ひ半分でか、一度全商会に久しぶりに来訪し、事務所で事務員と何やら話されていた時、全サト女が正夫を連れ、全事務室に入られるや否や、正夫は子供心にも可笑しい位その父が、狼狽気味に正夫の顔を見られたかと思ふ中に、すぐごと反対側の入口から外出された時の様子は、全容正夫の脳裡に印象づけられていて、世にも斯うした不思議な果敢ない親子の縁と云ふものがあるのかと、諦め切れないものがあつた。サト女もその時は何気ない風で、始めて正夫を父の前に連れて行かれ、その父の心情を試めされたのかも知れなかつた。と、正夫 [169] は後で斯うも思ふのであつた。正夫が斯うした雰囲気の中で全商会に入入していた頃、丁度明治四十年十一月十二日にその父は三十七才の若さで、父の両親よりも二年早く早世されたのであつたが、その父の死と同時に、間もなく父の新婦はその故郷へ帰郷されたのであつた。そして、不幸は重なるもので、前述の如く、長崎市本蓮寺内で、サト女も亦、脳溢血のため、明治四十二年五月六日に五十五才にして永眠された時は、正夫の母トヨ女は既述の如く、朝鮮の奥地の某石油会社の支店長として転任されていた松木氏とトヨ女は同棲されていた時であつたので、主に母トヨ女の両親が、正夫に代り船木サト女の遺言の遺品、その他の処理に当らされていたのであつた。そうして、大部分のサト女の財産は、全女の縁者や全女が在世中に世

話になられた親友間に餘別として分配され、正夫は、予てサト女が所持していられた衣類や、多少の金子と貴重品数点は、特に正夫のために貰い受けられたに過ぎ [170] なかったが、正夫としても、サト女の存命中にも多少の金子を全女から毎度の様に、学費その他の入費として授けられていた。祖母サト女の葬儀には、勿論、全女の身辺者や友人知己が、予て正夫がサト女の正統な孫であることを認めていたので、喪主として正夫は参列させられたのであつた。この祖母サト女の葬式に参列された諸氏は、数百名に上り、延々と長蛇の列をなして、各長崎の日蓮宗の主った僧が参列され、皆の哀悼の表情の中にも、サト女の徳が光り輝いていた様な壯観を呈していた。正夫が譲り受けたサト女の貴重品中には、何物にも代へ難い遺品があつた。それは祖母サト女の主人である R. H. パウルス氏から予て全女が結婚記念として受継がれていた婦人用金鎖付懐中金時計であつた。その時計は、蒔絵の小箱の中に入れられ、その鎖の長さは鯨尺で正夫が計った時は、丁度三尺五寸餘もある金と銀との合金作であつた。その金鎖に附属している横縦四、五寸の厚さもある平打の金環の中央に大粒のダイヤモンド、その周囲に小粒のダイヤモンドが入れてあ [171] り、その環の両脇に金總が附てある見事な品であつた。これは、予てサト女が、正夫が成人の暁には、その正夫の嫁の引出物として引継がせると全女が常に微笑しながら楽し想に話して聞かせられた貴重な品であつた。

併、斯様な貴重な品は、普通人の所有すべき品ではなく、多分欧米の貴族用のこの品を祖父 R. H. パウルス氏が、或る機会に譲り受けられたものであろうと、正夫はよくその品を、トヨ女の父の昔風の戸棚に厳重に保管されていたその品を、その父に許しを受けて自分で首から肩に掛けて見て、時々一人で悦に入っていたその頃の懐しい思い出に耽るのであつた。正夫はその当時は小学六年生で、少年並の思想しか持ち合せなかつたが、だんだん上級学校に進むにつれ、今一つ、あのパウルス商会の思い出の応接室にあつた黒塗のピアノも欲しかつたが、その頃の正夫は誰に相談する勇氣も持ち合わせていなかった。それに、ピアノを貰ったところで、トヨ女の両親宅では、 [172] 手狭で置場もないので、一つは断念したのであつた。正夫は、母トヨ女もそうであつた様に、幼少の頃から餘り物資に執着心を持たず、はっきり云へば、鷹揚な

質であったから、品物でも餘程の珍しい立派な物と感じない限り、他の子供の様に好奇心を起して、失礼なほど、よく卑しい田舎者的に、教養のない者がする様に、物を弄くり廻すと云ふ動作に度々出でなかつた。只、その特々に見聞を広めることに満足して喜んでいて。それは、餘り物質欲を持つ者は、先天的下卑な生れつきの者のする習癖である様に感ずるからであった。正夫が中学を卒業、比律賓群岳マニラ市から支那上海方向へと社会に活躍していた頃であった。前述の如く、長崎県西彼杵郡大草村に住まれるB. J. ランドホーム氏が、一九一八年九月二十日に死亡されたと云ふことを、母トヨ女の便で上海で知り、母トヨ女も旧友を又失って、さぞかし落膽なされたことであろうと痛切に感じさせられ、その後は母トヨ女も、だんだん生活費に窮屈な思いをされること [173] と推察して、正夫は毎月二十円の小為替を、上海日本郵便局に行つて母トヨ女の為に送金していた。それから数年経つて、正夫の父の旧友の推薦で神戸市の米國貿易会社神戸支店に正夫は転務する様になり、その地で数年、全会社のために活躍していたが、第一次世界大戦の終結の餘波を食つて、財界、業界が不振に落ち入り、不景氣風が襲來し、全会社も一時閉鎖の区分なきに至つたのであった。そこで、正夫を他郷で長居を無用と決心し、長崎に帰り、母トヨ女と共に再び住むようになったのであるが、年月が経つに従つて生活が窮屈になり、母トヨ女の性格として、誠に尊い精神の持ち主であると云ふのは、全女は決して子供や両親に対してすら、親として如何に生計が苦しい時にも、他に求めることなく、自身の責任として、生活の遺操等假して暮されて來たと云ふ、強い精神の持ち主であったことは、全女の生前のことを思い巡らし、今更の様に正夫は痛切に感動させられるのであった。だから、正夫もその当時の母トヨ女の生活の苦痛を察して、正夫はパ [174] ウルス商会から伝つた例の金時計も、その附属の金鎖一切を母トヨ女に正夫は涙を呑んで、自身の考へで母トヨ女に提供し、売却方を依頼したのであった。その時の母トヨ女の喜び様は他に例へ様もない程感激され、正夫の手を押し戴き、「ほんとお前には濟まない。」と万感交々の思いで、只一言申され涙を流されたことは、正夫の一生の中に、只一度の全女の涙を見た感がしたのであった。それほど、母トヨ女は人に涙を見せられたこともないほど、生れつき

氣強い性格の持ち主であった。サト女が明治四十二年五月六日に永眠されてから、その主人のR. H. パウルス氏も亦、サト女の死を深く悲觀されてか、全氏の病氣も急速に進み、全年、即ち明治四十二年八月十日に遂に一代の英傑とも云ふ可き全氏も、茲に此の浮世から消え去られたのであった。勿論、正夫の祖父であるこの最愛すべきR. H. パウルス氏の葬儀には、正夫の父J. R. パウルス氏の葬式の時と同様に、トヨ女の両親宅に通知があり、正夫は直にパウルス商会の応接間に安置させられていた祖 [175] 父パウルス氏の死に顔を見せられたのであった。それは、何の苦痛も感じられないほどな安らかな永眠の死相であった。その祖父の葬儀の時は、各國領事は固より、全氏の友人、知己の参列で、歩道は埋まり、サト女の葬儀の時と同様に数百人を越える盛大な見送人であったが、二頭立の葬儀用馬車に寝棺を安置し、黒覆を施され、静々と列をつくつて多数の人々に見送られながら、全市の浦上上目覚町にある旧外人共同墓地に埋葬されたのであった。斯うして遂に祖父R. H. パウルス氏を最後に、パウルス商会は解散することになり、祖父パウルス氏の死後、正夫の知らぬ間に、全祖父は生前から正夫の学費やその他の費用にと数千円の遺言が発表され、米國領事館を通じてトヨ女の両親に、正夫の代理にその金子を伝達されたのであった。前述の如く、母トヨ女はその頃、朝鮮某市で、その主人松木氏と同棲されていたが、間もなく全氏とも死別され、その地で全氏の家庭の処理を済され、長崎に再び帰郷されることになったのであった。その頃正夫は、最早某中学に通学していたが、母トヨ女の来 [176] 崎する以前に、その祖父パウルス氏の遺言の金子の中から、正夫は予て、母トヨ女の両親に対して深く恩愛を感じていたもので、その両親に感謝の記しとして、「この祖父パウルスさんの遺言金の一部をお二人のこれまでの御恩報じの記として差上げますから、少いけれど、受取つて下さい。」と恵んだのであった。その時の両親の感激に咽ばれ、正夫の手を押し戴かれた時のあの昔氣質の善良で、物堅い優しい面影を、正夫は未だに忘れることの出来ない会心事でもあった。正夫は、母トヨ女と全女の晩年にやつと落付いて一緒に生活する様になってからも、時折、正夫はパウルス商会に、土曜日から日曜日にかけて宿りがてらに通はされていたあの楽しかったことや、父や祖父母の死に直面して、

悲しい思いをさせられたことどもを思い出し、時にはふと、正夫は昔の出来事の中の夢を見ることがあった。それは、あの懐かしいパウルス商会の二階の一室に、特に豪華な金メッキしてあった大寝台の上に、サト女と共に寝かされていて、その室の周囲の美麗 [177] な装飾を施されてある室に、今尚、現実の世界でもある様に、彷徨い続け、その朝になると、あの全商会のクラシックな二階の廊下を通過して、廣いベランダ等を散歩して、祖父 R. H. パウルス氏の手から、正夫が全氏と会ふ度に、昔の一元銀貨を二枚正夫の手に渡されること等、夢の世界に引入られることもあった。併、正夫は、斯うした思い出を懐しく心に書きながらも、正夫が成人するにつれ、結局、世の中の事は、時代の進展するにつれて、過去の思い出ばかり残り、物質的現象は忘れ勝ちになるもので、遠い昔から有名な禅僧が諭されている如く、この浮世のことどもは、「悟道」の一端として、「無」といふ一字に盡るものではなからうか。と痛切に現実直面した者のみ味い知ることが出来る教訓で、でもあろう。船木サト女が、将来の自身のためにも、亦、孫の正夫のためにも考慮されて、未だ正夫が幼児の時代に、正月年詞を利用され、正夫の外套と帆前船とをトヨ女の両親宅に届けさせられた事は、簡単に前述 [178] したのであるが、茲に、最後に、その時の両家の情景としての雰囲気を書き添えて、愈々母トヨ女が、支那上海に渡航されてからの活躍振りや、トヨ女が晩年、再び長崎に落ち着かれ、独身生活に一生を過されるまでの全女の述懐記として、終止符を打せて貰ふことにする次第である。扱て、前述の如く、丁度その日は正月元旦のことであったが、トヨ女の両親宅では、その両親と母トヨ女の弟妹が、正月の朝の遅い食卓を階下六畳の間で囲まれていた時のことであった。入口の開く音も遠慮勝ちに、一人のおエンさんと云った色白で、目のパッチリした可愛らしい娘と、別当風の一人の男が、正月用小型屏風に囲まれた名詞入の脇の方に、そっと押遣る様にして、中型木製帆前船と紙箱入の品を置いて、逃れる様にして、声も掛けずに、立去ったのであった。その氣配を母トヨ女の弟が、目敏く感じ、両人の後姿を一見したのみであったが、その弟の口から、「今は大浦のパウルスからの正 [179] 夫の送り物ではなからうか。」と話し、居合せた家族の者と顔を見合わせるのみであった。

それから、皆は顔合っていたが、その儘その送り物を入口に何時までも置く訳にもゆかず、直ぐ、座敷の方へ弟が持って来て、その箱の中味を見て、一層パウルスからの送り物であることを確認し、そっと押入の中に仕舞い込まれたのであった。トヨ女の両親宅では、その品の持参先は、確に正夫の祖母のサト女の屋敷以外にないと決論に達され、それにしても、正夫の祖母サト女に対してそれを返却して、その好意を無にすることと、如何にサト女とトヨ女との過去の軋轢があったにせよ、今更その品を返し、サト女の氣を悪し、悲しませるに忍び難い氣がするのと、正夫の将来のため、正夫にも秘密にして保管されることになったのであった。併、母トヨ女の母ヨシ女としては、そこはやはり、自身のためには可愛い孫の正夫であり、正夫の出生以来、母トヨ女から呉れ呉れも、全女が上海に働きに行く時に、正夫の養育を依 [180] 頼され、手塩に掛けて大事に育て上げられたヨシ女は、季節季節の暑さ寒さにつけ、正夫の健康と成長を楽しまれていたので、正夫に一度このサト女からの立派な送り物の中の外套なりと着せて、神様にお礼参りに行かせたい人情から、正月早々前述の如く、隣町の黒住教社への参詣の運びとなったのであった。茲に、最後の結論として、一応船木サト女の主人の R. H. パウルス商会から、その家族の一員であったトヨ女が、如何なる事情の基に全女が、惜別せねばならなかったかと云ふことと、そして、トヨ女が別れて、独自の生活を維持されていた、ここ五・六年の歳月が流れていて、最早幾分でもサト女との感情の蟠りが薄らいでいたと思はれたにも拘らず、その時からのトヨ女の残念、無念と云ふ心の感傷が、未だに融和されない儘に、折角のサト女の送り物を、皮肉の様にその日、トヨ女は自分の妹に持たせて、サト女に返却された。そのトヨ女の精神的真理状態等を前提として述べさせて貰い、その後のトヨ女の私生活に入られるまでの全女の主題た [181] る本篇の「母の残像」を終結させて戴き度いのである。

扱て、正夫の祖母サト女と、正夫の母トヨ女との間の軋轢以来、毎日氣まづい思いを続けられていたトヨ女は、全商会家族としての生活と、人生に空虚を感じられてか、全女はその儘全家族と同居を持ち続けることが、如何にも全女の潔癖と氣性が許さず、惜別せねばならなかったことは、一応尤もなことであった。併、母トヨ女が全商

会から離れ去って見ると、やはりサト女としては何か物足りない思いで暮らされていて、お互に思ふのであるが、若い時の様な血氣盛りと違って、追々四十才の半を越えんとするサト女の心境の変化に依ることながら、現在離れていても、全じ土地に可愛い孫の正夫と云ふ子があって見れば、その正夫のためにも、サト女のためにも、何時までも一度も祖母と孫との名乗り会いも出来ないことは、残念なことであつたであろう。そして、サト女は、過去十数年の間、互にパウルス商会の家 [182] 族として苦楽を共にされて来ただけに、姑であつたサト女は、今更の様にトヨ女のこれまでの内助の功が思い出され、味氣ない年月を過ぎたに反して、トヨ女はパウルス商会からの別離の悲しみに何時までも溺れる暇も餘裕もなく、忽然として意を決し、只全女の予ての教養と藝能を資本に、上海に渡られ、寧ろ自由な立場から、独立独歩の自活力を發揮され、公私共に上海の各機関から大歓迎を受けられたのであつた。その大歓迎をトヨ女が受けられた事柄は後に述べることにして、数年の後には、その地の日本財閥の経営に係る某有力物産会社々員の松木氏と再婚され、全氏が、間もなく長崎転任と同時に再び、トヨ女も長崎の郷土に到着れることになった次第も、前述の如く概略述べた通りである。扱て、過去、現在を問はず、何処の国、何処の家庭の人々としても、生活に裕取が生じたり、営業や転業であつてもその道程が隆盛で、順調に赴く時には、得てして無意識の中に、人は驕り、物は集り、種々雑多な人や物が集りたがるこ [183] とは自然の現象とでも云ふのであろう。それは、丁度、物の甘に群る蟻の様なもので、知らず知らずの間に蝕まれることも知らず、思慮浅薄な者は増長し、慢心し来つて、神経が麻痺状態になり、従つて注意力が減退する様になるのは、普通人の短所であり、狭隘な人の心の弱点の表はれと云はなければならぬ。そこで、良くお互に注意せねばならないことは、特に組織化された団体の立場では、お互に理解し合い、主従一致協力して、その道々に進むことが、肝要であつて、何事も平和裡に順調に風波の起る事もなく継続して行かれるのは、自然の理である。併、一度その団体組織化された雰囲気の中にあつて、表面的は会主から信用され、同情される様に策動し、それを利用して会主なり、その家族の有力者の懐に飛び込み、寄生虫の様に巢喰い、あらゆる組織や細胞は破壊され、家庭

は乱れ散ることは、当然の理であらう。そして、その主人の財産目的に、徐々にあらゆる悪計を廻らし、例へば、その正統な子孫に難癖をつけ、排斥してまでも [184] その主人に取り入り、我子を入籍させ様とする様な卑劣極まる策動を敢て実行しようとして、その家族に中傷する偽善者があつたとしたら、如何なることになるであらうか。云ふまでもなく、人は全智全純の神でない限り、浅薄にも、一時なりとも、その奸策に翻弄され、疑心暗鬼を植付けられるのは当然であらう。そして、一株の不快を抱くようになると、誰れしも、「思いは色に表はれる。」の例の如く、平和であつた家庭内の空氣は急に濁り、不快を覚える様になり、一大破調を生じさせることは、歴史の然らしむるところである。昔から、お家騒動と云ふものは、伝記小説等で周知の事実で、一人或は数人の有力な奸臣の陰謀策動に端を發して、馬鹿馬鹿しいまでに騒動を巻起し、善良なる諸人の犠牲者を出している事実でも明である様に、歴史が物語っている。正夫の祖父 R. H. パウルス氏の尊才に依つて、生活に餘裕があつて全商会の隆盛期には、得てして前述の様な色々な誘惑や策謀漢が、一人や二人出現したところで、この俗世界中では、[185] 當然の様に思はれるが、その奸智に長けた、猫被りの憎むべき、恩を仇で報ずる様な近親者から煽動され、遊興の味を強ひられ、導かれ、知らず知らずの中に精神的にも肉体的にも蝕まれたとすれば、何処の家庭でも紛糾や不和が生ずる時、その周囲の善良な者が不幸に落入り犠牲者が出るのは、當然過ぎる程當然の成行と云へよう。翻つて考へる時、母トヨ女は幼時から物堅い、正直一途な両親の下にあつて、兄弟姉妹の多い、九人からの子供の家庭に育ち、お互に勵まし合つて、苦勞を共にして来たトヨ女としては、一度パウルス商会の様な全盛期にあつて、華やかな生活の中にあつても、トヨ女の教養がぴったりと全女の意氣と興味を殺ぎ、居たたまれない感情に支配されることも無理からぬことであつたであらう。その上、パウルス商会の斯うした怪しい、薄靄の様な、はっきりしない雰囲気の中にあつて、共に生活を續けられていた時に、トヨ女の最初の心の打撃を受けられる様になつたことは、正夫が生れる [186] 四・五年前に、当時三才になつていた、可愛い盛りであつた、正夫のためには兄である船木熊定の急死であつたのである。その兄を、或日、乳母の不注意から、その全女

が背に抱へ上げ様とした際、全女の背から、頭を越して真倒に振り落して、その兄の頭脳の内出血を起させたのであった。その時、その兄は、相当泣き喚くか、軽い人事不省に陥ったかしたであろう。数時間人の居ない処で自身介抱して、何食はぬ顔でパウルス商会に帰って来て、誰にもそのことを知らさず、放置していたのであった。後で、その兄の治療に当った医師の話に依れば、その時直ぐに、内科、外科の治療を施したならば、完全に兄は全快したとのことであつた。その頃の下僕や乳母等は田舎者が多く、無教養者で、従つて横着者が多い社会であつたので、こうしたいろいろの不幸な事故を巻起す様なことがあつたであろう。その当時の長崎は、文明開化の波に乗つて、各国人の営業も亦多く存在していて、色取り取りの [187] 国際色豊かなカフェーやレストランド街で賑つていた。丁度パウルス商会の横町のそのカフェー街で、その乳母の事件があつたので、その側のユダヤ人のカフェーのマダムの目に止つたそうであつたが、直ぐにマダムが全商会に知らせて呉れたなら、兄熊定の事故も軽傷で済んだとのことであるが、そのマダムも多忙の時であつたので、遂に知らせるのが忘れ勝ちになり、二三日して全商会に材料を求めに来て、思いだした様にその事件を話したので、兄の治療が遅れ、取返しのかめ結果となつたのであつた。祖父の R. H. パウルス氏は、特に熊定の危禍を驚かれて、早速、長崎港に碇泊中の各国軍艦の権威ある軍医を招聘され、極力、熊定の脳膜炎の治療手術が施されたのであつたが、何分、時間的に治療が遅れていた事と、脳腫増大し多量の出血のためと、それに、幼児の事で、如何なる名医でも手を施し様もなく、遂に皆に見守れながら死亡したのであつた。この正夫の兄熊定の不慮の死後、四年目に正 [188] 夫が生れたのであつたが、この様な兄の悲惨事を母トヨ女の心境にある程度の変化を来したことは、争はれぬ事実であつた。そこで、この様な愛児の急死や、多数の使用人の世話、監督にも、毎日何かと多忙を極められていた事と、剩へ、内外からの出入の烈しい全商会関係の人々の間に立つて、蔭日向なくこの様な大世帯の世話やらで、心の疲労を暫く覚えて過されていたのであつた。併、善良なる真面目な人々は、トヨ女を教受し尊敬していたが、他方面では、近親者の中で、全商会の財産等に野心満々としている者は激しい敵意を感じて、昔から諺にもよく

ある様に、かつたいのカサ恨みと云ふ奴で、自身の器量や教養の足りないことを忘れて、他人の成功を怨むのと同様に、嫉妬心を抱く者は、全女を内心排斥を企てる者がいたのは事実であつた。そして、此れ等の悪質者の中に、トヨ女を特に中傷し、内面工作をする主謀者も、トヨ女は大体その挙動、態度で察知していられたのであつた。と云ふのは、藝術家肌の一倍感受性の強 [189] い性格であつたので、これ以上辛抱するに忍びないものがあつたのであろう。その上、当時トヨ女は、正夫を全女の体内に宿されていた時であり、それに、全女の体内の子が、夫君の J. R. パウルス氏の子でないと言つて露骨な中傷を入れた者もあつたので、トヨ女は堪忍袋の緒が切れられたのであろう。その中傷者を追求され、遂に全商会々員の中の有力者で、R. H. パウルス氏夫妻が、常にその者の家計の不足費や、その病弱な子供の医薬費等特に哀れんで恵まれていたので、増長してパウルス夫妻に取り入る積りで、トヨ女を排斥し、自身の子供等を引立て貰ひ、あはよくば、入籍させて貰う下心であつた。と云ふのは、トヨ女が去つて後で、彼等夫妻のその企てが判明されたのであつた。併、トヨ女はパウルス家を去る際、その破廉恥漢夫妻に対して、「お前もお前の子供等も、決して此の先良い死に様はしないだろう。それは、女の怨みが、如何なるものか、知らせて上げる。」と言渡され、遂にトヨ女は意を決せられて、トヨ女が思ふ様、「この様な悪心のある [190] 者が、パウルス商会内にある間は、決して此の先円満に全居することは不可能である。」と悟られ、早速、全商会主の R. H. パウルス氏にもこの事を話され、全商会から一時身を引く事を相談されたのであつた。祖父パウルス氏としても、永い間トヨ女と共に全居され、生活されて見て、トヨ女の人格と実力を良く知り過ぎておられたことではあり、今更トヨ女を手放したくないので、極力トヨ女の怒りを宥められたが、トヨ女は、一度決心されたなら後に引かれない氣性であつたので、強いて舅パウルス氏に許可を願はれたので、已むなく、トヨ女の自由意志に任されたのであつた。そこで、舅 R. H. パウルス氏は、トヨ女を市内の中央の静かな高台にある町に別居させられ、その家で正夫を出産させる様にトヨ女に便誼を計られたのであつた。それは、丁度、明治三十年の春の季節のことで、日に増し、正夫の出産の日が近づくにつれて、暇ある毎に、R.

H. パウルス氏は自身で、馬車からトヨ女とその生れ [191] する正夫のために、滋養品や食料、生活必需品、その他の必要品を運ばれ、又時としては、全氏の信用ある下僕に持たせ、何かと世話を施されたのであった。この間に、トヨ女は色々として将来の計画を脳裡に画策され、全女が思ふよう。「舅パウルス氏には誠に済まぬことではあるが、正夫を無事に生み落とし、暫の間、この家で静養させて戴いて、自身は正夫を杉本家の籍に入れさせ、トヨ女の両親宅からも別家の手續をなし、独立独歩で自活する他に道はない。幸い藝能その他諸式を身に着けているので、自信はあり、そうすることが最善の道。」と決心されていたのであった。そのトヨ女の別居生活の家の隣家は、尺八の先生夫妻の住家で、全夫妻とも至って親切者で、何呉れとなく身重なトヨ女のために用達の手伝いを受けられていた。夏もだんだん近づき、飲み物の用意も怠りなく、舅パウルス氏が運ばれるので、不自由はなく、パウルス商会自家製の花瓶のラムネは、取分け甘味で、特に清涼剤となったの云ふことで、トヨ女の弟妹 [192] や友人、知己の来訪の際に大いに喜ばれ、歓迎を受けたと云ふことで、正夫が生れると、産婆にも饗応され、その産婆が、暑い季節であったので、ラムネの馳走になるために、産後の養生の期限が過ても特別にトヨ女に奉仕されたと云ふことで、それほど、その時のラムネが美味であったそうである。

愈、正夫がその年の八月二十七日に生れると、トヨ女はその家で数ヶ月静養された後、正夫をトヨ女の両親宅に預けるため、全家に移転され、約半年の間、正夫に母乳を飲ませ、その後は鷺印練乳で育てる様、何かと正夫のことを依頼されたのであった。幸いトヨ女が、上海に渡航しても、友人、知己もあるので、一日も早く全地で、活躍してトヨ女の両親宅に生活必需品やら、その他の仕送りを致し度い旨を、懇々と両親を説得されたのであった。トヨ女は、舅パウルス氏の来訪を受けた時、改めて自分のこれからの進むべき方針を全氏に打ち明けられ、これまでの数々のお世話になったことを全氏に感謝され、惜しき別離の挨拶を交されたのであった。

[193] その時、舅パウルス氏はトヨ女に斯様に誓はれたのであった。それは、「此の後、子息 J. R. パウルス氏が、他から嫁を娶る場合は、全舅のパウルス家には絶対に同居させない。」とトヨ女に錢の言葉として確約さ

れたのであった。事実、数年経って二度目の夫人を子息 J. R. パウルス氏が、他郷から迎へられたが、元舅の R. H. パウルス氏は、その兩人に全商会の別館なる大浦二十二番館に住む様に命ぜられ、別居させられたのであった。そして、その後、全子息夫妻は理想的な円満な生活を続けることが出来なかつたばかりか、却って全商会の船木サト女と新婦との性格からと云ふか、兩者間に軋轢が起り勝ちで、餘り芳しい生活が続けられてはいなかったものであった。その事は、この時から数年経って、著者（正夫）が、パウルス商会にトヨ女の両親宅から、土曜日毎に全商会の自家用車で迎へられ出入りしていたので、良く見聞していたからであった。この当時から、以前にトヨ女が、全 [194] 商会の家族の一員として暮らしていた時代の繁栄した長崎ではなく、暫く衰微の兆が現れ出した頃であった。そうして、正夫が、全商会に出入りする時代には、最早、全商会員であった数多の外国人も、大方、神戸、大阪、横浜や東京方面へ進出され、主に全商会に永らく勤めていた日本人のみの運営に任されていた。扱て、愈、トヨ女が、上海へ渡航され、全女の技能を發揮し、大いに全地で活躍された場面を展開される事を述べ、この項を終る次第である。

神戸—上海（長崎経由）航路の神戸丸の機関士某氏は、元 R. H. パウルス商会にもホームリンガー商会にも関係の深い一人であったので、トヨ女が上海へ渡航する際には、何かとなく便宜を計られて、全女が上海から長崎のトヨ女の両親宅へ食料等送る度に世話され、全女の父源次氏を全船まで呼び寄せられ、その送り物を手渡されていた。トヨ女は、正夫のためにも、亦、両親や弟妹の爲めにもと乳児用の鷺印練乳や鶏卵、その他の生活必需品等毎 [195] 便神戸丸が長崎に入港する度に、トヨ女の父が長崎出島波止場まで、トヨ女の送り物を受け取りに行かれていた。

トヨ女は、少女時代から何かと良く気がつく聡明な性質で、親、弟妹思いであった。それに、全女は藝事が、生れつき好きであったので、「好きこそ物の上手なれ。」の例への如く、その熱心な藝能の趣味があるところから、その師匠に師事して習へば習ふほど、ぐんぐん全女の藝風は上達し、磨かれて行った。

その趣味嗜好の藝事を身に着けられて来た諸藝が、「藝が身を助ける。」の例への如く、トヨ女の独立独歩の生活

の糧となり、それを維持する上に絶大なる賜であり、全女に氣強さと自信を覚えさせたのであった。その上トヨ女の人生への活躍に役立ったばかりでなく、社会の人々からは歓迎され、尊敬されて、全女の豊富な藝才や諸式の作法を辨へられたことで、上海に来ても内地と同様に諸官民からも歓迎され、重宝がられる様になったのであった。上海もその頃までは内地と同様に開 [196] け始めた時代であったので、上海の有名な江湾競馬場やその他の建設事業等もぼつぼつ施設されていた時代であって、日本人関係の店舗や料亭等も少く、従って内地人の全地への往復も少くあったので、官庁関係人以外は少数の日本人が見受けられていたに過ぎなかった。その上、トヨ女に好都合なことに、日本人の藝能を嗜めている様な関係の人は存在していない位であったので、一層トヨ女は諸官民から大歓迎攻めに会ふやら、支那人からもトヨ女の高島田髻に結ったのや、日本特殊の美しい着物を物珍らしく眺める時代相であったので、予想外の幸運を齎らす前兆とはなったのであった。それは、丁度、明治三十一年春三月の頃にトヨ女は上海に渡ると、先づ、その頃上海市に就任されていた、小田桐日本総領事や幹部の松崎氏等に面接され、これまでの自分の身分を明され、懇願された要件は、大体左の通りな請願であった。

記 [197]

一、上海市に渡航の目的は、私事にも依るが、第一の目的は確聞するところでは、本市には、未だ、日本人在住民間の慰安所や宴席場等がないので、何かと日本人会席のため不便を感じられていると思ふし、それに備へるために、定業の旅館や料亭の施設の開業許可と開始に応分の援助方の願い。

二、此れ等の諸施設に使用する人々は、幾分でも水商売等に経験ある諸氏の斡旋方の願い。

三、右の他、自分のこれまでの経験と趣味趣向を生かし、自分としても全力を傾倒し度い旨を話され、斯様な事業は、将来、必要性があり、日本人間のみならず、本市に潤いを来す基にもなる事であるから、是非、御協力、御支援をお願いし度い。

大体以上の通りな趣旨を請願されたのであった。トヨ女の斯うした要求をされる時、全女は前述の如く、あらゆる尊い場数を踏んで来られていたので、全女の場馴れした和な態度と、品位なる立場と相俟って、熱意を込めて

領事等を [198] 前に熱辨を振られたのと、その時代の未だ開けない上海市に、領事として色々の計画も企てられたのであろう。隻手を挙げて賛同され、心良く協力を惜まないことを誓はれたのであった。その第一に、トヨ女が相談の相手とされた人は、予て上海市に早くから住み、細々ながら営業されていたトヨ女と旧知の間柄であった白石六三郎氏夫妻であって、全夫妻をトヨ女は訪問されたのであった。この白石氏夫妻は、後に至って彼の有名になった上海市で、一等料亭と稱された六三亭の主人夫妻であったのである。併、此の時代の白石氏の夫人は、当市日本人租界内の上海東亜洋行（旅館経営）のゲーム係であり、夫君は全市の支那人家屋の室を借り受け、細々ながら「おでん爛酒」の店を開業されながら、全夫妻協力して前途の希望を楽しみに、企業を勵まれていたのである。丁度、その時、万にトヨ女の訪問を受けられた白石氏夫妻は、百万の味方を得た心地で、トヨ女を歓迎され、お互の久闊を話し合 [199] いながら、トヨ女の突然の来意を驚き、且つ喜び合ひ、お互の将来の目的である、一流の料亭を経営する努力と抱負を語り合い、勵まし合はれたのであった。トヨ女は特に、陰ながら全女の藝能と諸式作法の修養を以て活用され、外面からは諸官民の賛同と応援を得る機会を捕へられて働きかけ、宴会場や慰安所等の設立を目的に、企画と一流料亭を日本租界の中央に設けねば、成功の道はないと全夫妻に力説され勵まれたのであった。そこで、両者間に意見が一致し、着々、その建設方針通りに、白石氏夫妻は営業その他の準備を怠りなく努力され、一方ではトヨ女自身諸官民に接し、白石氏の営業方針の宣伝、誘致を、座席の機会ある毎に勉められた結果、一步一步と白石氏の営業を拡張され、客足も繁くなって、遂に日本租界の中央に乗り出され、今時の第二次世界大戦の終戦直前まで、あの廣大な六三亭を維持し、営業を続けられたのであった。斯うした人々の営業のためにも、トヨ女が協力を惜まなかったことは、全女が普通の平 [200] 凡な考へを持った婦人でなかったことにも依るが、一面全女の内面的勝氣と意地と自活力の旺盛な、張り切れる様な元氣と、そして、天性の容姿端麗な風格が、諸官民の氣を受けたことは争はれない事実であった。であるから、誇張して云ふならば、上海にその当時、一時に桜花が咲き、鶴一羽舞い降りた様な感に打たれ、六三亭は日々に隆盛に向い、

終には全料亭は数百名からなる美妓を置く様になり、上海市で一流を極めた六三亭となったのであった。トヨ女はこの他、全市の月廼家等の料亭の開始にも関係され、陰ながら応援され、全料亭も六三亭と並び稱される様になったのであった。これ等の月廼家料亭も、皆一流を極め、六三亭、その他と覇を競い、お互に思い思いの趣向を凝して客足を吸収し、繁栄を極めていたのであった。又、当市の一流の旅館では、豊陽館、萬歳館や常盤館と云った、有数な旅館が出現し、これ等の館主も主に長崎人関係者で、勿論トヨ女も親交があった人々であって、トヨ女が、再び長崎に到着 [201] かれて、上海市を訪れる度に、これ等の人々から特別の待遇を受けられ、トヨ女が上海市へ着く時は、波止場まで自家用車で歓迎されていたのでも、トヨ女の人柄と教養の徳の現れでもあったことは、云ふまでもないことである。

茲に、話は変わるが、トヨ女が或る外人経営のホテルの一室を借り受け、全女が藝能関係の職務に勵まれていたその当時の事であった。トヨ女は若い時から天満宮を信仰され、何処に行かれるとも、菅原道実公の肖像画の掛軸を携帯され、洋室であろうが、遠慮することなくそれを掛けられ、朝夕信仰されていた。そのトヨ女の借りていた室は、元独逸人の立派な教養のある独身の紳士が借り受け、寝泊りしていた室であった。偶々その紳士が、上海市の独逸倶楽部の集會に呼ばれ、紳士淑女の集りに列席し、酒宴が終り、お互に近くのスファアに自由に寛いで、思い思いに話しを交す人の中にあつて、全紳士もその側のスファアに微酔機嫌で、その紳士淑女達の話聞きながら、うつらうつら [202] とせんばかりに、心地良い氣分で座していた。

ところが、全紳士の座しているスファアの直ぐ隣りに、上品な美しい外国婦人が着座していたのを感じながら、その紳士は半眼を閉じながら酔い心地に耽っていた。その隣の婦人は、予て、衆目の的となっていて、十人好きのする美しい、愛くるしい婦人で、予て、倶楽部員仲間が、全女と機会があつたら近親者になろうとしていた、そう云った魅力的な美人であった。そして、互に、その美人に対して野心満々と胸の炎を燃していた。ところが、全紳士はそんな他の紳士の様な感情とは掛離れた微酔の後の心良い氣分を楽しんでいた。併、ほんの酔がさする、心の惰性からか、全紳士は身体の平均を支へ保つのを突

如失つたと見え、身体を少し曲げ氣味にする拍子に、遂い隣の美人のふくよかな膝の上に片方の手をついたので、赤面して驚いて直ぐに手を引込め、「どうも失礼しました。」と率直に謝罪したのであった。が、全婦人は思ったより教養のある婦人と見えて、全紳士に恥入らせない様に、「お互に粗忽はあるものですから、御心配なく。」 [203] とあっさり微笑さえ含めて、全紳士を慰めたのであった。並居る紳士連中は、事の以外に簡単に済んだ事を物足らなく、思ふ様に目と目をお互に見交はすだけであった。が、全婦人が立去つた後で、この事は、全紳士に取つて不幸にもそう簡単に片付けられる過失で済されないことが起つたのであった。それは、全美人の策動ではなく、そこに居合せた紳士連が、全紳士に対して決闘でも申込むも辞さない様な劍幕で、皆で全紳士の周囲に詰め寄り、多勢の面前で詰責、罵詈、雑言を浴せかけ、顔を二度と人々に会はずとも出来ない様な恥辱をその紳士に與へたのであった。それは、何故かと云ふに、欧米式の礼儀作法として故なくして、婦人の胸元や腰下部に手を觸れるのを紳士として、否人として、最大の恥辱であり、失礼極まる行為であるからであった。だから、岡焼半分にもせよ、紳士の最大の恥辱とする行為を敢えてした全紳士を、口汚く攻撃するのは当然であったが、一応全婦人に過失を謝したのに対し、全婦人はその紳士の [204] 不可抗力的な粗忽を認め許したのであるから、後は問題にはならない筈であったが、全婦人に対し野心満々の紳士連が、岡焼半分詰責し、善良な全紳士に対し、二度と頭の上らぬまでに、紳士として罵詈、雑言を浴せかけられ、皆の憎しみの目から全紳士は逃れる様に悄然として立ち去つたのであった。が、この善良な紳士は帰宅してからも自分に向けられた皆の憎しみと輕蔑の目が、眼前にちらつき、知らず知らずの間に、人の意氣地として、如何にも残念、無念の感情が高まり、従つて相手の無礼な紳士連に対して、反抗的に自決することに依つてこの無念を晴す外に道がないと観念して、遂にピストル自殺されたのであった。と、トヨ女が真実この善良な無念で自殺したこの紳士の亡靈に一度この室で遭遇した後に、このホテルの古参の支配人ボーイから、全女の熱心な疑惑的な問責に対して、白状し物語つた実話である。と云ふのは、トヨ女が初めてこのホテルの一室を借りた当時から、何か解らないが、時々悪夢や物怪

に襲はれる様な雰囲氣に鎖される思いがしてならなかったので [205] あった。トヨ女は、ホテルのボーイが話して呉れた様な自殺した独逸人の紳士は、勿論会ったことも亦、以前に知り合った人でもなかったが、そのボーイが白状した全紳士の顔と、トヨ女の見た顔が符合していたのには、兩人とも驚きの目を見張ったのであるが、その自殺した紳士に一度だけ、その室の窓から突然現はれたその紳士が、トヨ女に笑みを含んだ顔をして、じっとトヨ女を真実見詰めていたと話すなら、読者は屹度、「そんな馬鹿氣な事を云ふのは、非常識極まる。」と著者を嘲笑されるに違いない。併、この世の出来事で、如何に化学が発達した現在に於ても、その化学に依って靈魂を分析し、研究されたことを知らず、而して、水蒸氣から水量を得ることは出来ても、靈感と云ふものは無形の物であるから、掴むことも見ることも出来ない様に、物体を見なければ、判断を下すことも不可能事であるところから、人々はよく、「知らぬが佛。」と云ふことになるのであると思ふ。事実、トヨ女は、確信を以て、著者に始めてその紳士の亡靈に遭遇されたことを語られた儘を、記帳を辿り連作した次第であるので、「靈魂不滅」と昔から研究され、体験されて来た事実も少くないの [206] で、その意を語とせられんことを望む次第である。扱て、丁度その自殺した紳士が出現したその日は、トヨ女がいつもの藝能関係の用務を果し、やっと疲労を覚えた身体で帰宅し、空氣の流通を良くするために、第一番に窓を開ける積りで、カーテンを引き、ガラス窓の戸を開けると同時に、突如色白の柔和な面体をした一外國紳士が、カイゼル髭を鼻下に貯へ、ニヤット笑みながら、はっきりとトヨ女の顔近くに現れたのであった。普通の女性ならば、「キャツ」とか、「スツト。」か叫び、目を廻し氣絶せんばかりに驚くところであるが、前述の如くトヨ女は至って大膽で、信仰心に厚い性格であったので、何の臆するところもなく、詰問する様に「何のために、此処に現はれたのです。此の室は現在は私が借用し、室に居る権利は私のものです。どんな怨があつて死なれたかは知りませんが、以後はここに現れないで下さい。だが、これも何かの縁でせうから、あなたの冥福を祈つてあげませう。と一氣に [207] 捲し立てる様な氣構へで、この亡靈に申し渡されたと思う中、その紳士の亡靈は、すつと掻消す様に見えなくなったのであった。ト

ヨ女もその時は、心の緊張から開放され、「ホット」した氣持にかへり、早速例の天満宮の掛軸を、その亡靈が現れた窓脇の壁に掛けて、暫くその靈に黙禱を捧げ、その儘その軸物を掛けておかれたのであった。その後は、その亡靈は現はれることなく、安らかに過されたのであった。とトヨ女が、その当時の不思議な事に遭遇した事実を著者に語られたのであった。トヨ女は、その亡靈の出現した後に、早速そのホテルの古參のボーイを呼び寄せ、その亡靈紳士の人相、骨柄を告げて、如何なることがこの室であったかをそのボーイに問ひ糺されたので、その事件の全貌を明にされたのであった。と云ふのが、この実話である。「靈魂不滅」この宗教上の字句の通り、何事も身を以て体験して見て、始めて人間は悟りが開けるのではなからうか。トヨ女は常に著者に [208] 述懐されていたことは、「自分自身はどうして現在まで、諸人のためにのみ助力し来つて、自分は落着間もない位に愉快に働き、活動して過して来たので、行先々でその人々から歓待や歓迎を受けたことは誠に有難く、嬉しい限りに違ひないが、自身のため独立して、何故一旅館でも開業發展させて暮さなかつたかと、自分でも不思議でならない。」と、過ぎ去つた昔の面影を辿る様に或一点を見詰めながら、「只自分は、人の為め、世のために自身の能力を發揮して、活躍させられる様に生れ着き、宿命づけられて来た者であろう。」と微笑みながら、「人の踏むべき悟」を体得した様子で、感慨深氣に過ぎ去つた自身の足跡を思ひ起す様に語られたのであった。トヨ女の斯う云つた、この世の複雑な、そして数奇な体験談を見聞するにつれ、著者の脳裏に映ずるものは、「此の世の人々は現世に生れ出た時から、宿命的に周囲の環境から来る、社会の感化力や性質から来る特性に依つて、芽生えて来るものであり、善惡に依らず、無意識の中に夢多き人々の辿 [209] る目標に向つて進む者もあり、亦、運命的に何かの障害や災厄に打当つて、その独自の運命に拘束され、支配されて行くものではなからうか。」と。そして、亦、「このトヨ女ばかりでなく、夢多き若かりし時代の出来事や、数多い浮世の過去を持たれる人々の間にも、トヨ女の斯うした思い出と同様に、若くして何かの思いの希望と理念に燃える元氣に満ちた時代の事を想起される人々も、多少に拘らず、現存されるであろうことを思い廻し、著者のこの胸深く染み入つて来る

のを覚えるのである。」現在、著者としても、今は亡き母トヨ女の面影を今更ながら脳裏に呼び起しながら、或一点を見詰めて瞑目していると、色取々の過去の思い出が、残像となって甦えり来たって、著者の眼底に懐しい、慕はしい感情が盛上って来るのである。

終り

青石

杉本正男

自宅 長崎市桶屋町二一